

# 演劇会議

発 言	1
なかまの素顔 II	2
改めてリアリズム演劇とは	作 間 雄 二 4
■ いっせい地方選挙と劇団活動	
演劇は観客とともに創るもの(大阪)	森 本 景 文 8
ミノベヒカリとハタノヘドロ(東京)	能 村 達 也 11
創造体制死守の軌の中で(川崎)	中 沢 研 郎 13
ままならぬは劇団運営(大阪)	山 崎 喜 正 15
再説劇団経営論	こばやしひろし 17
■ 東西演劇研究会	
近畿ブロック「創造研究集会」	小 松 徹 22
中国ブロック第3回「創作学校」	柏 原 武 蔵 24
教育部会での問題点	塚 田 恒 夫 26
創作部会に参加して	中 川 恵 司 28
つぎの創作部会のために	矢 野 喬 30
関西における戦前プロレタリア演劇の研究 [5]	大 岡 欽 治 34
■ 劇 団 通 信 誌	39
■ 劇 評	
「土の会」への手紙	萩 坂 桃 彦 51
「賢女気質」を語る座談会	藤 沢 薫 ほか 54
「人形師卯吉」と人間座	作 武 司 57
「ロミオとジュリエット」(演集)を観て	栗 木 英 章 59
「呑んだくれ」(月曜会)を語る	栗 原 省 ほか 61
京都府民劇場の郡部公演オルグ	若 田 鉄 雄 64
■ 戯 曲 ■ 鉛 筆	柴 崎 卓 三 67

## 映画シナリオ

# 郡 上 の 立 百 姓

¥200  
〒 65

原作・こばやし・ひろし 脚色・山形 雄策

解 説	宝暦騒動と郡上の立百姓
映画化の呼びかけをかねて	山 本 薩 夫
誇 り	平 野 三 郎
一つの要求から新しい文化を	美 濃 部 亮 吉
郡上の立百姓の映画と劇団と私	こばやし・ひろし
脚色にあたって	山 形 雄 策
丸いばっかじやだちかんぞ	高 橋 稔 一
対 談	滝 沢 修・杉 村 春 子
私たちのふるさと郡上	野 田 直 治・鈴 木 義 秋
	千 葉 稔・長 棟 准 教
いつまでも生きとるもの	黒 沢 参 吉
農民のいぶき	仲 武 司
映画化に期待して	山 田 和 夫

### お求め先 映画郡上の立百姓製作委員会

岐阜市西野町1丁目 劇団はぐるま (☎ 0582-62-1652)  
 東京都港区高輪 3-19-31 全国労演内  
 東京事務所 (☎ 03-445-0761)

取次所 演劇会議発行所 川崎市小田 4-28-17 (044-33-0775)

# 発言

て兵庫県や神戸市が、大独占資本や自民党政治の支配である限り、私達働く者の「文化」≡「文化思想」は「支配的」になり得ないが、でも働く者が全人口の九〇%以上をしめていることを考えるなら、働く者の立場に立った「文化」や「文化思想」というものをもっともっと強固なものになってよい」

これは、最近神戸に生れた「民主文化」という政治新聞からの抜粋です。このあと、映サが千五百、労音が二千―二千五百、そして労演が四千―五千と、神戸の文化状況の沈滞が述べられています。それは、そのことでは全く正しいでしょう。しかし、エンゲルスの言葉を聞く度に、私は非常に複雑な思いにとらわれるのです。

かつて、一人の先輩が私に云った事があります。

「色々いうけどねえ、例えば雁治郎と一緒にテレビに出ていてもやっぱりうまいよ。そして、革命が成功してもあの人はやっぱり演劇運動の中心になるんだよ……」

それは、スタニスラフスキイ、梅蘭芳等の例を待つまでもなくやっぱりそうなんだろうと思うわけです。

そうすると、私達は、現代も未来も決して支配的になり得ない状況で、何を演劇しようとするのか。

次の疑問はそこから出てくるのですが、ほんとうに支配的になり得ないのかと云うことなのです。

「その国の物質的支配勢力が、当然その国の文化的支配勢力である」という命題は、悲しいほど強固であり、先ず、貧弱なチラシとポスターと、そして一本の足と口

「こんな良いものならもっと沢山連れてきたのに」といふ、なにげない観客の声を、幾度となく悔し涙で聞いたことなのです。だから、だから最初の抜粋の後半のように簡単に云切ってしまうと、なんともやりきれなく「その通り九〇%以上働く人達がいるのに何故だ」と、逆に居直りたくなるわけです。

実は、この二つのことは正に根本的な問いかけではないかと思うのですが、その事での本当の答を持たぬまま進んでいるのではないか。だから、質を誇らずに、いたずらに量を誇り、数字に還元することで文化運動そのものをはかれるような錯覚におち入る。映サは何千、労音は何千……。選挙にしても投票数だけが変革のエネルギーではないのに……。

おそらくそんな事は思っていないと云われるかも知れない。でも私達の、いわゆる狭義の文化は、どんな場合でも、一対一の伝播力しか持たぬこと、そこに醸成される人間性を飛び越えて、「大衆」とか「働く者」等と概括しては、決して支配的な文化にはなり得ないし、「何故五百円出して君達の芝居を観に行かなければならないんだ」という間に、簡単にへこんでしまふわけです。

結論を急ぐのは残念ですが、プラグマチズムと云いますか、自分にどう有益かという事でのみ、価値判断をしようとする傾向、これとの闘いが、実は緊急な使命ではないかと思うのです。

正に、指標を失なおうとしている我々を、はっきり導く、清新なリアリズム論を、特にこの「演劇会議」に期待する訳です。

(岸本)

躍動の70年代にこたえる

イキイキした演劇活動をおしすすめるために

## 第11回東・西演ゼミナールに結集しよう!

1971年8月21日(土) → 22日(日)

★ 東会場 = 静岡県浜松市清風荘  
(東海道線 浜松 のりかえ 新居浜 下車)

第1日(8/21) ■ モデル上演 劇団からっかぜ「獅子」/ 交流と懇親の会  
第2日(8/22) ■ 分科会「私と演劇のかかわり」/ 講演 三島雅夫氏  
遊泳・レクリエーション(新居浜海岸)/ 全体会  
東演ゼミ = セミナールに先だち同一会場で8月20日・夜~21日・午後

★ 西会場 = 広島県佐伯郡湯来町 湯来温泉 湯来ドッジ  
TEL 082982 上水内局 140・141

(広島バスセンターより広電バス 湯来温泉行/所要時間 1時間40分)  
(なお、第1日目 PM 5:30 特別にバスをチャーターしてあります)

第1日(8/21) ■ 報告 「地域と私の劇団」  
生活舞台・福演・四紀会・いこら・息吹・未来・人間座  
■ モデル上演 劇団京芸「悪魔」(チエホフ 作)  
詩朗読 木々の会・生活舞台 / 合評会・交流会  
第2日(8/22) ■ 講演 「今日の文化状況」同志社大教授 安永武人氏  
■ 分散会 「地域に責任をもてる劇団になるには」 / 全体会  
西演ゼミ = セミナールにつづき同一会場で8月22日・夜~23日・午後

時程、会費、その他は別にご案内します。

連絡申込先 ■ 東演事務局 静岡市昭府町 289-2  
劇団京芸 TEL 0542-71-7337  
■ 西演事務局 大阪府茨木市駅前 1-9-21  
森本景文(未来) TEL 0726-23-3539



千葉邦子さん

— 劇団 さっぽろ —

とりまく家族のことやその他のことが、千葉君を、ぼくたちの仲間へ突入させ得ない、ぐらつきの原因だったように思っています。

「もう少し考えなおして、どうしてもという時に、あらためて入団の決意を固めたら」という彼女にしてみたら非情におもえた、ぼくたちの言葉に、涙をうかべて、立ち去っていった千葉君が、昨日のことのように思い出されます。

それから一、二年過ぎて、入団の決意をもって訪れ、ぼくたちもそれを認めて、仲間に加わってからもう三年以上になりました。やはり初心の内に秘めた演劇への情熱は、確かだったでしょう。

それ以来、小道具作りとか、旅公演では、音のオペレーターをやりながら、創造の仕事と集団の組織づくりに参加してきたのが、彼女の今までの小さなあゆみですが、当初、役者の仕事を専門的にやって行こうとは、彼女も考えていなかったようでした。むしろ役者の仕事より、美術関係の仕事をやっていたと考えていたようでしたが、専門劇団とはいえ、少数の人材しかない悲しさでついに、彼

まず、原稿のおくれで、編集部に多大の迷惑をかけたことをお詫びいたします。

前号までの、東西り演の先輩たちのあとに経験浅い、新人、千葉邦子君を紹介します。

彼女は一九四七年生れの札幌っ子。

地元の大谷高校を一九六五年に卒業。三年間演劇部で、小道具をやったり、舞台に出たりのあけくいで、高校生活を送ったそうです。

たしか、卒業の年、入団希望をもって、劇団さっぽろを訪ねておりますが、その時は両

者の条件がおり合わず、時期をおいて考えなおそうということになりましたが、劇団側はこの態度に大へん不服な表情で、ぼくの顔などを見つめていたことなどを思い出します。

その頃の千葉君(劇団では、チバちゃんと呼んでいます)は、一見文学少女のようなひよわなところがありました。半面何かを思いつめているような、内に秘めた、ある種の情熱みたいなものを発散させていたのは確かでした。

条件がおり合わなかったのは、確かいまひとつ演劇への姿勢が軟弱だったのと、彼女を

女を舞台に立たせる破目に追いやってしまいました。

初めての舞台が、確か、「ブレイメンの音楽隊」で、その後、一般公演の「若者たち」そして、学校公演の「ブチコット村へ行く」の主役ブチコットの役をこなすまでになりました。

この過程の中でも、彼女は、極力、役者になることを嫌っていたようでした。それを何とか説きふせたのはぼくですが、やはりそれには時間がかかりました。

彼女には、トコトン自分で納得しなければゾウのように動かないガンコさがあります。それは意志強固とかいう種類ではなくて、なにか強情な一面がそうさせるのです。

だからこのことで、集団の中で、矢面に立つ時もありますし、本人が直していかなければならない課題でもあります。

でも、彼女の芝居は、ふしぎと自然で、素直です。強情な反面、素直な性格を、実は持ち合せているのでしょうか、或は、不器用なせいなのか、恐らく両方ないまざつての結果かもしれません。

昨年、彼女が腎臓をやられました。学校公演、七〇年演劇行動などの過労のためでした

共計という劇団の台所を預りながら、事務局として懸命になっているのは心強いことです。そのため、(勿論、全員の働きがあつてのことですが)昨年は、念願のトラックをかうことが出来ましたし、今年も別な車を買入れるメドも立ちました。

いままも昨年度の決算と、今年度の予算作成に連日連夜、数字と取り組んでいます。

昨年、彼女は腎臓をやられました。学校公演、七〇年演劇行動などの過労のためでした。劇団運営の面でも、役者としても、これから劇団の中堅になっていく人材だけに残念でした。

そのために、昨年の後半から、学校公演には参加出来ず、現在も過剰な労働は出来ません。しかし、今年は、自重しながら、なんとか学校公演に参加出来るので、巡演班が強化されるのがたのしみです。

チバちゃんよ。

これからのいい役者になるためにも、自己を確立するためにも、君のゾウのような小さな

眼を、時には、キッと見開くことだってしなければなりません。

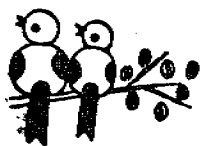
君の顔の中央に、チンマリ座っている可愛い鼻で、世の不正を悪事を嗅ぎ分ける力も身につけなければなりません。

そのための勉強も必要だし、いろんなことから学ぶ力を、日常の中から、養う心がまえが大切です。

そして、東西り公演の先輩女性から、多くのものを学んで、北海道の民主的文化運動の戦列で、よい仕事をしてくれるよう。

そのために、君を、全国の先輩、仲間たちへ紹介しました。

(吉川 雅喜)



# 創作部会に参加して

・改めてリアリズム演劇とは・

作 間 雄 二

(弘前演劇研究会)

はじめに、創作部会の(同時に教育部会の)成功のために、なみなみならぬ御努力をかざられた、(劇団やまなみ)の、梅津さんはじめ劇団の皆さんに、本当に御苦労さまでした、と感謝申し上げます。また、第一日終了後、各部屋ごとに、水?の御配慮があつて水呑み?の私は大変たすかりました。

帰途、(労芸)の能村さんの車に乗せてもらい、萩坂さん、(京浜)の城谷さんと一緒に帰京したのだが、日曜日でありしかも快晴だけに、レジャー客でいっぱいだろうから、そうとう時間かかるぞ、車中皆して話し、覚悟していた。覚悟していた程ではないにしても、やはりレストハウスや、ドライブインには、行楽客の賑わいはあつた。その日は十一日、新聞流に言えば、七〇年代冒頭の政治戦いっせい地方選挙前半戦の投票日であつた。東京では注目の都知事選である。両部会参加

やないか、と思つたことがあつたところからだが。作家は先輩として後輩に、後輩から先輩に、また作家仲間には仲間同士として、どんなところから、どういうふうに関つていくのか、触発し、されていくのか。創作とは、教えられるのか、教わることができるのか。教え、教わるのできたとして、限界は、あるのかないのか。また、ある作家が、書けない書けないと言っている。本当に書けないのだろうか、書かないのではないか。集団(劇団)があり、喜んで信頼して演じてくれる俳優たちが其処にいても、書けないと言ふのだろうか。安直なところから書き起こして、若い人がいる。他人事でなく、肌寒さを感じる。私の場合、来年こそは、来年こそはで、三十代半ば過ぎてやつと書きだしたからそういう若い人の仕事に怖気をふるうのだろうか。そんなこんなで、我々東リ演の創作部会は、もう一つ二つの根のところへ下りていって見る必要があるはしないか。人間を描ける人生を書け、言葉を選べ、だからどういふうに。その手前で、声をあらげて議論してもなんにもならない——と私はそう思うところで、面白くない、空しさが残る、という想いに沈む結果になるのだろうか。

の私たちは、不在投票を済ましてきている。親子連れのマイカー族を横目に、この人たち棄権組かな、とチラリ頭をはしる。しかし、意外とはやく、川崎に着いてしまった。来るときより楽だったと言ふ。やはり、此の日、多くの人は春の行楽に出なかつたのだろう。東京に限って言えば、七二・三六%の投票率がそれを物語っているようだ。それやこれやの話しを、能村さんの家で酒を御馳走になりながら交したのだが。能村さんとの出逢いは十六年まえ、私の(文化座)での初舞台で、

彼は(劇団十五人会)から客演していた。奥さんは(労芸)の女優さんで、昨年の大洋ゼミナルの分科会で、私の発言に対して「オ前は封建的である」と反論した女性である(と、この日わかつたのだが)、こういう因縁話が私は好きなので困る。

萩さんと別れるまえに、薄ノロの駅前の大衆食堂で呑んだ。またまた、リアリズムとは

具体的にである。具体的に、ということはある作品の、第何頁の第何行めを、褒めたり貶したりすることではないだろう。もちろん部分的批判を無駄だと、言っているのではない。無駄どころか、部分的欠点がある作品の全体的、本質的欠陥につながっていることがある。私は、理論信仰よりも、実感情信仰の方を選ぶとしたら、選ぶ人間だが、それでもやはり、批評は、具体的にその作家の方法論手法論に触れるところから始まるものだと考えている。そうでないと、運動としての積み重ねが生まれない。ここで言っておくが、私は、方法論とはその作家の世界観であり、思想であると考えている。例えば、久保 栄の場合、「生産部面を基底にして、その上に総合的な社会像を、比重正しく描き出す」というふうな。木下順二の言葉を借りれば、「ドラマトウルギーとは思想である」というような。手法論とは、我々の場合は哲学の問題ではないのだから、方法論から必然的に選び出される、表現技巧と分けて考えている。

東リ演で言うところのリアリズムとはどういうリアリズムを標榜しているのだろうか。と言うのは、リアリズムと言つたって、御存知の如く、いろいろある。「劇作派」の(世態

なんだ、という話になる。「どうも、オレは、創作部会は去年の熱海、今年の今日と二回めなのだが、面白くない、空しさが残る。どうしてなんだろう……」と言つと、萩さんは、「オ前さんが勝手に一人でそう思つてるんだらう」と応える。「そうかな、そうかな本当にそうかな……」。積みあげていくものがないような気がする。去年から今年へ今年から来年へと、重なっていく作業みたいなものの、見通しが見えない。尤も、創作運動ってそんなものかもしれない。

かくして、私は此の原稿を書かなければならない、自業自得の羽目に陥る。ただし私なことわるまでもないが、評論家ではないし、理論にも弱い、ただ一介の戯作者にしかすぎない。だから、改めてリアリズム演劇とはと問いなおすにしても、畢竟、工事現場的な発言、楽屋的な問題提起になると思う。また演劇といつても、此の場合、戯曲が主である。前述して、創作運動ってそんなものかもしれない、と言つたのは、私がある時期、ある、シナリオ研究所に通つていた時、「作家とは在るのであつて、成るのではない」という講師の話しを聞いて、じゃあ高い月謝払つて研究所に通つてオレたちは、莫迦まるだしじ

的リアリズム)から、(チブル進歩的リアリズム)から、(革命的(反資本主義的)リアリズム)まで多様である。また多様に存在し得る我が社会である。今更の話しで恐縮だし、確かに、「演劇会議」等の折りおりの、どの記事をとってみても、「加盟のしおり」でも、我々が、東西リ演が志向し、探究しようとしている、リアリズムなるものの姿は見えてくる。「リアリズムの内容は、いかなる階級にぞくし、いかなる観点から現実をとらえるかによって変つたものとなるという見方が、反映論としてではなくして、一般的な概念として成り立ち得る」と、菅井幸雄は言っている。「(現実変革をめざすリアリズム演劇)という立場について、われわれのいう(現実変革)とは、人民の解放をめざす労働者農民に依拠した階級的立場での一致点を前提にしたものであり、今日の人民解放の道としての統一戦線の思想を、演劇実践のよりどころとしてきた」と、「演劇会議8」で土屋清が報告している。此れほど見える見えるリアリズム論はない。が、しかし、では我々のリアリズムは、(社会主義的リアリズム)及至(革命的リアリズム)かとなると、いわずれにしても、然りノとすつきり返事がかえつ

てくる感じはない。「お互いの自主性、独自性を尊重しつつ、しかも、全体として高い統一性をとめていく協同体」に一つの方法論をおしつけることはできない」という声なきこえてくる感じの方が強い。また、《社会主義的リアリズム》及至《革命的リアリズム》は、《私たちのリアリズムは流派ではありませんが》という流派なんだろうか。(《——の引用はともに「加盟のしおり」から)、とすると、それからどうなるのだろうか。せつかく「見えてきた我々のリアリズムは、流派を恐れて(流派—とは、芸能などで立場・形式などを異にする分かれた一派—と一応認識して)それ以上、具体的な展開、積み重ねができなくなるのではないか。でありながらまた《創造や運動の理論を深めることは極めて重要》だと言っている。理論とは、十のものを原理・原則によって煮つめ、突きつめ、そうして生みだされた、一つの基本ではないのか。だとしたら、言うところの《流派》にならざるを得ないのではないか。勿論、我々の仲間うちだけで通じあう、閉鎖的な、硬直した理論を東西リ演に持ち込むようなことはいままさら考えられないことだ。だから、菅井幸雄の言を、原理として認めるならば、《流

派》を恐れず、土屋清の言うところのものを、創造的に展開していつていいのではないか。私の此の場合、そう進めてみよう、ものは試しである。

「芸術と人生は切り離せない」という言に俟つまでもなく芝居とは人間を描くことだ。その人生を書く、ということは人間を生み出す。人間を創り出すということだ。その意味は、体制側の《期待される人間像》の、向こうを張って、我々の側の、反対側の《英雄像》を、人民(労働者農民)の連帯のために、逆には労働者農民(人民)間の断層を埋める作業として、アクチュアル(アクチュアルティ

複雑にしてしまい、己れの足をとられてしまふのではないか。エロ・グロ・ナンセンス漫画の氾濫を、今日の社会的必然的要求の結果だというが、実は頭打ちの出版業社が、窮余の一策生み出した商賈でしかない。現に今、数種類のマンガ雑誌が休刊しはじめている。それを状況とし、複雑だとするのであるうかあらゆる《政治的》なものに、絶望し苦悶し続けた或る文学者は「いついかなる状況のもとも、変ることのできない基本的人間関係を」追い求めていたという。現象は複雑であるとするれば、確かに現われかたは多様であるう、しかし、底流する現実歴史にはそれほど変っていないのではないか。

人間をとりまく状況を、どうとらえるかに方法論の効果性の有無がかかっているように思える。私はアクチュアルにとらえようとする。よく状況は複雑であると言う。だが、この事に迷い囚われると、複雑でない条件まで

うむ、まあね、と言った学生の顔にあった。私に対し、貴様は日本の青春像とか、青年像とか偉そうに喋りやがって、「秘密」なんかを芝居にして良い気になっていやがるが、沖繩の青春を知ってるか？沖繩の青春を知らないで、日本の青春を語るのには傲慢だぞ！と若い、この中年男を叱ってくれ。さすれば深くふかく頭を垂れよう。だから、諸君よ、諸君の本当の、心の核の裏側を語ってくれ。イジーなこと言っていないで、東映の博徒映画や、状況劇場に熱をあげ、マンガに読み(見?)耽けり、ときには母のない子のように、ヘルメットと竹竿でゲバりに街へ出ていくのだが、何故いっぽうではそれほどまでに《高橋和巳の世界》に心をよせるのか、それを語ってくれ。空しい心を、他人に語るの人間恥ではないのだから。それが、変わらぬ青春の姿ではないのか。

創作部会で、青年を、日本の青春をどう描くかという話しの時、こういう話しがでた。映画「イジー・ライダー」が、わからなきや、オレ達の青春なんか理解できませんよ、と若いのに言われたというのだ。私はその映画を評判だと知っていて、観のがしていたので、その時ああ残念だったなと思った。それで弘前へ帰ってきて、何日かして喫茶店でその映画を観たという、ヒッピースタイルの学生にその話しをしたら、こう喋った。

アンタは少くとも作家なんだから(少くともと言いやがった)、人間が読めなきや仕方がない。でもね、わかったとしても信用しないな。

私 なぜ……？

学生 いや、アンタがあの映画に感動したからって、いや、感動こそ理解だかんね。どこに感動したかね、きつとオレ等とは別なところだと思うな。別々な感動、てことは別々な理解だもんね。

私 キミ、川島雄三って知ってる？「幕末太陽伝」って知ってる？「波止場」「エデンの東」って映画観た？

学生 川島ってえのも、幕末も、ナンとかってえのも知らないが、このまえリバイバルで「エデンの東」は観た。

私 感動した？

学生 (ニヤツと笑って)うむ、まあね。私 信用しねえなノ戦争に負けてまだ十年とたたねえ、まだオレ達の疵は膿んでいたそんな軀で観た、泣いた映画だ。オマエ等にわかってたまるかノコーヒー代はいらねえから、帰んな……。

劇行為を欠いた劇はリアリズムではない、と「演劇会議13」で田畑 実が書いた(リアリズム演劇についての試論)。私は典型的人間のない劇はリアリズムではないと言いた

私 感動した？

もう枚数も尽きる、私の力も尽きた。はたして、問題提起にすらなりえたかどうか、自信はない。しかし、私にとっては良い勉強になった。芝居を書いて生きていく(それで喰っていくという意味ではない)ということはい

私 感動した？

きたのではない人間。山本周五郎は、人間は死ぬまでしか生きられない、と言った。だから創作者は一分一秒を大事に、創作にかたむけなければいけない。山周は、冷徹な目で、生きることの「空しさ」を凝視して逃げなかった。だからこそ山周の文学世界は冷徹のうちにも暖かく、嘘の人間がいなのだろう。山周文学はリアリズムである。彼は、筋がきまっても、すぐには書きださない。人物や、その性格やその場面がきまっても、「おい！」と呼びかけると、人物が「はい！」とこっちへ振りむくようになるまで、あたためる。その時代の社会構造風俗習慣といった考証は丹念に調べたという久保 栄は言う、「リアリズムは、ディテールの正確さのほかに、さまざまな典型的な境遇のもとに、さまざまな典型的性格を描くべきだ」。山周の小説作法はこの言葉を実現していかないか。

私 感動した？

もう枚数も尽きる、私の力も尽きた。はたして、問題提起にすらなりえたかどうか、自信はない。しかし、私にとっては良い勉強になった。芝居を書いて生きていく(それで喰っていくという意味ではない)ということはい

私 感動した？

きたのではない人間。山本周五郎は、人間は死ぬまでしか生きられない、と言った。だから創作者は一分一秒を大事に、創作にかたむけなければいけない。山周は、冷徹な目で、生きることの「空しさ」を凝視して逃げなかった。だからこそ山周の文学世界は冷徹のうちにも暖かく、嘘の人間がいなのだろう。山周文学はリアリズムである。彼は、筋がきまっても、すぐには書きださない。人物や、その性格やその場面がきまっても、「おい！」と呼びかけると、人物が「はい！」とこっちへ振りむくようになるまで、あたためる。その時代の社会構造風俗習慣といった考証は丹念に調べたという久保 栄は言う、「リアリズムは、ディテールの正確さのほかに、さまざまな典型的な境遇のもとに、さまざまな典型的性格を描くべきだ」。山周の小説作法はこの言葉を実現していかないか。

私 感動した？

きたのではない人間。山本周五郎は、人間は死ぬまでしか生きられない、と言った。だから創作者は一分一秒を大事に、創作にかたむけなければいけない。山周は、冷徹な目で、生きることの「空しさ」を凝視して逃げなかった。だからこそ山周の文学世界は冷徹のうちにも暖かく、嘘の人間がいなのだろう。山周文学はリアリズムである。彼は、筋がきまっても、すぐには書きださない。人物や、その性格やその場面がきまっても、「おい！」と呼びかけると、人物が「はい！」とこっちへ振りむくようになるまで、あたためる。その時代の社会構造風俗習慣といった考証は丹念に調べたという久保 栄は言う、「リアリズムは、ディテールの正確さのほかに、さまざまな典型的な境遇のもとに、さまざまな典型的性格を描くべきだ」。山周の小説作法はこの言葉を実現していかないか。

私 感動した？

きたのではない人間。山本周五郎は、人間は死ぬまでしか生きられない、と言った。だから創作者は一分一秒を大事に、創作にかたむけなければいけない。山周は、冷徹な目で、生きることの「空しさ」を凝視して逃げなかった。だからこそ山周の文学世界は冷徹のうちにも暖かく、嘘の人間がいなのだろう。山周文学はリアリズムである。彼は、筋がきまっても、すぐには書きださない。人物や、その性格やその場面がきまっても、「おい！」と呼びかけると、人物が「はい！」とこっちへ振りむくようになるまで、あたためる。その時代の社会構造風俗習慣といった考証は丹念に調べたという久保 栄は言う、「リアリズムは、ディテールの正確さのほかに、さまざまな典型的な境遇のもとに、さまざまな典型的性格を描くべきだ」。山周の小説作法はこの言葉を実現していかないか。

なんだから、リアリズム演劇の本質を日常的にさぐっていきこう。我らのアクチュアルな英雄像を創造していきこう。そして戯作者の宿命として、彼ら登場人物の、そしてそれ等を演じてくれる役者さんたちの、便利屋にな

## 地方選挙と劇団活動

### 演劇は観客とともに創るもの

森 本 景 文  
(劇団 未来 大阪)

三月六日の社会党・共産党の選挙協定調印を機に、大阪の全民主勢力は、統一と団結をかため全力をあげて闘いぬぎ、黒田了一大阪府革新知事を実現した。

三月十三日に開かれた「黒田了一さんを励ます学者・文化人・宗教者・医師・法律家の会、発足のつどい」で、文化人を代表して劇団潮流の大岡欽治さんは、弁護士会館を満員にした五百人の会員を前にして、

今日、この会場に鳴りひびいた劇団未来の太鼓は、選挙期間中ずっと鳴り続けるだろうし、「おはよう大阪」の創作曲をうんだ大阪のうたごえは、全府下のすみずみまで浸透していくでしょう。私たち演劇人の

れたらと思う。以上である。大方の読者諸先輩の叱正に俟つ。

参考とした書・「久保栄研究」・「リアリズム演劇論」菅井幸雄・「わが山本周五郎」土岐雄三

従来の選挙へのかかわり方は、候補者の推せんをする位でしたが、今回の知事選挙は演劇・文化を武器に闘いぬきたい。と決意をのべられた。

三月十六日、降りしきる雨の中扇町ホールで開かれた「革新府政をめざす府民大集会」は、会場に入れきれず場外のスピーカーに耳を傾ける人も含めて、大阪始まって以来の三万五千人の大集会となった。そこには、黒田さんをどうしても当選させねば……という熱気が充満していた。統一の大きさという見事に体现した集会であった。そして、投票日前日の四月十日の午後、文

化団体の太鼓・踊り・アコーディオン・合唱・ぬいぐるみ人形を中心に、青年・婦人一人が大阪駅から淀屋橋までを、黒田さんのシンボルカラー緑で埋めつくした「御堂筋グリーン大作戦」を頂点として、大阪中の文化団体はあらゆる能力と知恵をだしつくして奮闘した。

関西芸術座は、候補者カーのウグイス嬢、演説会、宣伝カーの弁士、そして、婦人大決起集会での黒田さんの人柄を伝える寸劇の上演など――。

劇団潮流は、演説会・宣伝カーの弁士など人形劇団クラルテは、ギニョール人形による人形劇の上演、ぬいぐるみ人形によるデモンストレーションなど。

演劇集団息吹は、太鼓・民踊をもって八尾地域を細かく公演した。(このことについては、別項息吹よりの報告参照)

劇団2月は、ぬいぐるみ人形と、御陣乗太鼓による宣伝隊と、宣伝車のウグイス嬢、応援弁士など。

その中で貴重な経験と教訓は、各劇団の中で蓄積されていることでしょうが、私は掴みきれないので、以下は劇団未来の体験を報告することで、この原稿の責をはた

たい。

劇団未来では、三月二十二日、西宮市民会館での「われら兄弟」の最終移動公演打ちあげ後、六月の参議院選挙終了まで、小型作品をもって大阪府民の中にとび込み、できるだけ多く公演をもつために劇団活動を集中することを意志統一していた。

大阪の地域に根ざした創作劇を中心に、いわゆる一晩物の芝居をつくり、まず大阪の中心部で上演し、以後、約半年をかけて、大阪の衛星都市のいくつかで移動公演を行う大型公演と、こういった劇場へお客さんに来てもらうのでなく、劇団の方から観客の居る所へとびこんでいって、いつでもどこでも上演できる小型公演とを劇団の二本足の活動と考えて歩んできた劇団が、選挙を劇団活動の一環としてとらえたのは当然のことであった。

劇団の小型作品には、ラジオ中国芸能員労組文工隊作の「ムードのある詩」「列外三名」「のみの話」こばやしさんの「ペトナムの炎は消えない」と、民謡や民舞・日本の太鼓などの二つの系列がある。

今回の選挙で活躍したのは、後者の系列で

一九六五年に劇団の第二回公演として上演した「やまざき山の稲女」の中で唄と踊りを体験したことにより民族的な小型作品へのとりくみが始まった。その後、大阪府首民族伝統例会出演でほうねん座と交流したことや、劇団民芸の「郡上の立百姓」賛助出演の中で唄や踊りを教わったことから、次第に定着していった。

そして、以前から太鼓に素養のあったU君が、大阪労音の太鼓教室へ入学するなど、日本の太鼓への興味が増し、「新島太鼓」「八丈島太鼓」「八丈島太鼓ばやし」「治郎兵衛太鼓」とレパートリーを広げていった。

一九六八年の夏には、物語り性のある太鼓をつくりだそうということで、男性五名、能登半島輪島名丹部落へ「御陣乗太鼓」の取材にいった。この「御陣乗太鼓」は、一年がかりの稽古のち、一九六九年夏、劇団未来「御陣太鼓」として陽の目をみたのである。

劇団では、票よみ・カンパ・劇団行動のまとめと、選挙事務所との連絡をしてもらっために「選挙係」を設け、要請に応じてすぐに動ける体制を敷いた。そして、選挙係によって情勢や行動を知らせるニュースが連日発行

された。

三月まで動いていた私立保育所の保母助手の仕事、保育所で要らなくなったからとやめさせられたKさんを、政策宣伝カーのウグイス嬢に、軽自動車で団地まわりの八百屋を仕事としているN君に仕事を休んでもらって東京から選挙応援に来阪してくれる文化人の世話係にと――二名の常任を知事選挙の事務所へ派遣した。

他の劇団員は、できるだけ仕事のやりくりをして休暇をとったりして、知事選で延11日一二人、それに続くいっせいで地方選挙後半戦(劇団未来は、主に吹田・茨木市長選挙を担当)では、延8日九十六人が小型公園に参加した。

又、演説会・宣伝カー弁士としては、劇団専従のYさんと劇作家のZさんが受けもった。

長期の舌戦で声をつぶしておられた黒田さんは奥さん手づくりの蜂蜜を、自分の身体もかえりみず、これも声をからしかけていたウグイス嬢のKさんに与えられたという感動的なエピソードや、子供達が「黒田さん勝って下さい」と、土手でつんだつくしを宣伝カーにさしだした話などが、今も語り伝えられている。

◇ ◇ ◇

小型公演は、主に団地・ターミナルなどで「八丈島太鼓」「八丈島太鼓ばやし」「御陣太鼓」「八木節」をレパートリーとして、その地域の労働者・青年・婦人のピラマキ隊と組んで行われる。まず劇団が太鼓を打ちだすと、観客が集ってくる——すかさずピラマキ隊が、集った人達に「黒田さんをよろしく」と政策ピラを入れる。人々が黒山のように集ってきた所へ、候補者カーか、政策宣伝カーがきて演説をするという作戦だ。

ところが、打合せをしていた予定の三十分が過ぎて、演説をする車が来ないことがあった。前記の太鼓のレパートリーは三十分しかない。——が然し、何とかして宣伝カーがくるまで観客をつなぎとめておかなければならない。

そこで飛びだしてきたのが「豊年太鼓」である。劇団では「御陣太鼓」にひき続く物語り性のある太鼓として「こんべえ太鼓」という太鼓をU君A君により準備されていた。その準備の第一段階として、「こんべえ太鼓」のリズムを12の基本リズムとしてU君が採譜し、それを劇団員の太鼓練習の基礎稽古に用

いていたのである。

四月四日、千里ニュータウンの大作戦の中で、持ちレバを全部出しきってもまだ時間を持たさねばならない必要性にせがまれて、小型公演参加者が、その時点で修得していたリズムを出しあい、その場で即興的にA君が構成して任務を果たした。

以来この太鼓は、吹田・茨木市長選、メーデーなどでも大活躍をしたが、十分な構成がされていないにもかかわらずよく観客に受けられるのである。これは、太鼓を打つ各人が自信をもっているリズムのみを、ある程度自由奔放に打ち込んでいるところからくる、明るさとにぎやかさが、働く人達に受けているのだろう。

これを私たちは、「豊年太鼓」と命名した「八丈島太鼓」などの従来からの作品に比べれば、安易な創り方かも知れないが、やむにやまれぬ要請から出発し、おれらく百回を越すであろう公演の中で練られていることも事実である。

この「豊年太鼓」は、大げさに言えば、いっせいの地方選挙の中で観客自身が創りあげたものだ——といってもよい。今、私たちは、参議院選挙へのわずかな期

間を利用して、いっせいの地方選挙の総括と組み合せながら、民俗的小型作品・太鼓のダブルキャスト化と、「豊年太鼓」の再創造の課題にとりこんでいる。

「演劇は観客とともに創る」という至極当たり前のことでありながら、日頃の舞台の中でもすれば忘れがちなこのことを、いっせいの地方選挙の中の、真の革新政治を求める多くの大阪府民との直接の交流の中から再確認したというのが、劇団としての最大の収穫であろうか。

(25頁より続く)

に始り、「予科練のうた」が流れている。六月の空に高らかに流すうたが、ここでもないのかもしれない。われわれも間にあわせの戯曲で公演を打つには、あまりにも苦しく、高い代価のだから、書き手になること——育てることを、いま一度目的意識的に考えねばならない。以上報告を終ります。

なにせ三十日に終って、二日迄に原稿急送せよということで、半眼(目下片眼ケガ)で書きましたので、ピントはずれはそのためと乞諒承。

地方選挙と劇団活動

ミノベヒカリとハタノヘドロ

能村達也

(劇団 労芸 東京)

激動の一九七一年を目前にした昨年の暮、多くの観客の方々、東西リ演の仲間達等の暖い協力により、待望の稽古場が完成いたしました。それは丁度、日本の未来を大きく左右する統一地方選挙、参議院選挙が行われる年を迎えるふさわしい出来事だったと言えましよう。

年が明けると東京の街には、早くも区議候補のポスターと共に「ハタノ」のポスターが大通りは勿論のこと、露路から露地へと張りめぐらされてゆきました。同時にマスコミを利用した、金に糸目をつけぬ大宣伝が開始されていたのです。そんな中で既に劇団では五月予定の小劇場の稽古に入る前に、第四期研究生のスタートと、日常活動としての小公演(文工隊)を上演してゆく事が決定されていました。小世帯の劇団にとっては、多忙なスケジュールが待っていた訳です。小公演は一月二十二日の品川区の共産党

赤旗びらきへの出演要請に伝えてスタートしました。題して、公害追放特集「みんな手組め足を出せ」これは九ツからなる寸劇、替え歌、群舞からなる、いわば劇団の集団創作によるコント集と言えましよう。舞台は私達の子想をはるかに上回り、その楽しさと多彩さ、全体に芯のあるまとまり、という事で、かなりの反響を呼び起しました。なかでも「

走れコーター」の替え歌は、美濃部亮吉氏や野坂参三氏の声帯模写を得意とする劇団員の活躍、実況中継の台詞の面白さ等もあり、特に好評を博しました。選挙戦が展開されつつあった状況だっただけに、実況中継の中の「ミノベヒカリ」と「ハタノヘドロ」とのレス展開が、選挙になぞらえていた事もあり楽しさの中にも一つの現実性を観客に刻みつけたと言えましよう。いずれにしてもこの成功が、以後民主都政を願う各種の集会に出演するきっかけとなった事は確かです。計八回

約二ヶ月にわたり、集会の性格に応じて全部又は幾つかを抜萃しての上演活動が展開されていきました。とりわけ「走れコーター」の替え歌は、「走れ〇〇」といった具合に、全回を通じて歌われたのでした。舞台が終ると是非流行らせたいので、歌詞を覚えてほしい、という申し入れが数ヶ所でありました。

一方、そんな過程のなかで、選挙戦がたけなわになるに従い、劇団員各自の中に、一部民としては勿論の事、民主的、自主的な演劇活動にとっても、絶対に民主都政を奪還されはならない、という思いが沸騰と胸にたぎってきたのでした。四年前、戦後二十年にして初めて築き上げる事が出来るか否かは、私達の演劇活動を押し進めてゆくうえで、よりよい条件をつくり出してゆけるか、どうか、という事にも、極めて重大な関わり合いを持つたずにはいられません。民主的、自主的な文化活動に対する理解、助成金、公演会場、その使用料金の問題等々。そしてそれらは、当然区行政にも影響してくると考えられます。又、総体的には、一般に言われている通り、日本の首都東京での勝利、その発展が、今後日本の政治活動家に与える意味は、極めて

重要だと言わねばなりません。

それらの事が、劇団全体として総会の席上で話し合われたのは、選挙も後半にはいつてからの事でした。いささか遅きに失した感はまだぬがれませんが、それでも劇団としての意志統一が出来た事は有意義なことでした。そして東西演の仲間達に、各地方共多忙とは思いうけれども、東京在住の知人等が居たら是非紹介してもらおう、と言う事が話し合われ、皆様の御協力を要請した次第です。おかげさまで数劇団より御連絡を頂き、深く感謝しております。この紙上を借りまして重ねて御礼申し上げます。

又他方、劇団の女性有志は、区議選のアナウンサー派遣の要請に依えて、次々に街頭に及び出してゆきました。三月から四月にかけては、都知事選、区議選の追いこみで、まさに東京中は未曾有の高まりをみせていました。熱気をはらんだ立会演説会、連日連夜の、更に一日に数回のビラ合戦、ハタノ派の悪質な中傷等。それはまさしく、コント集の中の「走れ〇〇」に出て来る実況中継「ミノベヒカリじりじりと追いつけてまいりました。あせったハタノヘドロ、ますます露骨に泥をけ散らし、右へ右へ大きく回ってミノベヒカリの

進路を妨害しております。もはやなりふり構わぬ汚ないレース展開であります。しかしながらミノベヒカリ、ぐんぐん出ます、ぐんぐんと大きく出ました。さあ、最後の直線コースに入った……」という一節にあてはまる、いやそれをはるかに上回る激烈な闘いでした。そして、山梨において東演の創作部会、教育部会が行われている四月十一日、都民の敵劇団の日程、個人の考え方、劇団としての意志統一、意志の疎通、運営方法等々。くわしくは紙面の都合もあり書けません。恐らく他の劇団でも大なり小なり、似たような問題があるのではないのでしょうか。

大原則であり、正当であることは言うまでもありません。しかし、同時に選挙という最も政治的な活動を、出来得れば集団として、又個人として行なう事が極めて重要である事も確かです。そして、前者と後者は当然統一になされるべきであると思えます。しかし現実的には、多くの問題との関わり合いをぬきにしては考えられません。例えばその時期の劇団の日程、個人の考え方、劇団としての意志統一、意志の疎通、運営方法等々。くわしくは紙面の都合もあり書けません。恐らく他の劇団でも大なり小なり、似たような問題があるのではないのでしょうか。

しかし選挙戦を通して、劇団として一つの課題をかかえたことも事実です。それは劇団活動と劇団としての、あるいは個人としての選挙活動が、どう関わり合っているのか、関わり合わねばならないのか、という問題です。勿論、創造集団は創造を通じて日本の現実と未来に参画し、責任を持ってゆくという事が



## 地方選挙と 劇団活動

### 創造体制死守の軌の中で

中 沢 研 郎

(京浜協同劇団 川崎)

地方選挙の結果、川崎では革新統一の市長と県会三名(全県五名・交渉団体となる)、市会八名(提案権をもつ)が実現した、そして、私たちは、「明るい革新市政をつくる会」の幹事団体として、革新市長を自民党と独占の攻撃からまもり、公約の実現と発展に大きく責任を負う立場にたった。

創造集団である私たちがためらいもなく自らを、直接政治戦の場にかりたてたものは、25年間続いた自民党市政をこれ以上許すならもはや、自分のいのちすら守れないと云う非常にせつばつまった思いと、大独占のみに奉仕し、わずかな期間に12人ものが公害病で死ぬような街にしまった自民党に対する怒りからであった。公害病は老人と子供に圧倒的に多い。汚染地域からかなりはなれたところにある劇団稽古場に住む、劇団っ子たちでも、目やにを出し、すぐ気管支をやられなかなが治らない。表通りの櫛の街路樹の葉が

変色して夏の日盛りに突然散りだす。地方選のさなか、川崎市が発表していた、大気中の亜硫酸ガス濃度を示す数値が実際の半分以下であることが、第三者の公害学者を交えての調査であきらかになり市民を慄然とさせた。測定機に吸いこませる空気量を規定の半分以下におさえてごまかしであったのだ。市当局もこの事実を認めたが、どんなに住民を犠牲にしても、大独占の利益だけはどうも執拗にまもってやる自民党の本当の姿を私たちはここでも見た。

戦争で跡かたもなく破壊しつくされた川崎を、生産量第三位の重化学工業地帯にするために市民の税金を湯水のようにつきこんで海を埋めて工業用地や埠頭をつくらせたり道路を敷いてやり、税金や水道料金をまけてやるなど、ありとあらゆる便宜を与えて、日本鋼管、東京電力、昭和電工、東芝、いくつつかの石油資本等の公害大独占を彼等はふとらせて

きた。その結果、市民は公害、住宅事情、緑地、下水道、教育文化施設などは日本一ひどい状況下におかれている。演劇をやる私たちに与えられている環境は百万都市で三つのホール(うち一つは音響悪く高くて使えない)と云う有様で、書けばきりがなく腹立つ。

私たちの不満や要求を「明るい会」と共産党が政策化し、一緒に闘うことを提起した。私たちはこれに積極的に参加した。私たちの演劇運動の根底もここにあると考えたからであり、歴史を変える瞬間を最大限の力で生きたいと云う願いもあった。

劇団後援会をつくり、票読みや全戸配布をや、大小集会の演出、司会、出演、会場装飾、照明をやった。また、政変車、候補者カールの車長、運転手、政策宣伝の弁士、推せん演説、アナウンサー等々ありとあらゆる活動に私たちは参加した。が、これだけやるのならさしたる苦しみはない。敵しかったのは、どんなことがあっても、創造体制をくずさないという原則を、この闘いの中でつらぬくことであった。本公演週三回、学校公演二回の稽古を、時間厳守、全員出席で守りきる稽古に關係ない打合せや電話の取つきをやめて稽古場を荒さないことを守りきることであ



った。だから選挙の票よみや後援会拡大、ピラ配布などは夜中と早朝、日曜などになった会議は当然夜半、飾りつけの製作も夜半、徹夜になったこともしばしばであった。乗車活動の運転手、アナ、弁士は夕方を降り稽古場に結集した。稽古と重なる集会の裏方演出・出演・司会などは、書記局と演出部が話しあって、ぎりぎりにつめて出番外の団員を送り出した。こうして、前半・後半の闘いをのり切った。

こんな風に書くとなにもかまがうまく行った優等生の報告のようで気もとがめるが、勝ったからこそこう書けるので敗けていたら、おそらく劇団は収拾のつかない状態となっていただろう。そう云う意味で私たちは劇団を賭けたんだと、今思う。

だが、劇団全体がこの闘いを直接通過することによってつかんだ中みは大きい。

その第一は、必要な場合は創造も政治も両方やり切ると云う構えと、力をつくった。勉強不足ではあったがとにかく稽古は守りきった。その中で選挙直後にひかえた子供まつりや学校公演の試演会と本番(夕鶴・三年寝太郎)の準備をした。子供まつりについて近所のお母さんから今でもお礼を云われ、親せき

に遊びに来た人が「古市場(稽古場のある町の名)の子供は幸せだ」と云っていたことを私たちはかみしめる。試演会に来たお年寄りが「昔みた芝居のおもしろさを再び味わせてくれた」と云って感謝されたことを私たちは深くかみしめる。この企画は選挙の闘いの中でたてられたのだ。子供まつりは百五十人、試演会は七〇人で、稽古場劇場は満員になった。第二に、こうした活動とおして稽古場を囲む表情ある人々を知ったことである。言葉

を代えていえば、政治地図と住民の意識や感情の流れを直接知ったことだ。これは、革新市長を生み出した川崎の広い市民の為に芝居をひろめていく上で大変大切なことだと思ふ。私たちはこの地域で問われる芝居の質の問題をしっかりとらえ、そこを出発点にして全市民的に広げてみたい要求にいまからしている。

第三に、劇団がこの地域の人々と共同作成を組んで選挙を闘ったことから、文化の面の共同作成も可能になっていくと云うことである。地域のお母さんの根づよい要求である「子供劇場」の典形をつくる仕事や、地域を基礎にした劇団後援会(友の会)の構想も大胆に出させそうな気がする。稽古場中心の活動も持続的になってはじめて、劇団はその根

## 地方選挙と劇団活動

### ままならぬは劇団運営

### 山崎喜正

(演劇集団 息吹 大阪)

稽古場の片すみの机で、この原稿を書いている今も、もう公示された参議員選挙の為に新しいペーパリーの稽古が行われている。

「今の世の中ナイナイづくし  
空を見上げりゃ青空ないし  
公害ふせぐに対策もなし  
医者に行くにもお金がないし  
がまんしながら死にたくもない  
何もしないで毎日暮すも  
のうがない」

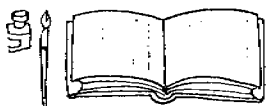
御存知「八木節」の一節である。明日の日曜日に文工隊に出かけようとしている連中だ

二月に行われた劇団総会では、今度の一世い地方選挙と参議員選挙に、劇団としてどりとりくんでゆくかということも重要な議題の一つとして論議されなくてはならなかったの

だが……余りやられたとは言えない。しかし、幸か不幸か、(たぶん不幸だ)我々の劇団では、ここ数年間……否、創立後の一、二年をのぞいて、その後ずっと、日本共産党と革新勢力の勝利の為に闘っている伝統を持っている。選挙というものは限られたごく短期間の宣伝戦であり組織戦であるといわれている。かつての我々のこの期間中の活動は、大阪府下一円からの依頼による小・中形式の移動公演と、依頼によるもやら自主的なものやらを含む街頭での文工隊活動がその総てであった。しかし、今度は屋外で自主公演をやってみようということに相成ったのである。しかしこの期間内に行うにはそれなりの覚悟が必要であった。と言うのは、我々が自主公演を行う場合、労働組合や各種各層の民主団体等に依頼することが多いし、劇団員個々が継がりをもつ個人にしても、その多くは日常的にも忙しい人々であり、選挙ともな

をはりめぐらすことが出来るかと考える。第四に、私たちの文工隊のやりようは、ずい分おしつけがましく気取っていたなと思ったことだ。大衆的な後援会や地域で呼吸すればするほどそれが気になつて来た。私たちは詩であれコントであれなんでもあれ、もつと観客の気分と相談しながらやれるようにならなければいけないと思うようになった。そうした勉強をもつともつと真けんには、はっきり課題に据えてやる必要があると思う。

いま、私たちは一方で参議院を闘いながら地方選直後から数えて四回の「夕鶴・寝太郎」の公演を終え、創造体制では八月にむけての「泰山木の木の下で」一本になる。地方選挙の中でつかんだものを私たちは最大限にここに生かしたいとねがっている。



るとその忙しさは倍化、三倍化する人達である。だから、この人達の手足をわずわらすことなく、我々が独自に、過去において継がりのない人達の中へ大胆に入ってゆかなければならないし、そういう人達にこそ、この選挙という期間に我々の舞台を覗てもらわなければならない。と言うような意気込みで計画されたのが、劇場でない所へ劇場を創ろう//自主的な小・中形式の移動公演を行なおう//ということになったのである。

さて、出し物は何にするか、これはどういう地域で、どういう人達に観てもらおうかで変化するものである。公演地は八尾市の南端、松原市との境で大和川のすぐそばにあり、戸数約千、人口約四千の太田という地域の公民館と決定した。八尾には自衛隊のヘリコプター基地としての「八尾飛行場」があり、この自衛隊の基地の地下道が唯一のこの部落へ通じる道路であり、いわゆる村落の集合体であると言われている八尾市でも、もつとも陸の孤島と呼ばれるにふさわしい地域である。そして当日の観客としては、老人と子供、主婦がそのほとんどだろうと予測した。(事実その通りであった)だから巾広い層に受け入れてもらえる//天満のとらやん//を中心に//新

念仏踊り」と仲間の合唱団による演奏とを組み合わせ、全体として、この太田地域に、革新的の息吹（注、劇団名ではありませんぞ）を持たせたいことを主眼として、とりくみが始まった。公演日も、選挙の中でやるのだから、選挙情勢との関係で流動的ではあったが4月8日の知事選と府会議員の投票日の直前と決った。そして、宣伝ビラの配布やら、宣伝の文工隊を送り込んだりしたが、これらは、それ自身選挙活動の一つになりうるものだった。

そういう時期に、住民本位の市政を実現する為、八尾市長選挙に於ても、一日も早く革新統一候補を立てようと、八尾市在住の大学教授、音楽家、画家、弁護士、医師、宗教家その他約三〇名が参加して、八尾市民のいのちとくらしを守る革新市政の実現を願う会を結成し、よびかけを發表した、そして事務局を劇団事務所に置くことにした。このよびかけを受け入れた八尾市民は、住みよい民主市政をつくる八尾市民の会を結成し統一の気運を高めようとする努力が開始された。革新統一の出来ない原因が、八尾の社会党内部事情にあることを聞かされた市民の会は、何度も再考を申し入れたが、日本社会党は日本共産党との話し合いのテーブル

につこうとしなかったのである。この学者、文化人の「願う会」と「市民の会」の事務局の仕事に劇団は独自の財政保証でもって一人の常任を配置した。しかし、八尾市長選での革新統一はならず向う四年間、保守市政下の生活を余儀無くされた八尾市民ではあるが「市民の会」を存続させ「願う会」を「八尾文化問題懇談会」と発展させ、その第一回懇談会を山の上から八尾市内を見下し乍ら、河内、八尾の文化について話し合おうと計画している。

三月十七日から四月二十五日のこの期間中の活動は次のようなものであった。

街頭文工隊、市内二十一ヶ所、約一三〇〇人  
依頼による移動公演五回（内一回は京都）  
自主公演 一回 二〇〇人。  
その他演説会での照明の受け持ち、数回。  
宣伝カーのめぐり、3日3名。前記事務局への派遣二十日延べ三十名。そして票読みと早朝、深夜のビラまき等々である。

年々選挙戦はキビシクなる……このキビシかった地方選挙以上に参議員選挙は、さらにキビシイとのことだ……。そしてこのような活動がイヤだと言って劇団を去った人も何人か居る……。ままならぬは劇団運営だと思ふ。

力強い稽古ノ

「公害もない戦争もない  
老後の心配しなくても良い  
そんな世の中つくってみたい  
みただけでは話しにならない  
なるかならぬかならせてみせよう  
真の革新 当選一つだ およいさねノ

地方選挙を闘う中で、さらに巾広く、さらに深く、地域の人々と結びつけられたことを報告し、そして同時にこの闘いの中で、我々に対する要求が地域の民主団体の一つとしての組織的なもののみならず、創造的にも、強い強いものになっているし……（痛い程それを感じる）

参議員選挙の中でも、選挙が済んだその後でも、その期待にどうもたえて行くかというところが、我々演劇集団息吹にとって、今一番の問題であることも報告して、終わります。

× × × × × × × ×

## 再説 劇団経営論

——東リ演経営部会を通じて——

こばやし・ひろし

（劇団はぐるま）

(一) この頃、東京の演劇状況がどうなっているか、どうゆれ動いているのかわからないが、創造問題と共に経営問題もからまっているという。

創造的には観念芸術の氾濫、反リアリズムの流行があり、これによって芸術派と反芸術派に色わけされているのである。観念芸術が芸術で、リアリズムが反芸術というのだから、反芸術は金もうけに走りダラクしているというのわからない。

商業主義、大衆迎合主義は否定しなければいけない。しかし、劇団にとって再生産を無視することは自殺行為なのである。

前衛劇を上演する某劇団が、某労働の例会にのつた所、手紙がきて「節操が疑われるかも知れないが、やむえず売った」といつてきた。

実に妙な話で、何も節操を疑ってはいないし、止むえず売る必要もない。堂々と売り、観客の批判の中で成長することが必要なのである。

どうも芸術派と称する人は——ここでは芸術派としておこう——劇団経営を無視することが芸術だと思っているらしい。公演が赤字であるのが誇りであり、芸術としての価値を有するのだという大衆迎合とは逆の、武士は喰わねど高揚子的大衆蔑視の思想が底流としてあるのかも知れない。

創造主体を放棄しない以上、大衆の要求とぶつけあい、その接点を深めることは何も反芸術的なことでも、反演劇的なことでもない逆に創造主体は、そうした中でとぎすまされ確立してゆくのである。

芸術集団としての劇団の信頼は、創造的信頼と、その創造を支える集団的信頼がなければ

ば社会的信頼を獲得することができない。個人的才能ではどうしようもないとすれば、これは長期の積重ねである。即ち、財政の裏付なしに確立しえない。結果的には拡散し、ニヒルになり「この世は狂ってるよ」ということになる。

この武士は喰わねど高揚子の思想が、地域劇団にもあることが経営部会を通じて痛切にわかった。東リ演には芸術派、反芸術派は無いが赤字思想は必要悪として受け入れられている。むしろ、大衆蔑視の思想はない。あるとすれば甘えともいえる。と同時に、芸術集団としての一方の柱である創造が大衆の要求についてゆけないもどかしさがどこの集団にもある。これは創作部会の問題のみでなく七〇年代をのりきる東リ演全体で克服しなければならぬ緊急な課題をいえる。

その面で岐阜での経営部会は甲府での創作

部会、本年度の活動方針を打出す総会に十分な意味で重要であったと思う。

(一)

岐阜での経営部会は経営技術の習得のみでなく、経営とは何かと問いたたす作業からという事で前もって演劇会議十七号に「普及は運動の鏡である」という基調報告を行い、それを基礎に次のような分科会のテーマをきめた。

第一分科会

- (一) 劇団と地域の運動との関係
- (a) 劇団と労組、民主団体との関係
- (b) 劇団と労演
- (c) 劇団と自治体
- (二) 劇団と経営の関係
- (a) 経営部は定着しているか、いないとすればなぜか。
- (b) 経営部は劇団の企画創造とどう結びついているか。
- (c) 経営財政が劇団のものになっているか。

第二分科会

経営技術の問題

- (a) 経営財政の帳簿の整理と方法(どん

実行委員会を組んで成功した例が埼玉から出されたが、企画の段階から持ちこめば、さらに成功したであろうといわれたそうである。労組の空洞化は一般的で幹部のみに依存しても効果はない。はぐるまに対する県評・地区労の関係は好意的で、七〇演劇行動は全面的に協力、幹部が二回にわたって各単産をオルグしてくれたが、その結果は二四三名で、全体の割に達していないのである。劇団員や、各サークルによる職場への浸透度はその数倍に達するといえる。ただし、県評・地区労の協力によって職場での活動の自由をえられることは忘れることはできない。

労組との関係で埼玉の塚越氏の報告は面白かった。彼自身、三〇〇人の組合の分会長をやっていたが、在任中、文化活動家を生みだそうと努力したかという点、経済斗争、政治斗争に追われ、文化の面では何もしてこなかった反省のみという。劇団の活動家である彼ですらそうであるから、いわんや他の組合幹部においておや、ということになる。

その点で青婦部は独自の活動を求め始めているので、その結びつきを強めようとする集団が多く見られる。ただ、青婦部の要求、若もの要求と創造的に結びついていないと成

ぶりが勘定からの脱皮)

- (b) 劇団員個人の売上げの実態把握。

○観客名簿の作製

○友の会・後援会の組織化。

- (c) 機関誌活動

参加劇団は埼玉、京浜、やまなみ、静芸、からつかぜ、演集、名芸、すがお、四日市市民劇場、上野市民劇場、はぐるまの十一劇団三七名。

前もって二十日までに討議資料として、各劇団の公演毎の入場人員及び未清算、各公演毎の個人別売上げ表の提出を求めたが、提出された劇団は三劇団で、それも完全な資料といえなかったが、各劇団とも経営面での資料が極めて不備であることを示している。

二七日(土)若尾副議長の挨拶で始まり、経営に関する報告が演集、名芸、埼玉から出された。準備不足の報告にならざるをえなかったのは主催者側の手落ちといえる。

三劇団の報告の中で地域とのつながりを限界はあるが推しすすめているのは名芸のみで他の劇団は手さぐりの状態のようである。それどころか、年々観客の減少に苦しんでいる。結局、創造面に追いまわされ、経営部の確立に手が廻らないまま公演に入り、公演を終っ

功しないし、長続きしない。これは創作劇に反映、京浜の「太陽がほしい」弘演研の「秘密」にも現われている。こんごの大きな課題であろう。ここから新しい職場の文化活動家が期待できるのではなからうか。

(四)

労組の空洞化と右傾化のカベがやぶれないため、各地域に実に多くのサークルが生れてくる。大きい組織では労演、労音、民青から無数である。職場内に自由がないため、外部でつくるわけである。年々サークル運動は拡大している。社会党が停滞したのは空洞化した労組に依存し、このサークル運動をつかみえなかったところにあるといえる。

もっとも身近かな組織は演劇観賞団体である。殆んど劇団が労演の創立に参加し、大きな力となっている。役員も事務局長から委員長、副委員長を出している劇団も少なくない。しかし、労演と劇団との関係は整理されているわけではない。地元劇団の育成というスローガンをかかっているが、労演の例会なり、特別例会にかけられた劇団は弘演研、京浜、演集、上野市民劇場、はぐるまぐらいで、それも必ずしも定期的とはい

ているのが実態のようである。

翌日、特別報告として稽古場改築の状況が演集、すがおから報告され、日程に従って分科会に入った。

(三)

第一分科会では地域との問題が討議されたが、労組とうまくいっている劇団は殆んどなく、労組の右傾化による断絶、即ちチケットを預ってくれるだけか、断られるケースが非常に多くなっている。京浜の場合、預つてくれるだけが七〇%、取組んでくれるのが三〇%というが、ただ、教組、高教組はどこでも文化活動を好意的に見てくれているようである。これは劇団に教師がいたりするだけでなく、文化活動を地域の教育を守る行動と結合させて重視しているためである。また、高校の演劇部を通じての結合はこの劇団も多いようである。

だが、労組との結合の問題は、労組の右傾化のみでなく、日常的にどうつながっているかがはつきりしていないと、たんなるチケットの窓口で組合にとっても迷惑以外何のものでもない。これが多分に個人的であって集団としては全く手が廻らないのが現状である。

い切れない。逆に創造的な力不足により、会員の減少をもたらし、見通しとして余り明るくない。だから、労演のサークルと接点をもとうと努力する。しかし、労演によっては労演事務局を通じないと喜ばない所もあり、また、劇団は公演になると接点をもとうとするが、あとは劇団に追われてしまうと報告されている。また、劇団員が職場でサークルを組織するため、それに忙殺され、劇団活動と矛盾している所もある。

ここではつきりさせておかないといけないのは創造団体と観賞団体の機能である。それが混乱すると、いろんな矛盾が生じる。われわれは創造団体であり、その立場からすれば職場のサークルに責任をもつことは本務ではない。運動としての労演にこたえられる創造こそ劇団の仕事である筈である。一方、労演は地元劇団を育成することとは、一体何かを運動として考えてくれることである。その点を相互で話合わない限り、両者の運動は発展せず、細い矛盾は山積する危険がある。

続いて大きな組織は労音、民青である。とくに民青は青年組織として規模の大きさからその組織的エネルギーからいっても、他の比ではないだけに各劇団共、結びつきを強

めている。とくにこの頃、文化運動を重視している点から見ても、正しい関係をつくらば双方にとって大きな力となることは間違いない。ただ、正しい関係となるとむづかしいようである。政党の影響力が強いだけに、創造上において政治主義による卑俗化をもたらす危険もある。文化運動の本質を理解してもらい、劇団としての主体というか、一定のオリエンテーションを発揮しなければならぬ。

当然といえよう。劇団はあくまで依存という関係なのである。ここから脱出するためには、少くとも創造的な一定の裏付と、年間二回以上の定期公演によって、地域に劇団としての影響力をもたない限り確保できない。文化団体としての市民権を各サークルにうえつけねばならない。こうした基礎をつくるため、各劇団は自分たちの組織である後援会、友の会の充実に努力するのは当然である。六十年代は民主団体に依存しうる条件を十分もっていたが、労組の執行部は窓口としての力をうすめ、各サークルも、それぞれの活動に追われるとなると劇団の組織、それをとりまく劇団の支持層、言葉をかえれば劇団の観客をもたなければならぬ。その層が厚ければ劇団の経営は安定するのである。

劇団活動そのものが、具体的には公演がサークルとの結合の場にならなければならぬ。それがサークルに刺戟を与え、合評会が組織され、劇団と結合を強める。そうした関係が生れない限り、サークルはたんなるチケットの窓口であり、立場は受身でしかない。受身のうちはサークルのエネルギは爆発しない。サークルはサークルで仕事をもっている以上

労演、労音が強いのも、各職場に自己の組織を確立したからに他ならない。ところが劇団は労演のサークルのような組織はできない。後援会、友の会の充実に各劇団共努力しているが、劇団員の個人的関係に依存しているのが実態のようである。こうしてみると、劇団のもっとも期待しうる組織は劇団ということになる。ここで経営

体制を守る劇団組織が問題になる。これは第二分科会とも結びついているので第二分科会に移ろう。

#### (四)

第二分科会は経営技術の問題だからくわしくはふれない。直接財政問題から入った。最初、各劇団の公演予算、財政が報告されたが、劇団経常費を公演予算に組んでいる劇団は極めて少い。公演活動によって劇団は運営されるので、当然公演によって経常費を生みださなくてはいけないが、公演の赤字を防ぐのが精一杯のようである。

公演予算は二十万から八十万ぐらいで、その上に立って観客目標がきめられ、一〇〇〇〇人が目安になっている。(会費は二〇〇円、五〇〇円)ただし、目標に達する劇団は少い赤字負担は団費、移動公演、その他で補われている。

劇団での経営体制は制作部を専従として抱えている集団と、もってない集団では条件もちがいが、総会で決定、一年を通じて責任のもてる担当者複数もてるようにしたい。しかし、人材のこともあつてなかなか困難なようである。従つて公演が決定してのち、経営

部が生れる。これでは第一歩から自信を失うといつていい。

だから、経営部の企画が先行することは少く、追いつめられて劇団員がもえるという関係がふつてきれていない。経営部の仕事は経営事務が主になってくるのである。

普及は個人ノルマをつくっている集団もあるが、完全実施が困難で、自主申告ノルマ体制を基礎に班ノルマ体制をとっている集団が多い。(京浜・からつかぜ・演集・四日市市民劇場・はぐるま)この班体制は劇団の日常活動から経営活動まで結びついていなければならない。普及カードをつくり、班活動を点検しているのは「からつかぜ」である。

ただ、どこの劇団も、創造上の総括はわりに行われているが、経営上の総括は行われていない。とくに個人個人の姿勢が問われるので、創造上に力がある指導部に、その姿勢が問われる時、よりやりづらく具体制のない一般論に終る場合が多い。しかし、それをのりこえないと劇団組織は強くなる筈がない。

この点で指導部と若い劇団員の断絶が強く訴えられていた。「動きたい、いいたい、やりたい、それを押えているものが劇団にある

だから、どうしても解放されているという感じがしない。自分をぶちあけうる組織にしない限り、創造上も経営上も、エネルギーにならない」という発言は切実な声であり、多くの共感をよんだ。劇団歴の古い指導部をもつ劇団は謙虚に耳をかたむけなければならぬ。また、各劇団とも、公演の終つたあと始末がなされていないようである。公演のやりっぱなしで、ほつとしてしまうのか、合評会がもたれていない。合評会こそ公演を通じて劇団と観客をつなぐ大切なパイプである。どんな小さな合評会でもたんな念にもつことによつてパイプを太くすることができるといふ。わかっているつもりでもないのも劇団の組織の弱さといえよう。

その他、企画、会計帳簿の記入方法、機関誌等の問題にも入ったが、予定の紙数をこえたのでふれえなくなった。

ただ、どこの劇団も出金入金・出券返券伝票がなく、帳簿記入は不正確であるようだ。どんぶり勘定の劇団もある。財政の科学的な検討のためにも、集団の規律のためにも正確な帳簿記入を習得すべきである。

ただ、経営部会を通じて感じたことは、各集団共、創造に追いまわされて経営にまで手

が廻っていないことである。「演劇が観客をよび、観客が演劇をよぶ」関係からいって演劇のない観客は考えないから当然である。しかし、それによって経営が日陰者にされたり事務処理にのみ追いまわされたりするので、そこから集団のひずみは生れてくる。逆に、それが集団の規律にはねかえり、「自分をぶちあけない」という若い劇団員の不満が内攻するのではないか。

また、各ブロック毎でもいいから、舞台のみでなく、経営上の点検会をやりあうこと、予算、決算、劇団財政(団費、後援会等)のあり方等を検討しあう集りをもつことも大切ではなからうか。いずれにしても経営部会の充実を計らねばならない。



# 西リ演ゼミナール報告補遺

森 本 景 文

(劇団 未来)

一九七一年度の西リ演ゼミナールは、八月二十一・二十二日と、のびやかな山あいの温泉町、広島県湯来ロッジで開かれました。

参加者は、生活舞台(福岡) 4、現代劇場(福岡) 10、若者座(宇部) 13、月曜会(広島) 13、木々の会(広島) 7、国鉄演サ(広島) 2、高校生(広島) 5、福演(福山) 2、職場演劇集団(岡山) 1、四紀会(神戸) 5、いこら(和歌山) 8、和歌山 4、関西芸術座(大阪) 8、南大阪演研(大阪) 2、息吹(大阪) 2、大阪協同劇場4、劇団大阪7、劇団民青(大阪) 7、未来(大阪) 14、京芸(京都) 4、人間座(京都) 1、橋(京都) 1、湘南アートシアター1、福岡演劇1の合計二六名(プラス二世六名)でした。

二十一日のご七時すぎより、熱っぽい雰囲気の中で、仲議長のあいさつ、参加者紹介と続き、広田恵美子(いぶき)、芦田鉄雄(人間座)、多田井淑代(四紀会)、高尾豊(生

活舞台)、竹内順子(未来)、藤本昂二(いこら)、坂本浩二(福演)の皆さんによる「地域とわたしの劇団」という、自分の体験を通じての活動報告がありました。

続いてモデル上演は、劇団京芸のチエホフ作「悪党」——藤沢薫、小沢文也両ベテランの織りなす風刺は観客をよく笑わせました。生活舞台内田成美さんによるタカラテラ作の「ツルの巢ごもり」は燃焼度の高い、爆発力のある詩の朗読でした。一方朗読のベテラン関西芸術座の梶本潔さんの「原爆詩」は基本をきっちり押えてみごとな構成でした。そして、3本のモデル上演を中心にしての一時間はかりの合評会——「これだけが楽しみでゼミナールに参加した人もあるという」交流会へと続きます。白熱した交流の輪は、延々と続き、最終は翌日の明け方四時頃となります。

第二日目は、関芸の河野・和泉両嬢が指導

する体操・劇団未来の豊年太鼓の披露にはじまり、同志社大学教授・京都文芸連会長安永武人先生の「今日の文化状況」という基調講演は、西リ演の運動と展望に確信を与えるものでした。

続いての分散会は、「地域で責任のもてる劇団になるには」「あなたにとって劇団とは」の統一テーマのもとに、劇団活動歴順に10に分かれ、熱心に討議・交流しました。チューターは、

- 第一分散会 藤沢 薫(京 芸)
- 第二分散会 山本惣一郎(南大阪)
- 第三分散会 大塚 雅春(未 来)
- 第四分散会 尾津 訓三(広島国鉄)
- 第五分散会 山崎 喜正(いぶき)
- 第六分散会 梶 武士(四紀会)
- 第七分散会 諸鹿 芳英(生活舞台)
- 第八分散会 富原 智一(現代劇場)
- 第九分散会 栗原 省(いこら)
- 第十分散会 小松 徹(関 芸)

今年度の一せい地方選挙、参議院選挙を経て、高まりつつある文化要求にどう応えるか。資本家側の総攻撃の中で、地域に根ざした劇団が、ほんとうに力量をつけ高めるとは

どういうことか。——という、今年度のゼミナールの方向に則して討論されました。

若い人の分散会では、  
○自主的な創造活動の価値をどうみるか。  
○劇団指導部との関係をどのようにつくっていくか。  
○芝居をつくるよるこびとは何か。  
○職場と演劇活動の望ましい関係とはどういうものか。

○家族をどう説得していくか。  
などが中心に話され、地域や職場に根をおろした演劇活動ということについて深まりました。

中堅の分散会では、劇団指導部と若手の間の断層を中堅が中心となってどのように埋めていったらいいのか。それは、両者の間にあって橋渡しをするというだけでなく、自分達が積極的に劇団の中心であるという自覚を持ち、卒先して劇団の矛盾を解決していくことが大切である——というようなことが話し合われたことが印象的でした。

経験を豊富につんだ人達の分散会では、創造の中でこそ劇団の団結が強まるといわれるが、その創造論をもっと具体的にしようというようなことが話しあわれ、私達をとりまく

文化の階級性を、単に政治的側面からとらえるだけでなく、文化自身の問題としてとらえることが大切である。

自治体が、文化政策を先どりしていく中でそれに対抗して私たちの文化をどうつくっていくか、今こそ真げんに考えなければならぬのではないか。

創作を中心にした私たちの創造をどうふくらませていくか、劇団の周辺の観客とが手をつなげて創りだしていこう。というようなことが話されました。

今回のゼミナールには、六名の二世が参加していたことにも象徴されるように、ママさん俳優をどう育てるか、育児しながら俳優としてのどう生きるかなどの意見が、あちこちの分散会ででしたが、そのことにぶち当たっていない仲間には仲々解ってもらえなく、そういう問題での特別分散会設置の要望がでていました。

今年度の西リ演、ゼミナールでは、特別新しい問題が論議されたのではなく、話されたことは日頃各劇団で、イヤという程論議をつくられている問題でしたが、そのことがゼミを終った今、新鮮な感覚で受けとめ直され、実践の中で確められようとしています。

只、来年度への課題としては、運動論としての側面ばかりでなく、創造の問題として、より深い研究会やゼミを開いていくことの重要さがいわれています。

最後に、ゼミで採択された「アッピール」を紹介して、報告にかえます。

## アッピール

世界中がうなりをあげています。輝かしい未来をめざすときの声と、どん欲に私腹をこやしとする者たちのなりふりかまわぬ殺りくと破壊の声。ベトナムで、朝鮮で、沖縄で、ヨーロッパでそして私たちのすぐそばで世界中がうなりをあげているのです。

東京、京都につぐ大阪での革新首長の実現。地方選挙、参議院選挙、原水爆禁止世界大会へと、たまたかうごに統一の輪はふくれ進むごとに団結の中味は深さを増してきました。

七〇年代、私たちの日本は、革新統一戦線への方向が今はっきりとみえはじめてきたのです。だからこそ、私たちの演劇への期待、私たちの創造への要求が、今ほど高まっているときはありません。

それにどうこたえていくべきか、そこにとどのように責任を負うべきか、そのことを私たち

# 西り演中国ブロック 第3回創作学校おわる

柏原武蔵

(劇団 福演)

日時 五月二十九日(土) 午後三時  
三〇日(日) 午後四時  
場所 広島市観音公民館  
参加者 月曜会7 月曜友の会3  
国鉄演サ2 福演3 民主文学1  
木々の会1

講師 大橋喜一 仲 武司  
提出戯曲

作品1、「鈍行ダイヤ」(改訂稿)

作品2、「はげら万灯」——武一揆——  
作/尾津訓三(国鉄)

作品3、「部屋にて」  
作/田中仲慶(国鉄)

作品4、「ひろしま——その八月——」  
作/坂本浩二(福演)

一月に実行委員会を発足させて準備したの

つたの声もあった。

作品2、「はげら万灯」(未完)

(あらすじ) 明治四年。山陰と山陽を結ぶ山

形盆地に起った農民一揆の話。亭主をいく

さで失った百姓後家のおみの家。石門学

者(?) 西本武一の弟子である徳三、た

ら工場のたこ部屋から抜け出て来たおみの

の息子健助、その妻となる貧農の娘妙その

他の農民群像が、指導者武一(登場せず)

を擁して蜂起するさまを描く多幕物。

(講評) 一揆物は、祖先の勇気をたたえる

いわばお祭りの要素があるわけで、歌を

盛り込んだり、場面も変化に富んでいるあ

たりいい。かなり技術的に高いが、今日の

観点からその意義を問う姿勢をとかく忘れ

がち。農民のくっせつなど史実に沿った突

っ込み方をしないとありふれた一揆パター

ンにおちいってしまう。農民の連帯に眼が

行くあまり、作者の希望的、御都合的解釈

になったりする危険性。ト書は文学的であ

るより具体的の方がよい。

作品8、「部屋(ぶしつ)にて」

(あらすじ) 定時制高校演劇部のために書か

れ、実際に上演もされた作品。ひる働らき

夜学ぶ定時制では、入学時人員がポツリポ

ツリと脱落するケースが多い。文芸部長も

理由を告げず来なくなっている中山のこと

が気にかかる。卒業文集のプリントに忙し

い文芸部室に、楽天家でイキがっている西

川という学生が入って来る。「いちいち人

のこと気にするひまがありや遊ぶ」という

彼を、「それでいいんだらうか?」と詰問

する。中山が止めねばならなかった理由が

手紙で示される。——

であるが、今回は地方選やら、自主公演(月

曜会・若者座)をはさんでいたので、呼びか

け、諸準備等もうまくゆかず、戯曲も四作品

参加者も十七名と低調であったのは残念であ

る。「書いてますか?」を合言葉にしよう、

と、毎回その季節には強調され、痛感もする

のだから、どうも戯曲を産むことはまだ限

られた人間の仕事である——といった考えか

ら脱け切れない。また、出せば出したで、ク

サされ、ケナされて、そのあとめんどろみて

くれるのかというサニアラズ——といった

こともあって、まだまだ趣旨の立派な割には

軌道に乗ってない現状のようだ。

今回を終えた時点での反省から次のような

ことが決められた。

1、創作専任の個人を決めて、年間その世話

をしてもらう。

連絡所 広島市翠町一の一五三田中仲慶方

2、世話人 箱田・日高(月曜会)

坂本(福演)

3、会員制にして、会費ももらってニュース

を発行する。

4、次の創作学校は一月末か、二月に行う。

作品1、「鈍行ダイヤ」

(あらすじ) 昨年提出されたものの改訂稿

広島あたりの国鉄小駅が舞台。東京にいる

息子から金を送って遊びに来るように云われ

た農婦がキップを買いに来るが、彼女は新幹

線や優等列車のことは知らずに普通列車で行

きたいという。だが東京迄の二等料金はあ

るが直通のドン行はない。駅長、駅員、母、娘

のやりとりの中で、優等列車にむりに客を乗

せる国鉄のもうけ主義がばかかれ、結局七回

の乗りかえて農婦はドン行に乗るという結末

(講評) 一幕で扱うには小さい問題で、一

幕の三分の一程のエピソードである。普通

急行だと急行料金もさしてかからないわけ

で、お芝居のためにむりに作った条件が苦

しく説得力に欠ける。現象より人間の問題

に重点を置いてほしい。職場の特殊性にの

めり込むと一般性を欠くことがよくあるの

で注意しなければならぬ。第一稿は新鮮だ

誘われるがそれもしっくりしない。集団創

作。

(講評) デモか折鶴か?問題が大きすぎる

が、勿論さては通れない。しかしそのま

ま投げ出され、どちらも否定され、やりき

れなさが残る。芸術としての解決はできる

し、やらねばならぬ。

全体として云えることは、どうしようもな

い……という作品はなく、一定のレベルにあ

るが(1)作家の触発されたものが弱いこと。

(2)作家の願望だけで結論を急ぎすぎる結果思

考停止が起きて人間不在のものになったりす

る傾向は共通の弱点としてあること。

二日目、大橋氏から、昨年のボウ大な講義

(この講義録はテープから起したものが月曜

会にあり)を補足する講演、「テーマと形象」

「人間の創造意識について」——があり、氏

の創造体験をふんまえての話であった。自作

の初日も観られないような多忙の中を、昨年

にひきつづいて来てもらって感謝している。

日曜日のこととて、窓外では町内会が会社

かの運動会が行なわれていたが、「君ヶ代」

(10頁へ続く)

我々の手で創りあげられなければならない、ということなのです。

一週四十数時間の労働……多くの犠牲をもって斗かいといった余暇を、100%創造に転化させる課題こそ、その手がかりとなってくるのです。

分散会は、世代を分けたように十の課題を追っかけました。十数年の経験を持った仲間、分散会に参加をさせて貰いました。そこに加わった若いママさん俳優たちがあり、若手の、古手の断絶をめぐって話はずみまじった。//もう大分、古くなっちゃって、くたびれて来たんですね、だから、若手に運営を任せようと思ってね……//ガ然、若い人たちから、//老化現象!!//失望しちゃうなあ!!……と。そこには、交流がないことです。結論は簡単でむづかしいことでした。

//これからは、敬老の精神で行きます!!(こりゃあひどい)。皆んな若いんです。)//若い人たちを正しく指導する義務がありますからね、もっと理解を……//と結論らしきものから、現実には、明日からの活動にかけられて来るのでした。

若いママさん俳優が、産休明けから、車に布団を積み込んで古い古に出かけた話を聞いて

六時、大阪協同劇場の勇士たちだけと相なった。各劇団のその道の豪傑陣の眠りの早かったのも西リ開びやく以来。

朝、閑芸による発声体操の指導で骨の髄までリラクセスしたとたん、その髄の髄まで響きわたらんとする劇団未来の太鼓。男にまじって未来の女性の響かす太鼓の音、それは心を叩き込めと教えられた太鼓。職場での労働条件改善の闘いから革新府政実現にも参加していった太鼓、そして田舎で失対をやっているおじいちゃんにとどくと太鼓を叩く事が、全国の仲間への連帯へと結びついてゆくすばらしい彼女の太鼓だ。

た。これまた若いママさん俳優が、その感動を発散させながら、フアイトを燃やしている姿は、やや老化現象をおこしている私を、ほのぼのさせてくれました。

各分散会の報告は、明日からの活動に、全力を誓い合っていました。若いエネルギーと豊富な経験が団結し、一せいに花開くと、八〇年代をめざす、文化活動が、大きく前進することが確信となってきました。拍手とカン声のなかに、来年の再会を誓い合いながら、セミナールは終わったのです。

明日からの活動への期待に満ち溢れた顔はやや、疲れを見ながらも、湯来の町を、元氣一杯、活動の本拠地をめざして出発して行ったのです。

私たち岡山職場演劇集団から、はじめて一名参加したこと。

結論は出ていました。来年は、明日に公演を控えても、多くの仲間の参加できる態勢を、どうしても確立したいと思うのです。

その活動は、はじまっています。同時にそれは、八〇年代をめざす、文化の大きな課題をはっきりとめざして。

#### 四 紀 会

#### 勝 呂 勉

西リのセミが広島島の温泉で開かれるぞ。だが、劇団のスケジュールは、残念。セミは公演の一週間前に開かれる。またしても代表メンバーだけの参加になってしまふ。可能な限り全員で参加したいものだ。結局、公演が迫った中、五人のメンバーで西リへ向う事と相なった。劇団員から多額のカンパ(四千円ポツキリ)をひっさげ。

会場へのバスの中、西リへ向う女高生と会う。演劇部の人達だ。高校生が参加するという事、考えもしなかった事でピンとこない。とにかく今回のセミ、多様な物になりそう。着いた会場冷房完備、これまでの会場(古ホケた山寺)からすると、まさに別天地。

夕暮れの中、メイ調子朗読、メイ演技に感動し、さて交流会が始まる。ところが困った事に酒を飲めども、ビールを飲めども、朗読論、演技論ばかり、ついには世代の断絶の話しへと飛躍してゆき、出足の鈍る事、限りなし。耐えかね、未来の森本氏もつと碎けてゆきましようとなりに割って入るオソマツ。西リ開びやく以来かな。ねばりねばって夜明けの

#### 劇団若者座

#### 向 井 義 秋

引き続きの分散会では、地域に責任のもてる劇団としてと云うテーマに対し、それよりも劇団の足元で、若者と老人の断絶の問題が、若者からは不満として、老人からは、あきらめを含む嘆きとして出てきてはいないだらうかと云う事が問題になった。文化運動の前衛とも成るべき西リの劇団が、この事をいつまでも抱えている事はないし、その解決への過程を経た時に地域へ責任のもてる運動への一つの足がかりにも出来るはず。高校生が「なぜ好きな演劇をやっているのに断絶なんか起きるのだらう」という眼で分散会に参加していたが、彼女たちに答えることが出来るようになる事が次回のセミまでの一つの課題でもあるはず、最後の全体集会で、その高校生に報告をしてもらった。曰く「中年の大人の人達が若い人と同じように、一緒に頑張って走り回って参加していたのにはびっくりしました」。この報告に我々東西リ演の活動の典型が語られている。まさしく名言だ。

高校生に始まり、高校生に終わった夏のセミナールでした。

X X X

私は昨年十二月二十五日に入団し、団歴は浅いのですが、演劇とは何か、という問題に対し自分自身現在までに考え続けて来ました。その中から演劇とは、社会の矛盾を追求し、観劇された人達と、その公演の内容を共に考え見つけていく場ではないかと、脚本や劇団の姿勢で感じていました。しかし、その問題は自分自身の頭の中でしか考えられなかった為、西リ演というものがどういうものか? また、どのようなことを見つめるのか? 私にとって疑問のままに興味も相まって、この度の71西リ演セミに参加することを希望しました。夕方宇部を出発した為遅く目的地へ着いたこともあって、その日のセミは納得のゆかぬままに終わったことが残念でなりません。この21日の交流の話し合いの中で感じられたのは、年配の方の意見が集中し、私には難しい問題だったということです。あくる22日曜日、七時に起床し朝食を済ませ九時から朝の体操でこの日のセミは始まりました。朝の体操では、脱力体操と発声の為の体操が主体で充実した体操でした。私達の劇団をより

大きく、より素晴らしい舞台を創りあげるのに、欠くことのできない体操であったように思います。又未来の太鼓の迫力に未来の文化への歩み方が窺えました。続く安永先生の講演が九時過ぎに始まりました。私は安永先生という名をはじめ聞くので、その日一番に注目した人でした。講義内容は、国民の根本的要求と伝統的感情をどのようにとらえ、それを新劇に結びつけ国民文化を創り出すか、などの具体的な講義でした。そして現在では文化が権力によって統制され、国民全体が権力の要求する文化の中で、自分というものを形成してゆく危険性があると話されました。この講義の中で、ゼミに来る以前、演劇に対する一つの見方を持っていましたが、それが間違った方向でないことを感じました。そもそも地域に責任を持って市民の中に根を張り、市民と共に社会の矛盾を考える、そしてこの考える課程でいつも一方的な見方ではなく、本当に市民の根本的要求が何なのか具体的に掘り下げ、劇団内で話し合い討議しながら演劇を創造してゆきたいと思いました。

次の分散会は、第十分散会に別れて討議になりました。私は第一分散会で、職場生活と劇団生活、演劇活動と政治活動など五つの課

題で話されました。この中で職場生活と劇団生活、演劇活動と政治活動は自分が直面している問題でもあったので、大変興味を引きました。会社の矛盾や不満があっても労働することによって作り出す喜び、それは演劇を創造する時の気持と変りないと考えます。そして会社の矛盾は演劇をする者にとって、より効果的な創造を深めてゆくことが出来ると考えます。私は、やはり職場で働いていることが演劇をする上にも、もっと感銘の深いものを観客に与えるのではないかと思います。職場と劇団は切り離して考えられないと思います。演劇活動と政治活動も、やはり私自身切り離しては考えられません。演劇とは何かと考えた私は、演劇の歴史を少し勉強してみました。そして分散会の内から演劇と政治は、昼と夜との関係には成り立たないことを改めて掴みました。

私は第10回西リ演ゼミナルに参加して他の劇団との交流や話し合いの中から連帯、仲間を強く感じ、そして演劇の見方を深く認識することもできました。この成果を地域で責任の持てる劇団となる為に頑張りたいと思います。

うに見ているか」「今後どんな劇団にしていきたいか」ということを中心に、働くことと劇をすることのつながりなどを話しあいました。その話し合いの中で印象に残ったことがたくさんあるのですが、一つは西リ演に結果している劇団が今日本にとって必要なかどうかということについてです。もし今仮りに日本の国から、私たちのような自主的に文化を作っている集団や仲間が全部なくなったらということを考えて、そのあとに残るものといえれば資本家を作り出している腐った文化でしかない。資本家や一部の反動的な政治家で思うように社会が動かされるということを考えてると恐ろしい。労働者階級自身が、自らの演劇を創っているということだけでも、資本家が作っていることとする社会に対する歯止めになると。西リ演加盟劇団で劇をしていくということは、一個の人間のたたかいただけでなく、文化という場の斗いでの大きな歯車の一つなのだなということを痛切に感じました。

それからも一つ。白状しますが、私は常に、美しい若い劇の中心人物のキャストにつきたいという欲望もっている虚栄心の強い女なのです。その個人的欲望をどのように

解消していくのかということ。自分がそのような感情を持つということと悪とせず良い方向に向けていけばそれでいいのではないということ、そしてそういう欲望がなければよい役者にはなれないということを先輩から聞き、安心すると同時にもう一步深く切りこんで役のことを考えねばと思いました。たくさん収穫の中でこんなことしかかけません。ともかくゼミに参加して劇団未来に対する考え方が一まわり大きくなったように感じると同時に、自分にかかる責任の重さをあらためてかんじているこの頃です。

#### 福岡現代劇場 斉藤 睦子

裏盆も過ぎてどうやら早い秋の訪れを思わせるかのうちに、山峡を吹き通る風のひんやりした冷たさが何とも心地よい広島の湯米温泉で、西日本リリズム演劇会議のゼミナールが開かれました。何しろ初めての参加なので、胸はドキドキするし、顔はつっぱるし、とに角緊張の連続、自分が何をしゃべりどのような返事をしたのか今は唯そのことをいかに思い出し、反芻するかのいっばいです。でも覚悟をきめて私なりの拙ない感想文を書いてみることにしました。

#### 劇団未来 毛馬 幾代

劇団「未来」に入ってまだ五ヶ月たらず。ちょうど4月に職場も転動になり、新しい職場の生活における自分の位置と、新しく劇団で活動していく中で自分の位置を見つめる上でも悩んでいました。特に劇団という一つの、同じものを目指して進んでいっている集団の中でいったい私はどうなのか、何なのかということに対して不明確なまま毎日進んでいってしまいました。職場がしんどくつづいていこうに行けない日が何度かありました。「古い人達はなんてつよいんだらう」と思い自分自身を否定してしまいたくなるのが何度もありました。そんな時に西リ演ゼミナルのちらしをもらい、「何かとつかかりを」とわらでもつかむ思いで広島に行くことになりました。

参加者はみんななんて生き生きしているんでしょう。それにくらべて、私は。少しはざかしい気がしましたが、討論にはできるだけ積局的に参加するようにとめました。一番心に残ったのは、分散会の討論です。私達の分散会は若い劇団員ばかりで構成されました。そこでは「自分が今の劇団をどのよ

まず印象として残ったものに、モデル上演でやられた詩の朗読がありますが、これは個人の関心が強かっただけに、朗誦術というか表現術というか、そういうったところに非常に興味を抱きながら鑑賞しました。詩(言葉)を詠いあげる。正確に分り易く、しかも芸術的に高く、ということには演劇を創造する者にとってはやはり避けられない一つの課題であろうし、私自身、日常茶飯事の中で言葉を正しく伝えるということがいかにむづかしいか、コミュニケーションとしての言葉の意味、位置づけといったもののむづかしさを痛感しているだけになお、興味以上のものを感じたわけです。そして、ややもすれば理屈が先走りかちな現況にある中で、私としてはもっと原点に立つ、原点に還る、という基本的な姿勢を守っていきたいと思いました。次に、劇団の活動として印象に残ったものにやはり「未来」のあの勢力的な活動をあげずにはいられません。「あなたにとって劇団とは」というテーマが、正にここで迫力をもって迫ってきたという感じでした。自分が現代劇場の劇団員であるという自覚と尊敬を、最後まで責任をもって發揮できなかったという弱さと歯痒さを反省する中で、じゃあ、私自身自分に対す



立ち、不満を適確に汲み上げる作業を続けなければ、何を書いたらいいのかを掴むことはできないだろうと云いました。

「作品は机の上で書くものではない、足で書くのだ」というこばやし氏の言葉を教訓として書きとめたいと思います。

京浜の黒沢氏や、はぐるまのこばやし氏のように劇団の常任や責任的立場の人の悩みにして、自分の書きたいものと劇団運営上のめんからの要求のジレンマも出ました。

島氏、小坂氏を始め、これに続く若い書き手が現われ始めたことは、東り演の創作体制の成果です。その陰にいて機関誌の編集や寄せられる作品の批評などをひき受けている萩坂氏を始め、諸先輩の協力も見すごすことはできません。

最後に、東り演作者が書いた作品を全部の劇団に渡すよう、また、各劇団の書き手同志の横のつながりなどが話し合われました。

なお、この集いに、若い女性三人が参加していたことを、特につけ加えます。

## つぎの創作部会のために

矢野 喬

(演劇集団 土の会)

創作部会が開かれた第一夜は統一地方選挙の前夜で、私自身登山姿の若者たちに立ちまじって不在者投票を済ませて甲府行きの列車に乗ったのだが、開会を待つあいだも各地の選挙の情勢が話題になり、連夜の票読みで疲れたという仲間が遅れて駆けつけたりして、働く者の演劇を目指す東り演の創作部会らしくかなり熱っぽい雰囲気ではあった。この尖锐な対社会姿勢を演劇芸術のなかにいかに開花結実させるか、まさにそれが当日集って来た仲間たちの共通の課題であり、創作部会の目的であったはずである。二日間にわたる討議でその目的は果たされたか。どのような収穫があったか。

第一夜は「太陽が欲しい！」(黒沢参吉)

「秘密」(佐間雄二)が、討議の対象となった。いずれも早乙女勝元原作によるもので、若い人たちに人気のある早乙女作品を素材と

再検討し、座付である黒沢の書く条件を作り出したい。以上が大意であったと思う。

「秘密」は萩坂氏が報告された。早乙女作品の登場人物のパターン、色白で純情な(貧しい)少女、少女に思慕を抱く少しおっちょこちょいな人の善い青年労働者、大人である組織労働者、についての指摘があり、また早乙女勝元の実生活における初恋の失恋(「秘密」の裏話もあり会場は和んだ。「秘密」(佐間雄二)は「太陽……」(黒沢参吉)に比して良い仕事をしたと言える、と結ばれた。私自身も、舞台は見えていないが台本に関するかぎり、ただ筋運び、主題を訴えというだけでなく、せりふの一つ一つに早乙女作品のニュアンスが生きていてという作問氏の脚色の力量に敬服した。いわゆる脚色という技術問題を含めて、作問氏とも少し意見を交換してみたかった。

翌日の討議対象作品は「白い鴉あるいはこるもがえ」(小坂忠)、「小さな駅の物語」(島源三)の二本であった。

「白い鴉……」は一幕劇の諸問題の検討および本誌の応募作品であるということもあいまって対象になった。出席の作者から作品成立の経過報告があり、ついで討議に入った。

作品から受ける老練な印象とはじめて目前にした作者の若さにとこばやしひろし氏がしきりに感嘆し、いっぽう萩坂氏が応募の生原稿でのおおびたしい誤字あて字についてきびしく叱責していたのが印象に残った。

日本戦後史の戯曲化が作者の抱負であり、今回はその連作の一部であるということであった。

つぎに「小さな駅の物語」(島源三)は、本誌所載の「九〇〇一列車接近す」と「小さな駅のある物語」を重ね合わせて一つの作品にまとめたもので、上演も好評であり、戯曲も小野宮吉戯曲平和賞の候補対象になるなどすでに一定の評価を得ている。東り演を土壌として、久しぶりに若い作家が芽を噴き出したというべきであろう。出席の作者から報告があり、関連してこばやしひろし氏から島氏に対する指導体験の話があった。戯曲自体がある意味での完成度に達しており、とり立てて論議すべき点も見つからず、そのせいから「白い鴉……」ほどには意見が鋭く作者に集中するということがなかった。島氏としては歯がゆいことであつたらう、不本意であつたにちがいない。

さて、このように要約してくると、討議はいかにも理路整然と進行し、なにか実りある結論を得たかに見えるが、現実には必ずしもそうではなかった。二日間にわたる論議は多様であり、その発言のひとつひとつの切実さにもかかわらず、せっかくな設定の課題に向けては集中せず、統一しての論理的追求がなされなかった。この責任の一端は司会にある。

自由発言形式の討議のなから、その自由さのゆえに、斬新な意見が生れてくるということはあり得る。またそれは別に、このような問題においては結論など得られるはずがないという先行した考えがある。司会者はたしか、もともと結論は出ないだろうが自由に発言して各人で何かを得て欲しい、という意味のことを討議に先立ってあいさつしたが、とは言ってもいささか安直すぎたと思う。野放しに議論させるのも一つのやり方であろうが、たとえ第一日目などは、早乙女作品を通じて大衆性という作家にとってはまことに魅力ある、劇団にとっては切実な課題を設定したのであるから、議論を整理し、討議を深めて大衆性にかかわっての理論を取り出す努力が必要であった。早乙女作品、その登場人物の性向についての批評・分析はよいとし

て、しからば立ちかえって、いったい我々が作家として取り込むべき有効なものは何か、何が活用できるか、何を捨てるか、我々の指向するリアリズム演劇との相関関係において共通の確認だけでもしておくべきであった。どうも行きつぱなしの一方交通であった感をまぬかれ得ない。創作部会と名うつからには具体的に劇作の技術をふまえて討論しなければ意味がない。

全体として論議が生彩をおびたのは黒沢氏こばやし氏の創作体験にもとづく発言においてであった。主に劇団とのかかわり方が話題の中心となり、出席者のそれぞれが当事者だけに真険に話が飛び交ったのだが、特に劇団とのかかわりから、書くというよりも書くことに追い込まれる立場にある両氏が、黒沢氏が「最近疲れた、少し離れて書いてみたい」とふともらし、こばやし氏が「なによりも劇団経営のことを考えざるを得ない」とニューアンスのある発言をしたが、東リ演の擁立するこの二大ベテラン作家の内部において、いまや作家と劇団組織者との二つの使命が激しく抗争しているのを見えた。痛々しく見え

マを引きずり出し、そしてそのテーマをせりふや行為にいかにも具象化していくかという、戯曲を構築してゆく内部世界にまで踏み込むことではない。劇作理論というのほそこまで踏み込んだところに成立するのだ。劇団と作家とのかかわりで言えば、そういうことであるが、やはりそれ以前に作家の側の主体性にも問題がある。作家対作家の論争、劇作の領域での作家による専門的討議（そのための創作部会であつたろうと思うのだが）、が繰り返して行われて、相互の研鑽と同時に、一定の課題なり理論なりを東リ演全体に提出するというのがなされなければならぬ。そこではじめて若手作家の育成という具体的なプログラムを作成することも出来るのだと思う。

こんどの創作部会では若干の提案がなされた。たとえば細田氏（京浜）の作家との関係を再検討したいという意見、萩坂氏の各自の作品を交換しようという提案、糸口ではあるけれども大切にして行きたい。二日間にはわたる討議が無駄にならぬよう、つぎの創作部会ではどれだけ変って顔を合わすことになるかそれを、お互いの課題としよう。

働きながら演劇をやる我々に十全な条件など与えられるはずがない。少い人員、乏しい機材、何といつても金が無い。やりくりするのは経営製作部だが、作家として条件に合わせて台本を書くのも一つの仕事である。しかし作家が許容できるのは、外的条件に合わすということを否定的媒介として、より高い質へと、戯曲を高めることが可能な場合である折れ合いではあるけれども作家としての創造的情態は保持され、芸術性獲得への可能性として利用することが出来る。だが作家の芸術的努力にもかかわらず、その限界をさらに下廻って、まったくの日常の次元としかいいようのない条件を強いられるとしたらどうなるか。作家としての立場は破壊されてしまう。もし、その作家が組織者をかかえていた場合はなおさらである。劇団組織をかかえているという使命が作家としての立場に先行し、日常的次元での妥協が芸術的追求の鋭さを鈍化させる。それでもなお、劇団を続けることが先決だという現在の状況があり、書き続けているがらいつしか作家としての資質がそこなわれていってしまう。私は黒沢氏、こばやし氏の置かれた危険な立場を思わずにはいられない

(66頁より続く)

ら最終的には舞台と観客との接点に発展連続するもので、一般的な状況論や文化運動論それ自体として自己完結してはいけなれないと思います。また、作品と上演地の諸状況との関係は重要な問題となりますが、私は『穀の谷に』のオルグ活動では、作品の素材の近親性、親和性によりかかり、その上、知己友人に依頼しがちな仕事の進め方をして一定の成果はあげたものの、一番大切なものを見落していたのではないかと、不安にとりつかれています。私はM先生と大江の人達と何によってつながっていたのだろうか。私は単なる連絡係かレポーターにすぎず、オルグ担当者の私の主体はかかわりあいをもっていたのだろうか。

現在、『人形師卯吉の余生』の宮津、加悦谷公演のオルグにとりかかっていますが、何か一つでも解明出来たらと念じています。

断っておくが、私は劇作家としてのジャンルをセクツ的に東リ演に持ち込もうとしているのではない。だが創作の貧困がさげばれつづけ、すぐれた作品が待ち望まれるいっぽうでは、力量のある作家はそのゆえに組織者としての任務を兼ね果たさざるを得ないという状況があつて、鋭さのある作品の生産がさまたげられ、作家としての成長をまはばまれていくことを、事実として指摘しておきたいのだ。これは若い書き手の育成にも影響を及ぼしてくる。我々が働く者の演劇を目指す以上は、運動、演出、演技の理論とともに我々自身の劇作理論を打ち立てなければならぬ。東リ演の場合、演劇運動、それぞれの舞台成果からみれば一定の結果を見せながら、戯曲そのものを取り出してみると、内部から生み出されたものは不完全であつたり、結局は外部からの供給に依存している。また、戯曲それ自体が議論される場合もあるが、おおよそのところ論議が集中するのは、その主題であり意図であり、あくまでも演出、演技、運動の立場からである。それはそれとして必要であるが、生み出された結果としての戯曲が論じられているのであつて、作家という個性が

## 演劇集団 未踏

第11回公演

島 源 三作

関 きよし 演出

### 小さな駅の物語

—喜劇2まく5ば—

七〇年代の幕あき

国鉄機構の末端にある労働者群像を生き生きと とらえ

岐阜「はぐるま」が生み出した

ユニークな作品

七月八日 (6.30) 九日 (6.30)

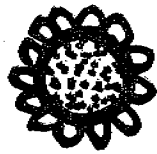
十日 (2.00) 十一日 (2.00)

神田一ツ橋講堂

劇団事務所

渋谷区本町6-29-2 (立川方)

03 (37) 二〇二一・八六一九



# 関西における戦前プロレタリア演劇の研究〔五〕

大岡欽治

(4) 大阪地方におけるプロレタリア演劇(続)  
へD)プロット時代・大阪戦旗座

一九三〇(昭和五)年四月、プロット第二回全国大会が終つてからの大阪戦旗座の動きをみよう。

大阪戦旗座は京都青服劇場と共同で二つの仕事を進めることになった。

一つは、両劇団の提携による「太陽のない街」(東京左翼劇場上演)を大阪と京都で上演しようとしたことである。

もう一つは、当時の大阪の新劇団の内、一応急進的立場を表明してきた関西小劇場、構成劇場、移動劇場の三劇団に対し、プロット加盟の戦旗・青服の二劇団と共に、五劇団による「関西新興劇団協議会」の設立を提唱した。ほぼその準備を終った段階に至つて、突如三劇団の脱退によって未成立に終るのである。

まづ、「太陽のない街」の上演問題についてみよう。これはプロットの機関誌「プロレタリア演劇」(昭和五年八月)第三号に掲載されたものをとりあげよう。  
(以下、当時の状況を直接知るために、そのまま採録してみる。)

大阪戦旗座・ニュース 第四号より

「太陽のない街」上演延期に就いて、前に発表した如く、断然「太陽のない街」を目標として、京都青服劇場、大阪戦旗座は、もりもりとその準備を進め、又一方労働者農民諸君からは絶大な期待をかけられて、その上演の日は間近に迫つて来た。この時にあつて、何故われわれはこの意義ある上演を延期せざるを得なかつたか? (之は決して中止はしない、別項に示せる如くその延期のおぎなひとしプロレタリア演芸大会を開催する事である。)

今、延期理由を左記して我々の真意を諸君に披瀝し今後の仕事を約束しよう。  
一、吾々の惨憺たる努力も報いられず、今日に至るも経済的見通しが充分に立たなかつた事。  
二、三月以後、再三おそいかつた奴等の弾圧により、主要部門員に常に不足を来たした事。  
三、かかる弾圧のために、あらゆる技術上の不足をおぼえ、同脚本を××主義的に上演する可能性が少なかつた事。  
しかし、今回の延期は、吾々の消極的、日和見主義的手段では断じてない。吾々はこれまでジャンジャンあらゆる部門において積極的に活動を進めて来たのだ。  
処が今日になって初めて、右事項において今回公演の不可能性をハッキリ実証的に見たそこで、我々は残念ではあるけれどいさぎよく

決したのだ。

事情はいかにもせよ、労働者、農民諸君に対して全く申訳けない次第である。だがしかしわが戦旗座の今日の情勢を理解してくれている諸君は、これを承認してくれるだろう。

最後に吾々は諸君に誓う!

諸君と共に、此の秋には、吾々の力を百倍にして、ガツチリした我々の芝居を斗い取る事を!

労働者、農民の戦旗座万才!

プロレタリア演芸大会をあらゆる工場・農村へ宣伝しろ!

一方、「関西新興劇団協議会」の件に関しては、同じく「プロレタリア演劇」第三号の「日本プロレタリア劇場同盟報告」の内に、次の一文が発表されている。

プロットの報告は次の如く述べている。

『関西地方に於ける急進的小ブル劇団、関西小劇場と構成劇場及び移動劇場は、こうした小ブル劇団特有の方向の行詰りから来る転換を余儀なくされ、従来の小ブル演劇からプロ演劇へと舵を左に廻したのである。そのことは正しかった。事実その転換が、彼等の真剣な意志と情熱とに力強く裏付けられていた

ものであつたとしたならば、このことは正しかった。この急進的三劇団の転換に対して、同地方にあるプロット加盟劇団大阪戦旗座並に京都青服劇場は如何なる態度を取つたか、戦旗座と青服劇場は共同して「関西新興劇団協議会」の設立を提唱したのである。これは関西地方に於けるプロレタリア演劇運動の拡大強化の為に、又彼等の転換をより正しく発展させる為に、比喩、是等五つの劇団が共同斗争をなすことは絶対に必要であり、その具体的方法として、協議機関の設置が認められたわけである。

関西小劇場、構成劇場、移動劇場は、之に賛成し加入して来た。

其後、五劇団に依つて教度の準備委員会が持たれ、綱領、規約、スローガン等が決定された準備委員会を最後とした。五月十三日その創立を見る運びに到つた処が、突如十三日間際、云い換れば、協議会準備会の斗争が進展するに従ひ当局の注意する処となるに及んで遂に「演劇的活動を以てプロレタリアートの解放運動に参加するのは、最も正しい事で、吾々もそれに向つて行動するが、今直ぐにプロットの統制下にある戦旗座・青服劇場と共同斗争する事は、即ち両劇団が受

けている様な圧迫を被る事は、自分達の生活の安定を脅かすものであるから、時期が来る迄待つて呉れ」と、敗北主義の理由を並べて脱退してつた。こうして関西新興劇団協議会は成立を見ずして解散した。  
だが、プロット常任中央執行委員会では、戦旗座・青服劇場の戦術が誤つていたことを認めて、警告を發した。』

このような一連の動きに対して、プロット常任中央執行委員会としては、次の意見を同誌の同じ報告の内に発表している。

大阪戦旗座 最近の活動

本年四月以降、工業都市大阪を中心とする一帯に勃発した争議は、全産業部門を通じて夥しい数を示している。単に工場に於けるみではなく、農村に於ても、例えば泉南北中通村瓦屋の小作争議の如く、争議の波は昂りつつある。

こうした情勢の中にあつて、大阪戦旗座が如何に闘つていたか。本号「大阪に於ける戦旗座の闘争」にある通り、大阪戦旗座は僅か十名足らずの劇場員が全力を挙げ、各争議の中へ移動劇場を持ち込んで認めらるべき成

果を挙げている。

唯、此際問題となるのは大阪戦旗座の今後  
の果敢なる前進と云うことである。大阪戦旗  
座の人員不足、財政微力がたたつてでもある  
が、全争議回数に比し出勤回数率が低いこと  
である。勿論、我々の移動劇場は、その活動  
範囲を争議の場合のみ限っているものではない。  
左から右までの労働(農民)組合及びそ  
れ等に並行及至は所屬する諸組織、或はブル  
ジョアジーの統制下にある学校・青年団・X  
X等、苟くも我がプロレタリアートの頭部が  
斗争する時と所に、我々の移動的活動は喰い  
込んでいくのだ。全般的に観て、その喰い込  
み方が決して満足する程のものではないこと  
は、我々の斗争の成果を批判するに当り、常  
に問題としていふことによって、また「芸術  
大衆化」が再び云々され、「演劇のボルセヴ  
イキ化」が論じられていふことによって、証  
拠立てられているが、部分的には——と云つ  
ても東京だけだが、今年四月以後移動的活動  
は飛躍的に向上線を辿りつつある。更に特に  
注目すべきは、人員・財政・技術等の主観的  
条件がより良好な東京左翼劇場及プロレタリ  
ア演芸団が持った客観的情勢と、両劇団のそ

が持つ客観的条件と略同一であると云う点で  
ある。

重要な且つ広汎な工場地帯、其処を根城と  
して張られているプロレタリアートの陣営、  
この陣営へ向けられるブルジョアジーの総攻  
撃、彼等に対してなされる我々の側からの逆  
攻勢、無論かかる情勢は今日の日本全体にそ  
うなのだが、特に、東京を中心とする京浜地  
方及大阪を中心とする阪神地方に於て著しい  
のである。共にこうした困難な情勢の中にあ  
って、東京のプロレト加劇団の公演移動両  
形態に於ける活動が大阪戦旗座と余りにも隔  
け離れて活発であると云うことは、前者が有  
する無視する事の出来ない貴重な歴史性及そ  
れに伴うプロレタリア演劇の集団としての良  
き経験が生み出した主観的条件と、役者のそ  
れに及ばない歴史性を基調とした主観的条件  
と、それに日常加へられている中央部に於け  
る以上に野蠻な警察政治とが、こうした結果  
を齎らしたと云うべきであろう。随つて、大  
阪戦旗座の果敢な前進は、現在に於ては戦旗  
座の諸組織を拡大強化することに依つて可能  
なのである。組織の拡大強化ということは人  
員の増加、技術の昂揚等にあるのみでなく、

昇めることによって、又その昇められた要望  
に促され戦旗座の仕事は拡大強化されてゆく  
のである。  
それに対する運動方針は、最近プロレト常  
任中央執行委員会から発表されるであろう。  
この運動方針は、翌九月号の「プロレタリ  
ア演劇」第四号に発表されている「演劇運動  
のポリシユヴィキ化へ」当面の諸問題に関  
する基本テーゼ・プロレト常任中央執行委員  
会」という論文に見ることが出来る。

#### ★ 本稿の主な資料

- (1) プロレト機関誌「プロレタリア演劇」  
第三号 (昭和五年八月号)
- (2) 同 第四号 (昭和五年九月号)

(つづく)

#### 《補》

前号までの大阪戦旗座の当時の参加者の思  
い出が手に入った。ナツプ・コップの活動に  
参加し、現在東京その他に居住している人々  
と、大阪に居る人たちの連帯の会として、昨

スを発行することになった。その最近号の第  
三号(本年五月刊)に、次の一文があり、筆  
者はナツプ・プロットに関係した人で、私の  
まだ大阪での参加以前の事が、前号までの記  
事に関連して書かれているし、この後の戦旗  
座に活動する谷紫郎(伯井紫郎)木村守也、  
高橋正夫などの参加の時期が明らかになった  
ので、ほぼ全文を掲げる。

港区新池田町の思い出

大月常靖

私がプロ文学に興味を持ちはじめたのは、  
昭和二年ごろだった。たしか二十、三才の  
ころだと思ふ。当時の私は、港区の八幡屋町  
にいた。池田町とは電停一つはなれた場所だ  
このインネンから政治ぎらいな私が左翼文学  
の仲間に入ったのだと思ふ。

青白い文学青年だった私が、日本プロレタ  
リア芸術連盟に入ったのは、どんなミチをふ  
んだか、すっかり忘れてしまった。

当時、私は四、五人のメンバーで「赤と黒  
」というプリント刷りの同人誌を発行してい  
た。赤と黒というのは、アナとボルを色で表  
現したもので、どちらが正しいかなんて仕事

をするのでなく、自分たちの作品を発表する  
場所にしよと云うことだった。

そんなことから誘いの手紙が来たが、当時  
道頓堀の喫茶店(店名失念)に文学青年たち  
が毎夜のごとく集まっていた、私もときどき  
出かけていたので、そこで知りあつた左翼文  
学青年から誘われたのかも知れない。

とにかく、いまはつきりおぼえているのは  
日本プロレタリア芸術連盟大阪支部へ事務所  
をつくりたいから云々の手紙を当時の仲間か  
らもちつて、東京から来た人(久板栄二郎)  
に会つたような気がする。

当時の池田町かいわいは新開地で、空家が  
いくらでもあつた。しかし、いわゆる「大学  
は出たけれど」失業中という人物が多かつた  
ので、家主のほうも借家人の職業をたしかめ  
てからでないかと貸してくれなかつた。

その日、夏に近いころだった。久板栄二郎  
の若い妻君(千代さん)と関西学院大学生(一  
あるいは卒業したばかり)の某君が、サラリ  
ーマン新婚夫婦になりすまし、保証人が大阪  
放送局につとめている高瀬という人なので信  
用されたらしく借りることができた。

私は、東大出のインテリ久板と若くて美し  
い妻君のうしろについて、あちこち空家を見

て歩いた。そして借りた家、階下は玄関と三  
畳六畳と台所。二階は四畳半二間の長屋建の  
一軒で、間もなく、全日本無産者芸術連盟の  
事務所になった。そして「戦旗」の大阪支社  
にもなったのである。

最初に「戦旗」の係りになったのは、事務  
所に住みこんでいた佐山君で、少しあとから  
森元宗二君が彼のあとをついで、やはり事務  
所に住みこんだ。

定職のなかつた私は、足しげく池田町の事  
務所に出かけたが、特に親しい仲間はできな  
かつた。私と気のあう文学青年がいなかつた  
からだと思ふ。

私は作家志望者ではあるが、まともな小説  
など書けなかつたので、美術家同盟の仕事や  
演劇同盟の仕事をやられた。同盟員が少な  
かつたので、何でもやらねばならなかつた。

ここまできて思い出したのは、あるとき、  
町工場のストライキ応援のために、芝居を持  
ちこむことになつたことである。

おんたい久板の自作自演の一幕ものを演る  
ことになつたが、役者が不足で、私も狩り出  
された。しかも老母役をやられた。顔は久  
板が描いてくれた。ところが、途中でセリフ  
を忘れてしまったので、泣きながら(自分で

はそのつもりだが)口の中でポソポソ勝手なことをしゃべってごまかした。

こんな失敗のあと、東京の左翼劇場が大坂でゴルキーの「母」を公演することになり、エキストラ集めをかねて、池田町の事務所で開催講習会を開くことになった。(このときの講習会に来た青年たちの中から「戦旗座」が生まれることになった。

そのときの講師として、左翼劇場から伊達信と中村横三(中島淇三)が来た。そして彼らの生活費をかせぐために、大阪放送局から高田保の一幕もの「ある公園の午後」を放送した。私もその他大ぜいで出た。その時はじめて防音装置の部屋を見た。

当時、流行作家だった片岡鉄兵や林房雄などに会ったのも、この新池田町の事務所だった。作家志望の私には特に印象が深かった。また「母」の演出で来阪した佐野セキ(碩)のビッコ姿の演出ぶりが、強く焼きついた。(下略)

(この講習会には、谷のグループから竹内源三郎、木村守也、高橋正夫、風邪で一日しか出なかったそらだ、阿部芳雄等が講習を受けた。他にも二、三名いたが、彼等はそれきり出た。)

# 劇団又通信

## 劇団民衆劇場

初めてお便りします。いつも細かいお心使いに感謝致しております。四月三十日の夜、中野公会堂で、創作劇「カルテ69」を公演。相も交らず観客数は少なかつたのですが、ともかくほっと一安堵したところ。

そんな訳で地方選にはほとんど取り組みができませんでした。「カルテ69」は、日本の医療問題についての習作というところですが、看護婦さんたちの協力を得て、一応集団創作のかたちをとりましたが、不十分な創造しかなかったもので、今後さらに練り上げたいと考えています。今秋は「白い鴉」の小坂の沖繩を主題にした創作劇を予定。九月十一日が皮切りです。三十名という人数をどうするかなど問題は山積。しっかりした見通しを持つために知恵を出し合っています。なお、東リ演加盟を正式に決定しましたのでよろしく。

(東京都府中市柴町三二一八)

## ● 戯曲紹介 (1)

### 「仏さわぎ」と「赤いスカーフ」

今号から、発行所におくられてくる戯曲の紹介をします。正確には紹介というよりも、一寸色をつけて、いい、わるい、位のことを書きたいと思っています。

一応これの蓄積を発行所の財産とし、編集委員会の検討をえて、「戯曲特集号」刊行のステップにしたいという考えです。創作劇を生み出すということは、それを待つ側の方にとってさえ、根気のいる仕事です。長い道のりを要することですから、或はここでの紹介なども、何のことも分らぬということにもなりかねませんが、しばらく続けてみましょう。五月から六月にかけて、二篇届きました。一篇は、「仏さわぎ」(ウノカワムネヒコ)これは一九六九年に書かれ、関芸によって既に各地の労演例会で上演されたとききました。それへ、現在の自民党の農業政策などに照らして若干筆を加えたものです。過疎農村の生活破綻、依然根強い封建支配

おもしろさにひかされて、ぼくは二回読みました。セリフが生きているのです。そのイキイキした面白さは、人間の生真さとしてありますが、いくらか、興にのりすぎて作者の所在がつかめぬということも、感じとしてはあるかもしれません。二百枚を越える大作で、一寸手軽に紹介というわけにはいきませんがこのまま見すごすには勿体ないとは云えそうです。

もう一篇は「赤いスカーフ」(小島真木)今年のメーデー前夜祭に、静芸が上演しました。小品ですが印象は鮮明。生糸工場で、労働強化のために、髪の毛の長い愛らしい少女が機械にまきこまれて死ぬのです。二年もかかっていた長い髪をいとおしんだ少女の赤いスカーフが題名になっています。こういう作品は余りいじると鮮度がうすれるかもしれませんが。

作品とは、作者の内奥で醗酵し、噴き出る

## 演劇サークル「土くれ」

初めての通信なので「土くれ」の紹介をさせてもらいます。「土くれ」は三年前、東京の税務署に働く者五人ほどで、国税当局の、労働組合分裂攻撃と相まって、諸サークルも官制化されてしまった中から、自主的なサークルをつくろうと結成しました。

今日まで五回の公演をもち、サークル員も三十五名と大きくなりました。

最近の公演は、四月二十四日、全国税「メーデー前夜祭」と五月二日、「全国国税若い心のつどい」という催しに、いづれも「乞食の歌」をもって出演しました。今は、秋の第六回公演をめざし、作品に「若者たち」を選んで稽古に入っています。また、職場の問題で戯曲を書いてみようとはりきっています。(森本)

(東京都目黒区緑ヶ丘3-11-2石塚方) 大阪「劇団民青」

私たちは、民主青年同盟の一組織です。それがこういう場に堂々?と報告しているものかどうか。でも全国の仲間との交流という事で通信を送ります。

「大阪が変われば日本が変わる」を合言葉に、激しく斗われた地方選。大阪でもついに、黒田革新府知事を実現しました。私たちは、文工隊を組み、前期延べ六日、十四ヶ所、約八六〇〇人。後期延べ五日、十二ヶ所、約三〇〇〇人の人たちに観てもらい「民主勢力と統一戦線の勝利」「公害をなくせ」「ストップ・ザ・サトウ」を強く訴えてきました。三月二三日の、寒風の中の感激的な一万人青年学生決起集会、三月二八日、大阪城公演で、レッスンを兼ねて宣伝行動、日曜で小春日和とあって、散歩の人が一〇〇人ぐらいたる輪になります。

四月四日には、青学連の統一行動日、「関芸の仲間と共同行動」。こんなこともありました。後半の最終日、堺東駅で通勤客に宣伝行動をとっている所へ、他候補の運動員が連呼の唱和。合戦はエスカレートしてくるばかり。ところで私たち文工隊が太鼓を打ち出すと他候補の方は静かになりました。私たちは通勤客の足をとめ大きな輪をつくりました。これは民族伝統をうけつぎ、それを武器にして闘うことの大切さまた民族的文化は、自民党の支持者をも民主

勢力の側に向って歩ませる力を持っていることを確信しました。

今、大阪の府民は大きな変化をしつつあります。これは私たちの訴えに、立ち去らず真剣にききいる姿に端的に表われているとおもいます。私たちは、どんなに忙しい時でも、キビしいレッスンの姿勢をもち、民俗的伝統と民主的内容をもつ集団を目ざしてありますが、参院選も勝利し、「日本を変える」ため奮闘したいと思えます。

(文責 小川)

(大阪市東成区中本一―七―二三)

日本民主青年同盟大阪府委員会気付)

### 上野市民劇場

いっせい地方選挙は働くものにとつて歴史的に意義深い結果をもっています。全国仲間のみなさん、各々の地域、職場での闘い、ごろうさんでした。私たちが、東リ演黒沢議長と呼びかけに呼応して、創造活動と選挙戦を正しく結合して進める方針を打ち出し頑張りました。

中でも、経営部会を始め、創作、教育部会は、これまでの活動を総点検し、さらに今後の発展にむけて、大変貴重な機会とな

りました。

### ◇活動報告

「天満のとらやん」の移動公演

日本舞踊の会、その他催しでの文芸活動

第二期研究生教育(四月)

第十八回劇団総会(三月)

来年20周年にむけて、記念行事委員会を設け、意義深い20周年のために準備中。第十八回定期公演(十一月)レバを五月中に決定

集団学習会の計画

(三重県上野市丸の内中央公民館内)

### 演劇集団「息吹」

▼「大阪が変われば日本が変わる」を合言葉にし、黒田革新知事を誕生さ、ひき続く八尾市長にも、「八尾にも革新市長を」と「学者、文化人、医師、弁護士、市民の会」を結成、息吹として事務局に専従をおくり、その活動を進めました。社会党の党利党略のため、社共統一、革新統一候補をたてるのが出来ませんでした。

▼さて、その中で息吹の創造ですが――

3月に行つた定期総会で、7月か8月頃に「研究生発表会」をと、方針をたてました

が、研究生の人数が少いこと、団員創造意欲のたかまり、観客の息吹への期待等を考え、劇団としての「試演会」ということで取組みはじめ、作品検討を行なっています。

▼東川宗彦氏が、一昨年来あためて来た大和川「川達え」の第一稿が上りました。

(題名「大和川」)。東川氏も今までの氏の作品をしのぐものにしたという意欲的作品です。一応今秋の上演をめざし改稿中です。ではこの辺で、各劇団の皆さん、引き続き参院選で、力いっぱい闘い、すばらしい創造を生みだして下さい。

(大阪府八尾市堤町一―四〇)

### 関西芸術座

▼5月から、小・中学校を対象に、多田徹作、道井直次・改修「カルドニア号出帆す」(演出・富田悦史)を上演します。

▼6月8日より12日まで、島の内小劇場にて、真船豊・作「見知らぬ人」(演出・岩田直二)を公演します。

▼9月下旬には、柴崎卓三・作「町工場」(演出・道井直次)を上演の予定。

▼高校対象の公演は、ラングストン・ヒューズ作「混血児」(演出・仲武司)を10月より開始の予定。

(大阪府阿倍野区文の里4―18―6)

### 舞芸小劇場

板橋区に稽古場を移し、荒馬座や文化協議会のバックアップという有利な条件もあり、劇団員もふやせるのではないかと、喜劇を主とした小品で公演し、「統一劇場」より面白いと好評でしたが、独自のオルグ体制がくめなかつたため、団員は一人ふえただけで、実動部分一名を含めた三名の退団者を出し、五名で一年間やって来ましたが、うち一名は病氣、一名は勤務体制の変更で、夜勤が殆んどで出れなくなり、公演活動が不可能に近く、三月末の臨時総会で解散するかしないかというところでちりちりになりました。しかし、解散は何としても残念で、また、たくさんの、公演依頼やサークルの演出指導の要請もあとをたたず、「解散しましたから」といつていられないこともあって、病欠だった一名の近い復帰を含め、二名で、サークルの演出協力や劇作を中心にした研究活動をしばらくつづけ

ながら再建しようとして、東リ演には藉を置かしてもらって奮闘することになりました。

選挙では、公害、物価をからませて、すばり革新新政と革新候補の勝利を訴えて、「獅子舞」をもって、三月十日、板橋うたごえ協議会二周年記念(三百六十名)、三月十一日、日本共産党板橋区議会議員候補むた陽子を励ます集い(二百七十名)、三月十二日、同じく唐沢公平をばげます集い(二百八十名)、三月十四日、同じく広川正雄を励ます集い(百名)、三月二十四日、新聞「赤旗」宣伝隊で野外公演、三月三十一日明るい板橋をつくる青年連絡会議千人フェスティバル(五百名)とやってきました

野外公演では子供がベニヤ板で作った「モレリア太郎」のような大きな獅子のあとを追いかけてはなれず、自動車で捲くの苦勞をしました。あれを見たら、野外で子供向きのいいものを是非創らなければならぬと、みんなで話合いました。四月二十三日、「ゲバゲバ三勇士」の出演依頼が北区サークル協議会からありましたが出来ませんので、この日のサークル協議会主催第三回文化祭には、いくつかの演劇サークル

### 信濃小劇場

信濃の地にも若葉が訪れました。ようやく働くことのできる季節です。

(東京都豊島区高松二―二〇今成方)

●松本市他主催の「子供まつり」に協力上演。5月5日のこどもの日に、民主市政の下での「こどもまつり」が開かれ、参加しました。演しものは、木下順二《和尚さんと小僧さん》と斎藤隆介の民話《ペロ出しチョンマ》を語り合せ、それぞれの面をくわえた5人の女性と1人の男性が舞台狭しと熱劇面芝居(?)を演じました昨年末の子供大会につづいての児童劇でしたが、関係者から絶賛をうけ、児童対象の分野で、かすかながら展望がひらけてきました。

●現在劇団員募集を中心に、劇団の宣伝中です。

●これからの予定は、7・8月の長野労働フェスティバル、上田労働祭に参加すべく

#### 群馬中芸

私共は本年十一月で10周年をむかえることになりませんが、演劇センター建設運動、研究所活動、親子劇場運動など、私達を開む地域の中での活動は一定の前進をみながら、一方地域専門劇団としての創造の「質」やその方向の問題、又、創造集団内における民主主義の問題、創造教育を含む教育活動の内容の再点検、劇団経営における前衛性の問題など、いままでの劇団体質に関わる重要問題が山積し、その解明に具体的実践をふまえて、取組まなければならぬ状況です。

特に地域専門劇団として私達が果たすべき任務とその役割については、日本の政治文化状況の中で「われわれは今この場においていかなる役割をもちいかにしてその任務を遂行せねばならないか」という問いを自らに課して、日常的活動の中で一つ一つ明らかにしてゆく事に取り組んでおります。そうした意味からも、東リ演劇協会資料に掲げられた問題提起は、私達の胸の内に深く落ちこみ、「是非参加したかった」という思いが響いてきます。

では、最近の活動について概要を記します。

- ①第7回こども劇場「三郎と山猫」は、6月23日部内発表の形式で仕上げ、7月より活動に入りました。群馬、長野、埼玉の小中学校での公演活動で現在までに62公演を終了、12月までの目標40公演中、すでに26公演が確定しています。
- ②第8回高校巡演劇場は、ギョウター・ヴァイゼンボルン作（加藤衛訳）「天使が二人天降る」。関東地方及び新潟地方を11月より巡演。年内目標を35公演とし、普及活動に入っています。
- ③研究所の活動は現在専攻生を含め30名。特別公開講座ももうけ、教師、労働者、市民と共に、「演劇を語る夕」として意義のある活動を持つことができました。特に俳優座の三島雅夫さんを招き、「天使二人天降る」の稽古を見ていただき、具体的な指導をうけたことは、中堅演劇陣にとって大へん有益でした。

「演劇を語る夕」のキャッチャムは次のようなものでした。

〈人体の機能について〉講師小暮公孝

〈群大医学部助教〉〈現代の演劇〉入江洋佑（東京演劇アンサンブル）〈古典芸能と文学〉根岸謙之助（万葉研究者）〈くらしとことば〉上野勇（日本民俗学会会員）〈スタインベックの文学〉大浦暁生（中央大学助教）〈現代に於ける演劇の問題〉三島雅夫。

- ④群馬文団連の仕事としては、幹事、事務局団体に再選され、群馬における公害資料の編集、又、関越高速道路開発などにとりなり史跡破壊に対する闘いなど、文団連外の文化団体、市民と結集して「郷土破壊の実体と文化の闘い」のセミナーを企画。その外にも、県民会館の不当な使用料金、群馬会館を文化団体に解放させる運動、官製下の団体に對する優遇処置の差別の問題（一例でいえば群馬交響楽団は三〇〇〇万近い国費・県費の補助と稽古場は高崎市から提供されている）などにとり組み、文化的要求として自治体につきつけ、対県交渉の請願運動も10月から展開する準備に入っております。

（中村欽一）  
（前橋市昭和町三一五一―二）

#### 四日市市民劇場

仲間の急速な減少と、中心になるべき劇団員の欠席などで、劇団の体質が、めっきり弱まっていました。

しかし、東リ演、三劇協の中で、学び、経験したことを軸に、体制を強固にしよという全劇団員のきびしい自覚の上に立つて第四回三劇協（三重県地域劇団協議会）総会に向けて、きめ細かい討議を重ね、具体的目標を決め、明日に明るい展望をもって頑張っている所です。

新しい仲間も増え、発表を来年二月末とし、目下、作品選択に懸命です。

#### 三劇協総会の報告

九月十八日（土）十九日（日）にかけて第四回総会を、三重県の北部、四日市の西方、湯の山温泉近くの尾高高原で行ないました。天気晴朗であれば、伊勢湾が一望できる高台ですが、生憎の雨で残念でした。

前夜は、フォークダンス、歌に二時間、つづいて部屋別交流会、翌日、午前中に総会を、午後は、やや小康状態となった空模様の下、戸外で、ゲームを楽しみました。

これは、過去三回が、新人、中堅、幹部

に分け、テーマを別に持った分科会に終結したのを、今回は、総会を除きクレーション中心に考えたためのもので、実に和氣に満ち、楽しい交流が生まれました。

前夜の部屋別交流会に、ひとつのテーマが与えられました。それは、七〇年演劇行動で全県一つにまとまった公演が出来たその積重ねの上に立つて、七二年度は、一つの作品に結集する合同公演をしようという事です。

#### （総会参加者四四名）

役員は左の通り決まりました。

会長 森 賢郎（四日市市民劇場）  
理事 今中敏文（津市演劇集団MU）  
杉森正美（上野市民劇場）  
竹中 亨（名張演劇サークル）  
岸 武男（劇団津演）  
佐藤和義（桑名市劇団すがお）

#### 山本淳子（四日市市民劇場）

会計監査 若林一博（劇団津演）

四日市市栄町四一九

アンデレセンター内）

#### 劇団協同

◆七月二三日、立川社会教育会館ホールでの第15回公演「三年寝太郎」「多摩のとらやん」「おとなのためのおとぎ話」は、昼夜計一千名をこえる観客の支持をえて成功をおさめました。

◆しかし劇団の総括では、これまでにない観客との交流はえられたとしても、演目に観客対称が不明確な点があり、創造的な弱さが出た。「寝太郎」の演出にも甘さがあり、財政上の赤字も手痛い。などが話し合われ、しかし、この公演で得られた三多摩に根をおろした演劇文化の基礎は、新しいちからを湧かしたせました。

◆「寝太郎」「とらやん」再演。一月二七日（土）小金井公会堂。

◆市長選挙では、劇団でも、小型式出演、司会などで奮闘。ついに阿部行蔵革新市長の実現をかちとりました。

◆稽古場建設のキャンピニアを展開中です。

「泰山木」(京浜)「フェードル」(はぐるま)  
「寝太郎」(協同)について

萩 坂 桃 彦

「泰山木」で京浜は、なにがしか脹らんできたかに見えた。

それは、いろいろとディテイルをおろそかにできないこの本の効用でもあるらしかった。やや簡傲すぎる云方になるが、かつて京浜はストレートな説得型を、その芝居作りでの体質として持っているかのように、ぼくには見えていた。どこか、怖いもの知らずみないなところがある。

それがゆるいカーブで揺らいだようにおもしろ。まだ感じとしてしかそれは云えないが、そんな気がやんわりとする。

たとえば髪を垂らした女などは、やはり、これまでの京浜のいきさつでは出て来ぬのだった。この役は、「泰山木」の人物の中でも厄介なしろもので、顔半分のケロイドと保育所の保育と娼婦という三つの相容れぬものを、身一つに表現してみせることは、どこ

でも余り成功していない。「泰山木」は、東リ演だけでも、ぼくにとっては四ツ目だが、この役に限っては、京浜のが一番いい。

例の、神戸ハナ婆さんでも、この彼の室野定子は、かなり、従来の足腰、声音が矯められている。これらのことは、どうやら、横田治(演出)の気のはいった仕事として出て来たのだからとおもう。

「泰山木」を、京浜が、一年中で原爆投下について、最も関心の高い八月にえらんだことは、賢明以上のことだった。そのことだけで、それは行動になった。

こういうことは、京浜はなかなかうまいとおもう。

そういう時期でなければ、この芝居の熱い情感はかもしにくいところがあるのだ。近く労芸がこれを、十月にみせてくれるが、目に見えぬハンディはあるだろう。

た程度)

「泰山木」を、その劇団に根づかせることはむづかしい。土の会(初演)の演出構成など、一定の成果はあったが、観客の胸に、匕首を突き刺すような確かさは、この本では、むづかしいとぼくはみている。

(8月12日所見)

ところではぐるまの「フェードル」を、いまもぼくは愛惜している。それは岐阜が遠かったというだけではない。あの芝居もとうとう、大道真がバタバタと片づけられて、やっぱりおわってしまったのか、という愛惜である。

劇団の第32回公演として、見たひとなら分るが、あのさして広くもない稽古場を根城に一ヶ月ほど打ちつづけるという、一寸考えられぬことを、かれらはやったのだった。それも、ラシイヌの古典悲劇「フェードル」である。

ここでラシイヌ論をするつもりはないが、シェイクスピアと並び称せられた大劇作家位の知識で云っても、沙翁の壮大なロマンチズムに対して、ギリシャ美とキリスト教的情緒の混然としたラシイヌの古典悲劇。その大

「泰山木」については、ほぼ、ぼくの感想は出つくしている。

単一の劇団で、これを全うして見せてくれたところはなかったようだ。一つの思想として、この本を押さえることはむづかしい。また作者もそれは避けているようだ。自然、その抒情性にもたれて、ヒューマニズムをうたうことに身を寄せがちである。そこに一種の通俗性が生まれ、舞台の人物が妙にきれいになってゆく。にくめない、ユーモラスな、かわいハナ婆さんの話に、話はおちてゆく。

木下刑事のりんかくなども、つくりにくいもの一つである。これは甲府やまなみのがよほど良かった。京浜の団のぼるは、分つてはいるらしいのだが、からだはほぐれない、言葉がほぐれない。振幅に乏しい。

それにしても、それは京浜だけではなかったが、瀬戸内海の離島の情緒、くずれてゆく漁民の生活の切口が、意外に見えてこぬ不思議さだった。警察の小使と東京に憧れる食堂の出前持ちのたたまいに、それが、追って来ぬ。このことは、作者小山祐士の「瀬戸内海の子供ら」(昭和11年)以来の資産なのだ。そして云えは、わずかに、創芸と青年座の合同公演の舞台に、その片りんがのぞけ

きさと深さを、はぐるまの「小劇場」に結びつけることは、当初、ぼくの頭では不可能だった。

「何をみせられるのだろう」位の高はくった、正直。

そこで、どうやら予想に反して、もっともラシイヌらしいラシイヌの芝居を見せられたというハプニングはおきたのだが、これにはいかにも、こぼやしひろし(演出)らしい計算があつて、フェードルという悲劇の女の宿命に焦点をあて、それをエモーショナルに、そして極めて現代的にみせるという手の内があつたのである。

フェードルは妃である。夫の王が他国との戦争に赴いた留守中に、王の実子イポリート(フェードル)にとっては義理の子)を恋う。この不条理の恋にフェードルは竟に毒をあおぐのだが、ラシイヌのこの十八番の命題(たとえばカミトリダアトなど全く同じだ)、「恋か死か」、宗教的拘束と人間解放のジレンマを、あの、さして広くもない稽古場に圧縮してみせたのである。これなら出来る。出来た。

観客の中には、三回も足をはこんだのがあつたという。一回では分らないから来るし二

回見たらもう一回見たいということである。おそらくこの人は、ラシイヌなど知らぬ人になりがたい。そして、見終つて、ラシイヌを知ることができた人になりがたい。

ぼくはこの事象を、はぐるまの、地域に根ざした創造体制のメリットと踏みたいのだが(実際に財政的にも破綻がなかったそうだが)それが、劇団のスローガンやアピールだけになしに、あの、うっすらと落ちた照明の下でもつれた糸玉をほぐすようにして、長い口説を語ったフェードル役の武藤幸子と観客との間で、念入りにでき上つたのであろうことを重く見る。

この場合、武藤幸子というのは必ずしも個有名詞でなくていいのである。むしろ、それは、はぐるまの創造のトータルである。つまり、登場人物十人ほどのこの芝居に、はぐるまは複雑な全力投入をしたのだった。あの稽古場をフルに利用して、客席を丸ごと包みこんだムード作りや、縦横に駆使した。効果・照明の鮮やかなアンサンブル、また、たとえ「小さな駅」を書いた島源三が、セリフの一つもない石ころのような人物として坐っていたり、制作部の姐さん、加納美千子がい



# 仙台小劇場の再出発に拍手

作 間 雄 二

(弘前演劇研究会)

六月十七日、十八日の両日、仙台市公会堂で、仙台小劇場再建第一回公演、早船ちよ原作、作間雄二脚色、瀬川龍夫演出「キューポラのある街」が上演された。再建第一回公演とは、劇団が謳っている文句ではない、私が「東リ演」の仲間としても、強くそう印象した舞台であるからだ。劇団はチラシに書いてある。「仙台小劇場は劇団員の減少、劇団体制の混乱などで、ながいこと公演活動を休んでいましたが、昨年から活動を再開しました。これから七〇年代の働く者の劇団にふさわしい、演劇活動を着実にすすめるつもりです。ご支援のほどをおねがいします」

仙号小劇場の体制の混乱がどういふものだったのか、私は詳しくは知らない、また知る必要もなかった。問題は、私たちの力が仲間として必要だと、求められた秋、いくらでも力を貸そうということだった。正確には忘れたが、三、四年まえ、私の脚色の「キューポラのある街」を演りたいという話があり、

席のさわがしさに肚がたったり、遅れてくる客に、はやく席を見つけてくれないかと、気をもんだり、幕間の廊下やロビーでの客の会話に耳をそばだてたり、すごく生理的に厄介なものである。その日は、そうでなかった。静かな暖かさみたいなものが客席にあった。ほとんど若い人が占め、セニラー服が目立っていた。仙台小劇場の再建の幕あきを、じっと待っている、友情のようなものを、人いざに感じた。

客の反応は素朴であった。舞台も素朴であった。二、三の俳優さんのぞいては、みな初舞台だと、あとで早川氏に聞いた。だから演る術を持たないから、それを匿そうともしない熱演だから、ある意味で新鮮に感じた。私はいつもうちの連中に、演る力もないくせに、あるふりをすると言っている。労演の例会の舞台でも、そういうふりの演技を観ると、たちまちシラける。下手は下手なりに、役に生きることができているのだ。下手を匿す必要はない。しかし、勿論、下手は下手ですむものではない。基本的なものは身につけないといけない。それは稽古の仕様で身につけられる。例えば、相手役の台詞が聞けない(自分の台詞だけで芝居する。台詞を喋ることだけが芝居だと思っている)だから問がとれな

私からも是非とお願ひしておいた。その後、

劇団の言う、体制の混乱がおこったのではないだろうか、そう私は記憶している。だから、三月上旬、労音・労演の税金問題で仙台へ行き、仙台労演の事務局で早川氏に会い、「キューポラのある街」公演にやっつきつめたと言われた時、ある種の感動を感じないわけにはいかなかった。良く困難を克服してきた、仲間劇団の再起に対してであり、一つの作品が(「キューポラのある街」が)挫折と再起の橋渡し(B・G)になっていることに対してであった。「東リ演」への復帰は、年内は無理だと思いが、来年までには、劇団の意志を統一して参加したいとも言っていた。今年、やっつきと青森の「劇団支木」が加盟したし、八戸には、青年劇場の研究所にした、新堂君を中心とした「劇団東風(やませ)」が生まれて、今後「弘演研」とも兄弟劇団としてやっつきこうということになった「東リ演」内での「弘演研」の孤独も(奥羽

い。先読みする(段取り芝居)等々が、仙台小劇場の舞台にも散見させられた。初舞台だから無理もなかった、としようか……。いや矢張り初めてであればあるほど、基本的なもの大事にして欲しかった。これは演出者が責められる問題かもしれない。

もともと、そんなことにはお構いなく、トチリも御愛敬で、客席は若い笑い声がよくおこり、またある時は、シンとして、目頭へ指をはこぶ女学生たちもいた。もともと、此の「キューポラのある街」は、若者たちに距離のある芝居ではない。その意味では、客席のほうで相乗作用があったかもしれない。だから逆に今度は、朝鮮人への差別の問題、朝鮮人の父、日本人の母をもつ、ヨシエ、サンキチ姉弟の痛み悲しみの問題、朝鮮への帰国の問題が、どれだけ若い客席に突き刺さっていたかとなると、疑問だと言わざるを得ない。上演意図に此うある。「この劇のなかには朝鮮人が出てくる。それがどういう意味をもっているか、それをここでへたに解説しようと思わない。日本人として、日本の働く者として、観て下さった方々の一人ひとりがそれぞれに受けとめて下されば幸いである」確かにそれは、そうであるのだろうか、私は、演出における消極性を例えれば此の文章か

B、東北Bで一集団だった)もなんとか解決しそうだ。

さて私は、六月十八日朝、弘前をたち午後には仙台に着いた。あとで聞いたが、「劇団山形」が前日に観にきていて、会えず残念であった。しかし、八月の「ねぶた祭り」に、研修旅行とかで「劇団山形」の若い人が会いにきてくれて、いろいろと、「東リ演」についても話しあうことができた。

劇場である、市公会堂は六百人ほどの座席で、舞台の奥行きはすこし足りないが、私たちの芝居には適当な所である。ところが、近くとりこわされるといふ。あとに、千数百人席数の、市民会館が建てられるのだそう。弘前でも私たちは劇場としては市民会館しかないから、劇場費を最低七万を計上しなければならぬ、仕込み費の半である。この事がどれほど、私たちの、労演も同様、演劇運動の障害になっているかわからない。「仙台小劇場」も今後、会場探しにそのエネルギーの多くをさかなければならぬだろう。

舞台である。私は、私の作品を客席でじっくりと観るのは、観せつけられるのは、これで二度目である。正直なところ、気持ちの良いものではない。舞台の欠陥が、すべて手前えの本の所為みたいな気になってくる。客

らも改めて感じる。だから、演じる側も、林永均(瀬川竜夫)、ヨシエ(阿古さとえ)、サンキチ(孝乃りえ)に、もう一つのツッコみが足りなかったと思う。尤も、私にはこれからかかる、こぼやし・ひろし作「湿地帯」が、デンと頭にあつたからかもしれないが……。ジュン(勅使河原妙子)は暗さが目立っていた。タカユキは、二十才前後の青年が(大沢勝)が小学生を演じたのだから、とやかく申しあげられないが、随分と客席の笑いを誘っていた。しかし、ワルのりする人だ。しかし皆ゆたかな可能性をもった人たちだと感じた。その素朴な力を大切にして欲しい。次の舞台がたのしみである。

東リ演の総会で、本がない、ないとの声を聞いたが、私は最近いたく感じるのだが(東リ演内で)本がない、書き手が少ないというより、演出家はいったいどうなんだ、ということだ。毎年のゼミで出逢うモデル上演というやつ、職演祭での数々の芝居、いちばんの不足は演出である、と私は感じて来た。もちろん私も演出をやるから、私をもひっくり返すの談しである。芝居を生かすも殺すも、演出次第であることは、今更いうまでもないことながら、矢張り東リ演各集団に、演出軽視の風潮がまだ残っていないか……。

ぼくの私的な感を含めながら報告したいと思  
います。

演出・出演者側(以下●印)この作品は一九  
六九年十二月に『銀行生活』としてすでに上  
演しているんですが、その比較でも結構だし  
今回の舞台の印象批評からでもひとつ！

劇団未来側(以下■印)一生懸命ごとぶつ  
かっている事に感動した。しかし観たって何  
かしら物足らなさを感じた。

■地域の仲間を根を下した活動を目指す  
という点において、金融の職場の問題に取り組  
まれた事はすばらしい。

■テーマがはっきりせず、モヤモヤしたも  
のが残って、すっきりしない。ドラマの筋は  
簡単で明瞭である。にもかかわらず、テーマ  
がはっきりせず、モヤモヤとしたものが残る  
のは、どうしてだろう。

■導入預金のカラクリがわからない。した  
がって何故預金した自分の金が引き出せない  
のか解らず、農協の役員が大声でガナること  
だけが耳につく。

■「私感」もし、農協のいうように預金が払  
い戻されていたら主人公である瑞江は死なな  
い。

■メの焦点がボヤケてはしまわないか。企業の  
あくなき利潤追求の中で、瑞江だけではなく  
誰もが死に追いやられる危険性がある事をく  
っきりと浮きぼりにしてほしかった。

■活動家新見の日常の地味な活動が浮いて  
しまう。

■村谷がカッコ良すぎて、新見の行動がは  
っきりしない。

■組合役員である迫川が、ダラ幹を類型化  
しすぎて、薄っぺらい。

■「私感」サークル活動を通して地味に活動  
している新見はそれなりに解るのだが、問題  
は村谷である。一見良心的に見える村谷が、  
あまりにも前面に出すぎている。たとえば、  
宗藤常務を迎えての職場集会の場で、新見は  
瑞江自殺事件の本質を何んとかはっきりさせ  
ようとするが、村谷が、スーパーマンになり  
すぎて、その事がはっきり出てこない。勿論、  
企業のきびしいしめつけによって、バラバラ  
にさせられている状況の中で、新見の行動が  
ある程度浮いてしまふのは解るのだが、村谷  
の行動は必要以上に新見を浮かしてつた。  
さらに組合役員の迫川が、企業ベッタリのダ

くても済んだらうし、(勿論この事だけが  
原因ではないが)、支店長の首切り、藤崎の  
逮捕はありえない、とすれば、ドラマが進展  
するに従って、何故あの預金が預金者の手に  
戻らないのだろうと疑問がふくらむ事は事実  
である。さらに――

■瑞江が何故死ななければならなかったの  
か、その必然性がはっきりしない。

■金融再編成による企業のしくみ、権力の  
大きさ、その怪物ぶりをもっと大きく描いた  
方がより瑞江の死が観客につきささるのでは  
ないか。

■瑞江を死に追いやったものがはっきりせ  
ず、その者に対する怒りがこみ上げてこない  
むしろ、かわいそうにならで終ってしまう。

■確かに死に対する必然性が弱い部分があ  
る。しかしあの状況の中で死を選んだ瑞江は  
少々異常である。

■「私感」瑞江の死に対する必然性が弱い事  
は僕もそう感じている。その一つに瑞江の人  
物像がもうひとつはっきりしない。即ち、  
万博用地買収に対して死をもって反対の意志  
表示をし、菜の花でうまるこの田畑を農民の

ラ幹をあまりにも一面的にとらまえてはいな  
いだらうか。登場してきたとたんにその事が  
解ってしまう。銀行面接にもなる合併問題  
で、新見と討論するが、軽薄さだけが目につ  
く。迫川のもっている思想性は、それなりに  
一本筋が通っていないければならないと思うの  
だ。

■舞台の限りでは、自分は明日から何をし  
たら良いのかわからない。

●方向性を暗示するためにこの舞台を創っ  
たのではない、この現実のきびしさをはつき  
り出す事の中で、瑞江の死を一人一人がどう  
とらまえるかが問題だ。

■「私感」瑞江の死を一人一人がどうとらま  
え、どう乗り越えようとしたのが、はつき  
りしていれば問題はない。しかし、主に演出  
の問題であるが、あれだけ、ひっこく観客を  
同化してしまうのはどういう事だろう。効  
果音楽といい、菜の花の処理といい、やはり  
うなづけないのである。

■ずい分悪い事はかりをならべたようだが、  
総勢40余名の、熱気あふれる舞台は、やは

手から取り上げるなど叫び続けた文を、瑞江  
はどう見ているのだろうか。支店長代理であ  
る神壁に、『銀行の仕事は野良で百姓仕事を  
しているのとはちがうんだから』と云われて  
キッと神壁をにらみ返す。或は、同じ村の銀  
行の守衛をしている倉井に、『なアおっちゃ  
ん、夢みへんか?』『夢?なんの?』『た  
んぼや菜の花の?』

一見、日常的に流されてしまう会話の中  
に、根強く残る文の影響をはっきり見つけ出  
さなければならぬだろう。つまり、必死に  
銀行員になり切ろうとする瑞江が、どうして  
も銀行員になり切れなかったのはどうしてな  
のだろうかという事を、もっともときびし  
く、深く、煮つめなければならぬのではな  
いだろうか。瑞江はいう。『銀行は、お金も  
人間も食べてしまう――銀行の責任を個人の  
責任にすりかえ、すずしい顔をして銀行はま  
すます太っていく。』と。瑞江が必死に銀  
行員になろうとすればするほど、この事が、  
よりはっきりと見えてくるのだから。

死をもって問題の自己解決をはかった瑞江  
は、演出のいうように少々異常なかも知れ  
ない。が、しかし、それでは瑞江を死に追  
いやったものが何んなのかというかんじんカナ

り迫力があつたし新鮮であった。さらに演技  
陣の層が一まわり厚くなった事は強みだ。  
大阪にデッカと根を張り、大阪の働く仲間  
と一緒に、組織的にも、創造的にも一まわり  
大きくなるうとしていく劇団『大阪』に、僕  
は大なる期待をもっている。

### 第9回「東京働く者の演劇祭」

11月11日(木) 6:30より

全通・全電通合同

芳地隆介作「橋のある風景」  
演劇集団ぶどう  
プレヒト「白墨の十字」「職業輪旋」

11月12日(金) 6:30より

土の会 矢野喬作「異聞お伽草子」  
11月13日(土) 3:00より

劇団泣断(理大工部演劇部)

妻の会 本田英郎作「若い座標」  
11月14日(日) 1:00より

るつほの会 劇団創作「ある青春」  
民衆劇場 相沢嘉久治作「風・雪・雨」  
社会文化会館ホール(三宅坂)  
参加協力券三〇〇円(全通し)

「獅子」 — 劇団福演 —

土屋清 (月曜会)

相当に類型的演技をふくみながらも、全体として好感のもてる、面白い舞台になっていた。私の劇団でも二度ほど上演しているせいか、どうしても自分のことと比較してしまいますが、農村の風土というか、匂いというか、そうしたものは、広島の私たちの舞台よりははるかによくできていました。人物のタ iubzuri、衣裳、小道具、装置の隅々にまで、それはよく眼をくばってあるのに感心しました。ただ、それらの細かい工夫が、タイプ、風土の形成にとどまっただけで、あの、戦時中の、押し殺されるような空気の中で爆発する人間性——そのすさまじいまでの迫力にまで迫っていない、そこに結びつけられたものでなかったのが残念です。

後半の芝居のたみこみよりは、まことに妙を得ていて、ぐいぐいひきつけられるものがあったのですが、前半での、かんじんの「雪」と「圭太」をめぐる「吉春」と「お紋」



(劇団福演 — 獅子 — の舞台)

の関係が、底深くでいかなかったために、分厚い下敷きのある面白さにまでなつてなかつたようです。演出者が「郡六」という相当荷のかかる役者も兼ねていたせいか、その点ではやはり、やや近視眼的な演出になっていて、部分的形象に追われて、中心になる太い行動線をひきだし得なかつたように思えます。

演技の問題では、古い劇団員の経験主義的なものと、新人の水々しくはあるがまだ定着していないものとの混合がめだち、ところどころに穴をこしらえていました。セリフのとおりにくさ、人物関係の不鮮明さなどという基礎的な問題も含めて。こうしたことは、私たちのまわりに共通してある欠陥ですが、福演の場合、すこし演出者が演技者にたいして手加減どうか、甘やかしていた面もあったのではないですか？ 正劇団員六名で、あとは全部新人の協演出演という事情はあったにせ

よ、まったくの外部の新人に対してもすこしも遠慮する必要はない筈です。演出の柏原武蔵という人物は、演技者に対して手加減をするような人にはまったくみえぬのですが、もし、私のみたような点があったとすれば、もつとほかのところでの原因——柏原演出が、若干でもあたりをおもんばからざるを得ぬような内部的要因、演出が存分に力を発揮しきれないように押しあげていく、劇団の創造的団結——劇団組織の問題、等も介在していたのではないかと。これは憶測ですが。(要らぬ世話)

劇団福演というのは、実に魅力ある劇団です。僅か六人といっても、その一人一人がうらやましいくらい芝居好きの、それぞれに独特のファンをもった劇団員なのです。劇団をとりまく観客層も、厚く、近しい関係をもっています。こんどの公演でも、雨の中を、開演一時間も前からお寄り客がかささをさして行列していたのには驚かされました。また福山市から約一〇キロ離れた鞆(鞆網で有名な鞆の浦)という人口一万数千の町での地域公演も、鉄工所のオヤジさんや、漁師や、学校の先生、映画館主やらが、かけずりまわって準備してくれたものだといえます。

劇評

銀行の中のそと — 劇団「大阪」準備公演 —

大塚雅春 (劇団 未来)

あるいは「源」といった脇役、小学生役の「春二」にいたるまで、初步的な問題はあるにせよなかなかの好演で、よく全体の中にとけこんでおり、なんでこれらの人が劇団員でないのか首をかしげたくらいです。

をもった客席であったことを、とても嬉しく思います。観客数は千百名。九月十七・十八・福山市民会館での公演でした。終りに、主人公の「吉春」に、思いきって客演として私を起用しなかったのは、演出の一大ミスであり歴史に残る痛恨事でありました。

金融演劇サークルと全損保地協演劇サークルが合同して、劇団「大阪」が誕生するという。両サークルともに六年間の地道な活動を経ての合併である。金融に働く仲間組織され、金融の仲間に観せる事を土台に芝居を続けてきた両サークルも、今では他産業で働く

難をも克服するであろうし、総勢40名の意気と情熱は、集団の相言葉である「大阪の働らく者の心に根ざした舞台創造を」保証出来るものと期待している。

層もそれによって広がっている。劇団化がそれは容易な事ではない。しかし平均年齢25才という若々しさはいかなる因

その、劇団「大阪」結成の為の準備公演である「銀行の中のそと」(井上満寿夫作・熊本一演出)が8月11・12日、大阪郵便貯金会館で催されたが、後に劇団未来(8名)と演出・出演者(7名)が参加して、合評会がも

たれた。そこで出て来たいくつかの問題を、

◇九月〜十月は劇団員拡大月間。  
(国立市北三二一)

### 人形劇団京芸

総会の御成功おめでとうございました。例年総会時期に京都独得の「地藏盆」の地域小公演のため参加できなくて残念です。総会での中心課題であった「創作活動をどう発展させるか」私達にとっても切実な問題です。

今年は京都ブロックの日常活動を活発にし、革新、自治体のとりである京都の民主府市政にふさわしい、質の高い創造普及を目ざしたいと思っています。

東西両り演の作家、演技者、その他各部門の交流例会などもちたいものです。皆様の御健闘を祈ります。

(宇治市白川鍋倉山35―20)

### 土の会

九月二日、区民会場で第10期生の終了発表会を行いました。劇団では期生を新人会と呼んでいます。今までやって来た基礎訓練をそのままの形でお客さん、劇団員に観てもらい、同時に劇団員も何らかの発表を行います。いわば劇団にとって、日頃の

訓練を競う日です。くわしくは10回生の文集にのせました。実費百円でおわけしします。でお申し込み下さい。

さて劇団は、五人の劇団員を正式に迎え入れ、秋の公演(11月12日の東働演12月4・5日の自主公演)の取組み、矢野喬作「異聞お伽草子」の猛稽古におわれています。これは一昨年の「なまねこさま」に続く矢野さんの新作で、作者は、これまでにない張り切りようで劇団に新しい創造の質を求めて挑戦してきています。劇団もそれに答えて連日の稽古は火花を散らす熱気、まさに夏の東り演総会で問題となった作家と劇団の関係が新しいつぼの中で実験されています。前号の通信でもご案内しました

が、現代と室町末期の下廻上の時代をつなぐ風変りな芝居です。どうぞご覧下さい。  
(岩田 稔)

(東京都港区西麻布四一五―九)

### 舞芸小劇場

参院選挙用に、豊島区の民主紙芝居サークルの作った紙芝居「春日さんと握手」をうたごえ、その他の文化活動家と組んで人物ごとにセリフをわけたり、歌ハミング

を入れ、通算十一回、動員数一〇〇〇名をかちとりました。(4・5人の小集会から大中集会)。どこも好評で、みた人が、これなら自分たちにも出来る、その人達を創意で無数の小集会に発展していきまじだ

日常的には、月二回、5・6人で戯曲読書会を開き、チエホフから始めて、タカクラテル訳の「ワトニア伯父」、エルミローフの「チエホフのドラマツルギー」の「ワトニア伯父さん」「三人姉妹」にもはいり目下登場人物の研究をしています。このあとチエホフの一幕物、「桜の園」にすすめていく予定です。十一月初め、豊島区でい

ろんなサークルが集まって文化祭をするように組織中です。  
(東京都豊島区高松二二〇今成方)

### 演劇サークル「土くれ」

事務局の皆さんのご奮闘に敬意を表します。先に、浜松で開かれた東り演セミナーには、私たちのサークルから3名が参加

貴重な経験を持ちかえってくれました。目下、私たちは、10月30日の第6回公演山内久作「若者たち」にむけて全力をあげて頑張っています。

政治的にも経済的にも問題は山積。そうやすやすとは、明るい未来はやって来ません。それでもやらなきゃ、永久に前途はひ

られないですからね。頑張らなくちゃ、  
(東京都目黒区緑ヶ丘3―11―2)

(石塚方)

### 大阪協同劇場

11月17・18日劇団公演  
プレヒト作「カルラールのかみさんの銃」と、「沖繩案内」(創作です)の二本立て

「沖繩案内」―今回は、15分程度にまとめてしまいましたが、沖繩の全面返還を目ざして、一本でも十分上演できるものに仕上げつもり。10月1日は、第二期新劇教室の入所式。研究期間は一年間。若い層に期待しています。

(吹田市津雲台5―15 D 53―307奥井方)

### 上野市民劇場

広々とした会場で盛り沢山な企画と今年も大変充実したセミナーでした。からっかぜの仲間の皆さん御苦勞でした。学ぶところが多々ありましたが、取り分け全国の仲間の報告や交流の中からややもすると内に籠り勝ちな自分たちの活動を広い視野で

点検することが出来たことは大収穫でした。集団民主主義(創造的・組織的・人間的)の確立を超課題として今後の活動に多くの学んだ教訓を活して行く決意を固めています。  
これからの活動計画―

◇地域のすみすみまで僕らの舞台をとどける方針に沿って昨年好評を博した「夕鶴」の移動公演。

◇47年に創立20周年を迎えるための記念行事と公演活動の準備として、創立20周年記念、総合5ヶ年計画(稽古場建設その他)を考えています。

御支援、御協力をお願いします。

(三重県上野市丸之内・中央公民館内)

### 人間座

全国のなかまの皆さん。御活躍をお喜び申し上げます。

わたくしたちは、昨秋以来、創作劇「人形師卯吉の余生」(府民劇場)の巡回公演を、地域の観客とかたくむすびづく方向でつみ重ねております。すでに、福知山、綾部を皮切りに、京都市内、舞鶴市、宮津市加悦町、野田川町で、計十回上演しこの秋

の十月末には、大江町でもとりくみます。いづれも地域のはたらく人たち、婦人、老人、教師の方たちと話し合いをつみ重ねてゆきつつ、地域の文化の問題をいっしょに考えてゆく姿勢をかたく持してオルグをします。それが座のささやかな矜持です。今年十二月九、十、十一、十二の四日間、「府民劇場」には現下の「不況」そのものを劇化してみるつもり。

(京都市左京区下鴨東塚本町四四)

### 若者座

八月二二、二三日、広島での西り演・演劇セミナーには一三名参加しました。特に新人の積極的な参加により多くの貴重な体験を持ち帰ることが出来ました。

十月二四日、第八回公演「若者たち」を天羽新平の演出で、宇部労働会館で行います。去年よりさらに団員が増加し、豊富なスタッフを有して公演出来るのがなにより

の強みです。春の第2回ちびっ子劇場の成功を土台に、今年の本公演も昼夜二回とも超満員の観客動員をめざして宣伝カーとポスターで普及していきます。計三回の合宿を  
(30頁に続く)

### 京都新劇合同公演

## 「賢女氣質」を語る

出席者 市田真一(自協)  
藤竹信雄(勞演)  
村上中正(勞演)  
田畑実(人間座)  
藤沢薫(京芸)

三月二十七日、四月三日京都府立文芸  
会館・宇野重吉演出作・田口竹男

い、わざとその紹介をさけてとおりましたが、歪められ教育の犠牲となつて、答案紙を盗むという犯罪行為から自殺をとげる一生徒のエピソードを、ぼくらの痛みとして受けとめるとき、この作品は説得力をもちます。  
土の会の舞台へのぼくの共感、土の会がその基本的姿勢に立っていたからなのだろうとおもいます。

五月十七日

#### 「付記」

こういう私信の公開は自分でも気のすまぬことでしたが、突然、おふくろの死去という一身上のとりこみで、やむをえず若干手を入れて責めをふさぎました。

6月4日

☆ ☆ ☆

今回の合同公演は、初めての京都府文化財団のプロデュースによる公演で、京都の宇野演出という事で非常に前評判も高かったんだけど、観て貰った感想から。

「賢女氣質」ということだから、もっと才女が出て来るのかと思つたら、意外に自分の生き方をあらわに出す人間的な女が出て来たので驚いた。これは賢女そのものというより、賢女になろうとしている女で家庭の巨影がうしろを照らす

親しみぶかく面白かった。賢くならうとして一生懸命生きてゆく可愛い女で暖か味があり、ユーモラスで春の演目にふさわしい出来あがりだった。

同感。われわれ市民社会の中の家庭にどこにもいる女として描かれたことが、終戦直後に書かれた作品だが、今日のなものとして受けとられたのだろう。つまり妻であり母親である非常に人間的な女として登場させるという演出の意図がうかがえた。

「賢女氣質」ときいて、「京都」「田口」というものをどう描くかという点で興味があった。結果は新喜劇風の面白さはあったが、作品の風俗を歴史の流れの中でどう捉えたかという点で不満が残る。終演後の新聞記者も含めての合評会で、俳優座の「賢女」は風俗リアリズムだつては、(今日)の目、(明日)の目、(後日)の目、

れた、演出者の個性が出ていて面白いという意見と、面白く描くということに終始して風俗の厚味に欠けていたという意見があった。

▼ そう云えば、ゲラゲラ笑って面白かったんだが、あとに何が残ったのかな……生活につながるものとして。

▼ その点で、ごく普通の奥さんが観れば自分の身とひき比べて余裕のあるところで観たのではないかな、劇中の人物をきっちり創ってゆくのではなくて、どこにでもいる奥さんとして演じられたところが成功だったように思う。主役「賢女」ではなくて、まわりの人物の反応で賢女を浮き立たせるつくり方なのではないか。

● 戲画的な描き方を積極的に評価する意見と、アンサンブルはあったが伝わるものが無かったという意見があり興味があるたしかに細かく観ていくと個々の役者の演技の質は違ふ、にもかかわらずそれが正に混然一体となったアンサンブルがあった。

● それぞれ創りようの違う劇団、役者の個性というものを、うまく使った演出という気がする。演技の質という点では役者

の方でも評価にとまどうことがあった。

● 演じている方ではデフォルムという意識は無かったが結果として出て来た。デフォルムというよりモリエールのな性格喜劇をつくるのかなという感があった。

▼ 人物の性格という点ではたしかにも足りない、しかしあの時代のあの状況に置かれた人間「庶民」と単純に設定したことがあの芝居をわかりやすくしたと思う。新喜劇という評もあったが、その辺はともすると的になりかねない綱渡りの演じようが余裕のある受けとめ方をさせた。固苦しい「性格」というより「氣質」というシャレようが面白いのじゃないか。

▼ 十数年前の「検察官」の時に土方与志さんが演出されたことがあるが、今回の宇野演出も、なかなか完全にまとまり切れない合同公演の弱点をカバーする意味でも成果があったのではないか。演じる方ののびのびやっていたようだ。

● 単独の劇団では演技の面でも作品系列の面でも片寄って来る。自分たちの仕事を否定する意味ではないが、他劇団の役者同志の交流、単独の劇団でやれない作品を手がける意味でも合同公演は収穫があ

る。

▼ 宇野演出は演じた者としてどうだった。一口に云って、理屈のない演出だ、役者の個性を生かすという点でも大変勉強になった。うむを云わせず戯曲の世界に引きづりこむ、これに文句なしに役者が食いついてゆくという気持のいい稽古だった。

● 自己否定になるが、誰もが休まない、おくないという稽古場の倫理の面でも、あんな立派な稽古は、今迄の合同公演ではなかったのじゃないか——なまじけな話だが、非常に気持のよい緊張が稽古場にあった。

▼ 理屈のない演出というが、理屈がなかったら困る訳だろうか？

● 演出から求められる声やしぐさを演るだけじゃなく、中味をつめこんで正当化しなきゃならん、それをなまける役者は無惨な姿をさらすことになる。そういう意味でも、役者は自分でつくるんだという当然のことを学んだ。

▼ しかしいくら強制されても納得のいかにあつても懸命に自分を納得させようと努

力するから実にスムーズに行く訳だ。

● もう一つの特徴は、役者の発酵状態をよく見てその先を出してゆく、だからいつもなまけていられない。役者の状態を無視して無機物を放りこむと、文字どおり強制することになってまづい結果を生むが。

● それと先づ最初に役の特徴的なしぐさ、もの云いを示してヒントを与える、そのすき間を役者が埋めていかなければならぬ訳だ。

● 役者の状態を変えてゆく、同じところに止まらせて安心を与えない。稽古の進め方も非常にエネルギーで息つく間を与えない、台本のレジにしても低い声でどんどん進めてゆく、役者は必死でついてゆくということがあった、あれも教育的意味があったのかな。

● 理屈のない演出だったが稽古の三日目、役の設定(第二プラン)について五時間ぶつ通しの質問攻めがあった。

● あくまで台本を土台にして科学的、理論的につかんでいく、勝手に想像するな、役を自分の中へ引き込むな、ネッソウするなど大分やられた。

● それも単に台本に書かれた役の設定の事実だけを冷たい心で追ってゆくと、つじつまの合わないところが当然出て来る。

● それを作者のミスじゃないかと考える高慢さが自分流に想像してしまふ結果を生む。作者はよくよく調べて書いているのだから、合わないところをつないでいくそれが創造の楽しみというものだ、と。それはスタニスラフスキーの云う、冷い心で読むな、ホットな心で読めということなのだろう。

● しかし大分いじ悪なやり方もあった。例えば、「今日はこれまで」と云われて早々に帰り支度をする役者があると、急に質問したりする。あわてて台本を靴から出して調べねばならないと云った具合で技術的なことだけでなく稽古に入る役者の心構えのような点でも教育された。考えて見ると別にとりたてて、新らしいやり方はなかったが、いろんな点で収穫があった。

● 今後、合同公演をどのように進めていけばよいか。京都の新劇団の状態を冷静に見つめて見ると、かなり困難な問題をかかえている。

● 観客の中には、京都の劇団だけでやった

● 昨年の合同公演「どん底」の方が充実していたという声もある。合同公演の場合やはりそれぞれの劇団性というものをどう押えるかということがむづかしい。府民劇場の自身も貧弱だという批判が出されている折でもあり、これからの合同公演のあり方は大きな問題だと思う。

▼ 合同公演の前提となるのは、云うまでもなく各劇団の独自公演であり、単独公演が力不足だという現実を強めていくことが先決だろう。その中で合同公演の位置づけがなされねばならない。

▼ 京都の新劇団の存在価値が合同公演だけにかかるとは非常に困る。たしかに単独の劇団の力量は弱い、その自分たちの条件に逆に自負をもって、それぞれの劇団の特徴を生かしてやっていってほしい。例えば三名でなければ出来ない芝居もあると思う。日本一の府立芸術会館をもっているという有利な条件もあるのだし、引込み思案にならずにやって行ってほしい。今日の京都新劇団の状態は決して悲観的には見えていない、それ等の運動の一つとして

▼ この合同公演の企画も、われわれのつくった民主府政の文化政策の一つであり、劇団もそれを充分有利に活用するつもりで積極に進めていってほしい。

▼ 府の方でも、単に劇団だけを相手にして年中行事を進めてゆく消極的なやり方で

● はなく、府民のための企画としてもっと積極的に進めていって貰いたいと思う。劇団の側も府民の期待に応えられるようがんばってやってゆきたい。

(進行・文責 藤沢)  
▼ 印 観客 ● 印 出演者

● ちは妻の「たえ」にはねかえる若い卯吉の日々。(第三場)昭和十二年〜十九年。戦争は職人の生活を押しつぶし、徴用は職人の世界の息の根を止めてしまう。氣力の失せた卯吉にかわってこのきびしい時代のくらしを支える「たえ」は、(第五・六場)昭和二十年〜二十一年。やがておとづれる平和のいきさ

### 劇 評

## 「人形師卯吉」と人間座

仲 武 司

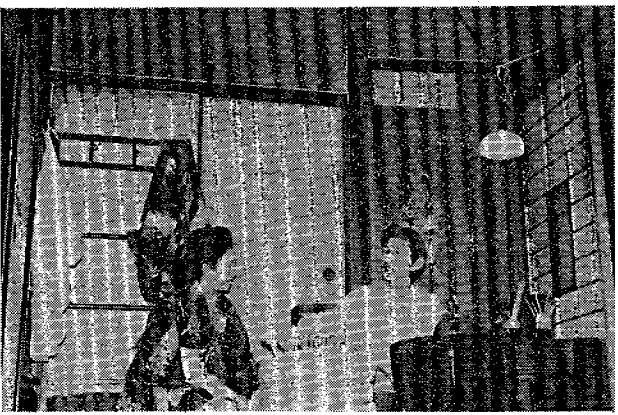
(関西芸術座)

京都「人間座」の「人形師卯吉の余生」——田畑実、作・演出は、昨年11月13日京都府下福知山市厚生会館。11月21日綾部市民センターホール。本年3月3・4・5日京都府立芸術会館。3月20日舞鶴市民会館で、いづれもが京都府の主催する「京都府民劇場」として上演されている。

● ものがたりを紹介すると(第一場)——昭和四十五年。親の代からの京人形職人「卯吉」は七〇歳の今日まで、頭づくりひとすじに生

きてきたが、その精進と沈淪の生活の中で妻を失い、子どももなく、孤独の中でひたすら人形の頭をつくりつづける。彼を支えているものは、巷にはびこるプラスチック製品など魂のない頭のおよびつかない、美への憧憬であった。祇園祭も近づいたある日、元小学校教員の女弟子「みどり」が修行半ばにして卯吉から去っていくことから、卯吉の半生の回顧がはじまる。

(第二場)——昭和六年。卯吉の負けおしみがもとで職人同志の喧嘩、そしてそのとばっ



きの中で再び人形問屋の復活、人形づくりの世界のよみがえるさざしの中で、病をえてある風の夜死んでいった。

(第七場)―昭和二十九年。卯吉の沈淪は深まり、加えて戦後社会の急激な変化は、職人の世界を過去のものに押し流そうとする。

新らたな繁栄は、人々を利を追求すべに走らせ、手仕事に心をこめる職人の支えをうばっていく。人間の大切な、何かが崩れていく時代が来たのであろうか。だが卯吉にとって、人形の美への愛着、その持統と追求に執念を燃す以外、生きる力をもたなかった。(第八場)―昭和三十八年。そんな日々の中で「みどり」が弟子入りを願う卯吉をおとづれる。

新らしい時代への不信からみどりを容易に受け入れなかった卯吉も、やがてはその技を残す人間として、みどりへの期待を深めていくが、(第九場)―昭和四十五年。みどりは卯吉のもとを離れていく。

再び孤独の中で、今は自らの半生をかけた人形の頭をみつめる卯吉の脳裏にはすぎ去った日々の断片がよみがえってくる。

エピローグをふくむ全九場の構成は、京風

劇団の願いとしてうきぼりにしていきたくたのであろうか。

観念的な理念やスローガンによりかかり、製品(作品)のみがきをわすれていることを作者は、もの云わぬ職人の中にある執念をよびこむことによって自戒しようとしているのであろうか。

作者は卯吉の沈淪を自分たちの生活での共感とし、去って行く「みどり」に集団の中の困難さを思い、しかも「魂」をこめた作品へ

### 劇評

## 「ロミオとジュリエット」(演集)を観て

栗木英章 (名古屋芸術劇場)

去る六月一日、愛知文化講堂で行なわれた演集の『ロミオ……』を私たち名芸はそろうて観劇しました。その後、正式な団内討議はまだしていませんが、婦路数人で話し合ったことを討論スタイルでまとめてみました。劇評とはいえないかも知れませんが、急な原稿ということもあって御容赦願います――。

の卯吉の家にしばらく展開しており、祇園はやしの音ではじまりおわる情調と、戦時中の警報などの重苦しく暗い時代、妻のたえが死んでいく風の夜など、京の手職人の生活をうらめていく舞台は、すでに数回の公演を経ているだけに、それなりの安定をもっていたし作者自身が主人公卯吉を演じていることもふくめ、手なれた流れを感じた。

さて観劇後、作者のある趣向の中にはまりながらも、一人の職人の半生を通じ、今一つ内部に、ひっかかってこないもどかしさをおぼえ反芻してみたが、どうにも手ざわりがなかった。

後日、ある人が「あれは人間座そのもの」という、いささか比喩的な意見を耳にした。たしかに孤独の職人、卯吉の姿から、そういう結び付け方はできなくはない、と思いがらも、私の中にはそれに反撥するなにかがあって承伏出来なかった。たしかに卯吉の半生はえがかれていても、苦悩の歴史としては受けとれても、それはあくまで、状態の描写をリリズムをとらないながらえがかれていくだけに卯吉の中にひそむ、魂のないニセモノへの反撥、美への追求、昇華への願いがき

の思考は捨ててはいない。

私は、田畑君と会って、これらのことが発想となり京職人の世界へのインタレストとなつたことを知った。

今、私は知ったとのみいうにとどめておきたい。たしかに私も伝統的なすぐれた工芸品に接した時、人間の、美への追求とその可能性にうたれるのであるが……。

わめて職人の習慣と発想の域をでないことから「人間座」乃至は、私たちにどうかわりあうのか、今一歩つかみえなかった。

現在「人間座」がわずかに三名の同人的な集団であり、それを土台としての創作であるだけに、当然作者・演出者としての田畑君自身すでに承知ずみの舞台化の弱さにはふれないが、私の目にした舞台の限りでは、卯吉の内部に燃えるなにかが不鮮明で、出口のない、しかも新らたな時代の中で逼塞しつつかある姿これが「人間座」への比喩につながるという意向に不安をもった。

私は田畑君と直接話す機会をえるなかで、その当否は別に、この作品の発想のいくつかが理解できた。

作者は「人間座」をふくめ今日われわれが探求しようとする演劇そのものあり方へ、再疑問を試みた、という。

伝統をひきつぎ、一つ一つがみがきあげられた手仕事によって支えられる世界。しかも突り少く、後継者は育たず、一方プラスチックや石膏など、型のみ多産品の氾濫。こうした工芸職人の世界と劇団とにダブルイメージを感じながら、「魂のこもった人形の頭」を追い求める卯吉の苦境と心情、その姿勢を

専門として確立している照明、装置等のスタッフの強みということも、あらためてみせられた気がする。

「本公演初の本崎演出の熱気が、全体のものとなり、若者のひたむきな愛、生き方が、いっぱい入った客席ともども、熱っぽくうたいあげられたって感じがする演集の最近の公演の中では一番よかったんではないか」

「七、八年前の故松原演出(中野好夫訳)のときの『平和共存』から、『若者のエネルギー』みたいなのところへ視点を変えたわけだが、それが結果的によかったのではないか。三神勲訳を選んだことも適切だと思う」

「それはいえる。今朝の新聞に、現代の若者が一番関心を持っていることは愛であり、心であるとアンケート結果を示していたが、その意味からも今日の時点で普遍的なものといえる」

「しかし、その愛が燃えればもえるほどそれを引き裂く力が対極的に出てくる必要があるのではないか。名門モンタギュー家と、キャピュレット家の対立、その上に立つヴェローナの大公の演じられる

方が不十分だったために、悲劇の根元がもう一つ明確でなかった」

B 「幕あきは、客席が指定席と自由席のわからなさからざわついていたせいもあるが、口上にはじまり、両家の対立から喧嘩が起きてくるくだりがよくわからなかったことは確かだ」

D 「フェンシングの迫力なさがそれを助長していたな」

B 「今のことと関連して、二人の、キャピュレット家舞踊会における宿命の出会いもやや不自然だったな。チカチカッと火花が通う瞬間から、ほとぼる愛への盛りあがり弱い気がした」

A 「庭園における告白の名場面に、もう一つ抒情がほしい気がしたね」

D 「その一つの理由はジュリエットにあるんじゃないか。研究生を卒業したばかりの若手としては実によくやっていたけれど、やはり変化に乏しいんだ。行動だけ追っていくと実に大胆なところのあるジュリエットなんだが、その内面が非常に不十分だと思う。その不十分さは、追放されたロミオとの別れの一夜をすごしたあとの単調さに端的にあらわれている」

A 「ロミオはよくやっていた。詩的律動感といった面からすればもちろん注文はあるけれど、後半は自分のものにしてこなしていた」

C 「古典劇の取り組みの中で、相当演技の勉強ができたんだと思う。古典劇上演の一つの大きな意義は日常的なリアリズムを乗りこえて、演技創造を厳しく追求していけるというか、そうせざるを得ない状況に立たされることによって四苦八苦して、飛躍することにあると思うのだが、今回の取り組みで特に若手に相当な収穫があったといえるだろう」

D 「古典劇上演の意義がだが、その演技の突っ込みに加えて、ドラマツルギーの勉強だと思ふ。骨格のしっかりした、そして人間が生きて描かれた戯曲に取り組むことによって、創作劇の大切な養源になるといえるし、今回その可能性が感じられた」

B 「今の生き生きってことは大切だと思う。今度の上演は、歌や踊りが若者の賛歌というところでうまくまとめられた気はするのだが、もう一つ、戯曲中のある人間が

持つ楽天性というか、卑猥ともいえる奔放さが出ていなかった。ということは、マキエーションや乳母、ピーターに全く笑いが生まれなかったことにつながるわけだが、重要な問題だと思う」

A 「『オセロ』のエミリア、『十二夜』のマリア、それに『ロミオ』の乳母などむつかしいが、大変面白い役どころなのだが……さすがのお隆さん（若尾隆子さん）も苦戦していたね」

D 「それと関連するが、全体にきれいにまとめた反面、ダイナミックな若者のほとぼりみたいな面が少し弱かった気がする。少し行儀がよすぎたというか……」

B 「それには、たとえばロミオとマキエーションの友情とか、キャピュレット家におけるティボルトの位置とか、パリス伯の役割なんか、充分演じられていなかったことも作用していると思う」

D 「この戯曲からして演出の打ち出さんとしたことに、若干戯曲から離れた先走りというか前からもっていた思いにはめ込んでしまったというか、そんな気がしないでもないが、それは機会を改めて討議することにして、スタッフはどうだっ

A

「セットは機能的にもよく考えられていたと思う。照明にはやや無駄な遊びも感じたが、一番の難点は効果。遠近もないし、意味が不鮮明なところもあった。これは一定の役割を持っている群衆を弱くもした」

B 「衣裳はみんなつくったらしいが、よく

できていたし、小道具も壊っていた。」

C 「ともあれ今回の公演から多くのことを勉強させてもらった。今後もこういうすぐれた古典を上演されることを望むとともに、パンフレットにも記載されていたが、創立二十五周年には、すぐれた創作劇を生み出されるよう期待したい」

### 劇評

#### 座談会

## 広島「呑んだくれ」

● 語るひと ● 劇団 いこら

井畑 喜美（公務員）

宇田 貞三（中学教師・「呑んだくれ」作者）

栗原 省（高校教師・サークル代表）

林 公子（保母）

林 均（店員）

林 寿子（アルバイト）

藤本 昂二（公務員・「いこら」事務局長）

#### 一、広島印象

林寿 和歌山から広島まで、遠かったア。

井畑 うーん。汽車の中でまだかまだかかって期待がーばいばい！

林寿 駅をおりた途端、広い道と美しい緑の街やろ？感激したわア！

林公 岩井さんに原爆スラム街など案内してもらい、記念館みせてもらって「恐いなあ」と思ったけど、何だか、「恐いなあ」っ

て感じだけで、それだけで終わってしまうような気がして、本当の原爆記念館や本場の原爆の街ってのは、うちのふられなかと別のところにあるって気がしたなあ。

井畑 そやなあ。そう言やあ、何か……なあ……林寿 うん。でもうち、びっくりすることはっかりやった。

栗原 俺もね。強い印象うけたことあるんだがね。タクシーにのってね。丁度ローカル放送が平和公園あたりで取材しているのをナマ放送しているんだナ。女のアナ「今日は何の日か知っていますか？」ってきくんだけなあ。「さあ？」丁度五月三日、憲法の日やろ？「さあ？」中には「建国の日ですか？」なんてね。ピタッと答える奴が本場に少いんだなあ。で、アナウンサーが「憲法記念日ですが、憲法は私達と関係あると思いますか？」「第九条が拡大解釈されているという意見もあるがどう思いますか？」てなこと次々に聞くわけだ。こっちは広島っていう格別のイメージがあるから、さぞ、「そりや、大いに関係がありますよ」とか「四次防計画について、心配しています。」とか、色よい返事が返ってくると思っで耳澄せて聞き入るじゃない？大概。



ところが全くひどいんだね。「関係ありませんね」とか「どうでもいいんじゃないですか?」とか若いから、年配のから、男から女から、次々に憲法なんて知っちゃいねんだなあ、まともなのは二人ぐらいだったかなあ。広島で、しかも平和公園あたりのインタビューだけにショックだったなあ。それが妙に耳にこびりついたまま「狹山事件」の現地調査に走ったがね。芝居の印象よりもその方がねエ……。

## 二、福島町の青年達

井畑 月曜会の人も「原水禁運動はマンネリ化している」って云っていたよねエ。  
林寿 広島の人だったら、余計、原爆のことばかり考えていられない、考えたくないのじやないかしら?  
藤本 俺は芝居より、あの青年部に感動したな。  
井畑 うん。解同青年部ノ!

藤本 岩井さん(演出)は「思い切り解同青年部に依拠して芝居をつくった。」っていったけど、舞台をみて、ああ、若々しい舞台やなあとすぐわかった。あとで月曜のじやなくて……  
林寿 岩井さん云ってたけど、「公演」が眼の前にあったら、やはり選挙より芝居の方へ行くだろうって……そらそや。  
井畑 うん。選挙のピラまきやるとか手つだうってのじやなくて……

井畑 うん。うちがいなかったら選挙体制が崩れてしまう。体がもたない。それでもやらんならん……そんなぎりぎりの戦いの時芝居の稽古出来んわ。  
林寿 うちは、劇団としては、それは間違いやと思う。ちやんと方針だからあかんのよ。  
泉中 同感だけど……「いこら」は公演計画を延期してしもたんやからなあ。選挙終る迄って……うん。(このあと白熱の大討論)

## 四、広島「呑んだくれ」

泉中 月曜会の舞台、どうだった?  
林均 うーん。舞台がねエ。間どりが一寸おかしかったな。  
栗原 いや。パンフで岩井さんがね。部落の苦しみと闘って前進する明るい人間像を描きたいという「いこら」の主張をきちっと

会が、部落へ入りこんで、ずっと一緒に舞台づくりした話きいて、「いこら」が生れた頃を思い出したなあ。  
林均 大衆場面に十人ぐらい出ていたね。  
藤本 自己紹介するときに。あとの座談会でやで。皆、夫々「僕は何をやっています。こんな気持で、呑んだくれ」に参加しました。芝居をやって文化運動の大事さを感じました。//とか「子供会のサイクリングを指導しています。子供会はとても楽しい」とかね。自分のやっていることに確信とよろこびをもって生々していたね。すばらしい青年部だなあ!

林寿 うちらの参加した座談会でね。「僕らみたいなもんでも芝居出来ることがわかったので、今度はサークルつくります。」っていった。羨しかった。「いこら」と比べて、若さがいっぱいノ。  
三、統一地方選挙と芝居づくり

栗原 栗屋へ入ってね。「選挙で忙しかったのに、よく仕上げましたねエノ」ってつい挨拶ぬきだね。  
井畑 うちも、そればかり気になってノ芝居やめて書いてるよね。「福島町の子供たち」ってこの文章。この演出のねらいと出来上がった舞台が……?

藤本 何か……ちがうって感じだなあ。生々していないっていうのか……  
林寿 舞台の一人一人の人間像が、弱い?  
栗原 うん。こういう点どうか。月曜会にとってはこれはやはり「与えられた作品」だよ。土屋さんが部落問題を作品として手がけているのだが、それが出来るまでこれでいいので「呑んだくれ」になっただけだ。現地調査もした。作品分析もした。一つ一つのセリフの意味も検討した。人物についてもイメージをつくり上げた。そこだよ。一つ一つのセリフのいみをしつくり考えながら喋っている。でもね。そうじやないんだ。一つのセリフが次々とセリフを呼び起しリズムをつくる。コトバとコトバがぶつかり合う。わあーっという勢困気が生れるやろ?ところが、月曜会は考えてポツリポツリ喋るんだなあ。特にかねとか石松とか。  
林寿 そうポツリポツリになっていなかったの土屋さんだけやったな。一人でくるくる動きまわっていた。

居やってる間があつたんですか?って。そして、月曜会の人に「やつぱり、両立させるべきやノ」っていわれて、ショックやつたわ。「いくら忙しくても、芝居放ったあかんノ」っていわれて。  
林寿 サークルとしても二日間選挙にかかり切ったって云ってたね。個人個人は別として。  
井畑 でも、よう出来たなあノあの忙しい中でノうちらやつぱり選挙が中心になるなあ無理やなあノ

栗原 「いこら」みたいに、事務局長も演出も、作者も、とにかく、サークルの中心メンバーが、皆選対の責任者だったり、政策づくりの中心だったり夜中の二時、三時まで、連日選挙選挙しやあ、芝居にならないさ。サークルが小さすぎるっていったらいいか、層が浅すぎるっていったらいいか月曜会はその点、層が厚いんじゃないかなア。  
林寿 劇団なんだから、どんな選挙中でも、やつぱり芝居やらあかんわ、そりやあ。林均 でも「いこら」の人が選挙やらなきや選挙にならない。史郎さん(原議に当選した解同活動家)は落ちたかもしれない……

藤本 間がきまらないので……型もね……  
井畑 セリフをよう覚えていたなあノ!  
藤本 作品の弱さが出たって感じだね。ナレターを使わなかったってことも、内容を理解しにくくしていたし……  
泉中 方言のちがいはどうだった?  
井畑 うん。短いセリフは紀州弁で長いセリフは広島弁。(このあたりこまかいダメがたくさんでて、とくに舞台処理の無理が指摘されました)

泉中 観客はわかってくれたかなあノ!  
藤本 例えば火事の場面だけどね。「火事だノ」っておかねがどなるけどどが火事だかわからないんだ。そこへ村人の平太郎がかつけける。ところが火事の現場をいっこもみないで「なんやかや」って云うんだナボヤだったら、何としてもまず現場をみるよ。観客に不親切だと思つたナ。  
林均 ということは、役づくりにウツがあるっていうことか?  
林公 演出の意図とか作品の意図ってのは、そういうこまかいとこ技いたら出てこないのじやないかなア。

栗原 演技では、眼技がないのが気になつたナ。とにかく、広島「呑んだくれ」は作

品のもっている弱さが拡大されて描かれた  
って気がするね。それとね。岩井さんの演  
出に誤算があったんじゃないかな。脚本は  
目茶苦茶に分解してもいいから、広島  
「呑んだくれ」につくりかえる必要があつた  
んじゃないかな。和歌山の「呑んだくれ」  
をよろうとした。そうじゃなくて、広島  
解放運動の歴史から学んで、広島

## 京都府民劇場

### 郡部公演オルグについて

その一例  
芦田 鉄雄  
(人間座)

担金は一公演十万円。

(一)  
まず府民劇場について。京都府は、京都新  
劇人の会(七劇団が加盟)と京都労演の共催  
で行っていた金曜劇場に、一九六六年から共  
催者に加わり、共催分担金を補助して地元新  
劇の普及育成につとめています。(七〇年度  
から、名称も府民劇場と改称し、会場を府立  
文化芸術会館に移して、年十カ月・月三日以  
上の公演を各劇団が分担しています。共催分

人間像を月曜会の自分の目でたしかめて、  
自分たちでつくり直してくれたら、もっと  
もっと素晴らしい舞台になったのと違うかし  
ら？  
藤本 //和歌山の「呑んだくれ」を広島でや  
る//のでなく//広島島の「呑んだくれ」を  
やってほしかった。

な府民に普及し、かつ各地の自主的民主的文  
化活動を促進することを意図したものです。  
(二)  
『穀の谷』は、一九六六年夏に宮津市下世  
屋と中郡弥栄町須川の寺にベースキャンプを  
おいて、周辺の廃村や、現に難村の進行して  
いる山村で取材した創作劇です。(作・田畑  
実)取材の時から、まず現地の人達にみても  
らいたい、そして私達の仕事を検証しなけれ  
ばと思っていました。この年の十一月の金曜  
劇場で初演以来、高校、労演など約二十回の  
上演を重ねることに、その思いは強まる一方  
でした。しかし、当時十年の人間座の活動の  
なかで、京都市以外の地域一般公演の経験は  
皆無で、どの様にして実現させたものかと検  
討していました。京都府へ府下公演に対する  
補助金を要求したのもそのためです。

六七年の金曜劇場で劇団京芸が、『穀の谷  
に』と同じ丹後地方の過疎問題をとりあつか  
った創作劇『雪崩』(下戸明夫作)を上演し  
たこともあって、府下に取材した現地上演と  
いうことで、府の意向が急速に具体化し、府  
民劇場郡部公演制度の実現をみるに至ったわ  
けです。  
(三)

こうして、一定の条件が出来、というより  
府下公演をせざるを得ないところに立たされ  
ました。

初めての公演地を宮津にえらんだのは、取  
材の現地であることと、取材で指導援助をう  
けた教員組合とのつながりが出来、また福知  
山は、オルグを担当する芦田の出生地で、知  
己友人が多く、受け入れの一定の条件があつ  
たからにはかなりません。  
決して系統的なオルグ活動は出来なかつた  
にもかかわらず、現地の方々の努力によって  
両地とも一応の成功をおさめました。(宮津  
では前日に、宮津、水産両高校三千人の団鑑を  
やり、婦人会七百人、一般六百人、計三千三  
百人。宮津地方の十人に一人の割合で観ても  
らつたことになりました。)

特に作品が、農村破壊の進行する僻地山村  
に住む一農婦——戦争で夫を失ない、年老い  
た夫の父母と、父親の顔も知らぬ娘をかかえ  
戦後二十余年を生き抜いてきた一農婦を中心  
にすえたものであるだけに、婦人層への普及  
を一つの課題としていましたが、量的にはこ  
の課題は達成出来ました。

婦人層への普及にとりくむ際に、実行委員  
会に結集する組織労働者や文化活動家の力も

さることながら、婦人会、婦人学級を指導し  
ている教育委員会、とくに社会教育担当者の  
姿勢が大きなポイントになることを知りまし  
た。(単に職権の問題でなく、自治体労働者  
としての意識の側面からも)自治体が共催す  
ることは、単に名義使用や補助金交付の問題  
でなく、地域住民とどのようなつながりをも  
つかであり、それには教委―社会教育担当、  
自治体の労働組合、教員組合の共同行動を組  
織することであります。その結接点として作  
品、劇団の主張、オルグ活動が位置するのだ  
と学びました。

#### (四)

福知山公演の際、大江中学のM先生が同窓  
である私を楽屋にたずねて、「こんな芝居が  
大江でやれたらなあ。でも無理でしょうね」  
と諦め顔に云いました。

大江町は、ここ十年間の人口減四千人が示  
す通り、過疎化が進行している地域です。由  
良川流域から大江山山麓にかけて散在する人  
口七千強の町で公演をなりたいさせることは、  
府の財政補助があつても大変なことです。

福知山公演のあくる年の春、兵庫県下の高  
校オルグに出かける途中、山陰線園部駅で若  
い駅員が窓ガラスを叩いて車中の私に呼びか

けました。帽子をとった彼が、二年前大江高  
校で団鑑公演のとりくみに積極的役割をはた  
してくれた生徒会の役員であることに気がき  
きました。発車のベルをききながら彼は、『僕  
の高校生活の一番の思い出は、『穀の谷に』  
です。福知山で公演されたそうですが、大江  
の町にもあんな芝居をもつて来て下さい。』  
と語りました。私は早速M先生に連絡をとり  
ました。

「地域に根ざした教育を」を求めて、幾多  
のすぐれた仕事を続けてきた大江教育研究会  
は、六八年、六九年の度の研究テーマを「過疎  
の中の大江の教育」としていました。M先生  
はその会の副会長に就任したばかりでした。  
また、五九年頃から小学校の統合問題が起っ  
ていましたが、六八年に第三回学校統合準備  
会が発足し、近々その計画が町長に答申され  
る重要な段階にきていました。

教師が地域住民と結合して、「過疎の中の  
大江の教育」を守るための町民運動を展開す  
る一環として、あらゆる困難を克服して『穀  
の谷に』を上演することを、M先生と私は決  
意しました。

M先生が議長をしている大江民主体連絡  
協議会(教組、高教組、全日自労、町職組、

府職労)に提案、検討会議をひらいたところ  
財政上必要な五百人どころか、二百人集める  
のが関の山だという消極論派を、運動論とし  
ての意義は認めさせても、具体的方策を示し  
て上演活動にふみきらせることは出来ません  
でした。

M先生を中心に、教組、高教組の活動家、  
それに社会教育主事のE氏、劇団の芦田が加  
わって何回も討議を重ねました。

拠点を、中学、高校、婦人会、全日自労、  
町職とし、学習会を中心とした働きかけを統  
け、上演運動に参加する気運を創り出す。中  
学校では秋の文化祭の研究発表の一つに、「  
過疎―大江町の実態調査」をとりあげ、生活  
綴り方と平行して現実認識の学習を強める。  
高校では社会科の教師を中心に、「過疎」の  
理論学習会を組織していく。そのなかで中学  
三年、高校一、二年(団鑑後に入学)の集団  
観劇を学校として企画実現させる。婦人会に  
ついては、劇団の芦田が婦人学級講師の形で  
E氏に同道し、過疎と戦争、農村婦人の幸せ  
について、『霧の谷に』素材として話しこみ  
先ず婦人会長の段階で『霧の谷に』を観る  
意志決定をとりつける。  
乍ら品の主人公こいこい竟國の婦人が多、全日

自労へは、現場の休み時間に劇団側と交流会  
をもち、半日就労で全員観劇出来るよう町長  
交渉へと組織していく。

町職組には、過疎地の自治体労働者の任務  
として、また過疎の荒波をもろにかぶってい  
る一町民として、町行政の姿勢を正していく  
ため、とかく閉鎖的であった活動を打破して  
民団協の中心となるよう呼びかけ、町長交渉  
の下地をつくる。

列記すると、以上の方針を確認し、各自分  
担して工作にかかりました。一定の条件を作  
り得たと判断して、上演実行委員会準備会が  
結成されたのが十月初めで、五月のM先生と  
の話し合い、七月の第一回検討会と約五カ月  
を要したわけです。正式の実行委員会は十月  
末に発足しました。呼びかけに応じて参加結  
集したのは、婦人会、青年団、教組、高教組  
全日自労、町職組、町社会教育課、芦田の同  
窓生有志グループの八団体です。

実行委員会で町長交渉をやり、最初は逃げ  
廻っていた町長から共権をとりつけました。  
公演月の十一月に入ってからは、部落ごと  
の学習会を組織することに、重点をおきまし  
た。六つの部落がありますが、それぞれの公  
民館やトピア交り敷進まき婦人及びトピア、

時には地域の青年、区長、公民館長にも参加  
してもらい、実行委からはE氏、M先生、劇  
団からは私が常時出席しました。

公演当日、中高校生三百二十名、一般四百  
八十名、約八百名の町民で会場の大江高校体  
育館は一杯。消極的だった町長が補助金をも  
つて会場にあらわれ、開幕前に一言あいさつ  
をといつて過疎対策について話し始め、予定  
の時間がすぎてもなかなか終わらないので、は  
らはらする一幕の余興がありました。

幕が上がったらオルグの仕事は終るわけであ  
りません。その後のことにもふれたいのです  
が紙面の都合で省略します。

(五)

私は、オルグ活動の形態や手続的側面の報  
告に終始して、そこで何が語られ、何が起り  
私がどうしたかについてはふれませんでした  
ふれることが出来なかつたといった方がより  
正確かも知れません。そこにこそ、オルグ活  
動の本質、根っこがあるのでしようが……。  
オルグは、観客に作品を起点として設問す  
ることから始り、一定の緊張関係を保ちなが  
ら、3まへ、誌、

■ 戯 曲 ■

鉛

筆

関西芸術座

柴 崎 卓 三

(一)

男行員一、二 女行員一、二、三

男行員一 ここは東洋銀行第一支店です。

男行員二 都市銀行の中でも一、二を争って  
います。

女行員一 今度、地方銀行の紀南銀行を吸収  
合併しました。

女行員二 銀行法により、むやみな店舗の拡  
張、新設はできないのです。だから小さな  
地方銀行を吸収するのです。

女行員三 まだ辛うじて息づいている独占禁  
止法、これをなしくずしにするには、現在  
のところ、これしか方法はありません。

男行員一 市場は独占しなければならぬ、  
大きいものはより大きくならなければなら  
ない、  
男行員二 と、いうことですが、一つ厄介な

問題が起りました。

女行員一 組合なのです。紀南銀行の組合は  
所謂戦斗的と称せられる組合で、今度の合  
併にも最後まで反対したそうです。

女行員二 それに比べて、東洋銀行の組合は  
中立、穏健をモットーとしています。

女行員三 だから仕方なしに妥協が行なわれ  
ました。合併後、どちらの組合を選ぼうが  
それは個人の自由だ。つまり、二つの組織  
系統が、異なる組合が併列することが、合  
併の条件となつたのです。

男行員一 そこで、この第一支店にも、元紀  
南銀行員が一人配属されてきました。高木  
善子、十九才。高校を出てまだ半年の女の  
子です。

高木善子、手を膝の上のせて、坐って  
いる。  
男女行員一せいに仕事を始める。

計算機のキーをたたく者、伝票をあわ  
せる者、札束を勘定する者、等々。

男女行員 (それぞれに)

//有難うございました//  
//いらつしやいませ//  
//おいくらでございました//  
//お待たせしました//  
//木村さん。木村さん//  
//よろしく、どうぞ//  
善子 皆んな働いてはる。うち一人だけやな  
何もしてへんの。  
(歌う)

//仕事がしたいな。  
お札を勘定したい。  
計算機をうちたい。  
伝票あわせたい。  
じっとしてゐるってつらいな。  
手が勝手にむずむず動き出す。

何かすることあれへんかな。  
本読もうか。

編物しようか。

何か食べよか。

ほんまにほんまに。

何かすることあれへんかな。

男行員一 ほざれとるで、あの子。何もしとれへん。

男行員二 バリバリの女闘士と違うか。労働者は闘わなければならぬ。

女行員一 恋人が居るのよ。あっちの組合の方に。

女行員二 何日もつやろ、あのまままで。

女行員三 二日。長うて三日。

善子 そや。鉛筆けずろう。鉛筆って六角形やな。この木の部分と黒鉛の芯、この線を真直ぐにしたろう。どっからみても左右対称、きちっとなるまでやったる。あつ、強よすぎた。もつとやおおうにせなあかんのやな。今度は強よう。そや。彫刻や。うちは彫刻を作ってるんや。

男行員一 おい。鉛筆けずり出しよったぞ。

男行員二 それで我慢しとんのや、ならぬ勘忍、するが勘忍。一つけずるも組合のため二つけずるも組合の為。労働者よ。たち上

ちくどかれるぞ。こっちの組合へ来ませんかて。

女行員一 何んでやろな。あの子みてるこ

っちの方が見下されてるようや。

女行員二 トイレ、言われて想い出したわ。いこう。

女行員三 うん。(二人退場)

善子 お茶もいれられへんのか。こらあ、えらいことになってきたぞ。他の人も皆こやろうか。合併前の最後の組合大会で、紀南の組合員は紀南の組合を守り通すってことを、全員一致で決めたから、他の人もきつとうちと同じように……。それともうち一人だけがこんなに……。そうとしたらあの時の言いが悪かったんやぞ。そんならえらい失敗や。舌足らずの言葉足らず。

人事課長に聞かれたんです。

貴方はどちらの組合に入りますか

紀南の組合です

どうしてです

好きやからです

そしたら、人事課長は

ああ、そうですか

それだけで、うちは唯一人、ここへ、ポー

れ。

女行員一 いらいらするな。仕事もせんとけ

つたいなことはじめる子が居ると。

女行員二 眼光つたるがな。仕事もあれ位集中できたらな。

女行員三 できるわけないやないの。ボンと

通帳出されたら、スィッと後ろへ廻すだけ女行員一 それ受けとつたら、ガチャンと計算機。

女行員二 トン、ツー、トン、ツー、コンピ

ューター。

女行員三 はい。できあがり。あつ、早よう三時にならんかな。

三時を告げるチャイムが鳴る。

男女行員 (声を揃えて)

やつと、三時や。シャッターが降りる。早いこと、早いこと、降りてまえ。

シュルルン、ギルルン、ガラルン、ジャンパラルン、ビルルン、ブルルン、ドーン。

(一瞬停止の後、ばらばらとくずれる。疲れきった態度を様々に。首を振る、肩をたたく、等々)

善子 皆んな疲れてはるわ。そや、お茶いれ

んと、とばされてしもうたんです。

女行員二、三、走って登場。

女行員二 親衛隊や。親衛隊がやってきた。

女行員三 支店長も一緒よ。

支店長と親衛隊三人登場。

親衛隊一 俺達三人は親衛隊。組合つぶしの

親衛隊。

親衛隊二 民主主義とは厄介なもの。娘っ子一人でも、そう簡単にはクビにはできん。

親衛隊三 そこで俺達親衛隊。智恵をつくし

て色々。ほんまに難儀な世の中や。

支店長 それでは君達親衛隊。わては腕前拝見や。

親衛隊三人、善子をとりかこむ。

親衛隊一 どうです。決心がつかしましたかな

親衛隊二 サインして頂けませんかな。ここ

へ一行サインをすればいいのです。ほら、

今度考えることあり、紀南銀行の組合を脱退します。その下に貴方の名前、高木

たげよう。

(歌う)

お茶をいれるて楽しいな。

お客が帰って、皆んなの顔がポヤーン。けど、まだ、帳尻合わせならん。

仏頂面、とんがり口、八字まいげ。一人一人に、さあ、どうぞ。

頬つべた、ゆるむか、ゆるまんか

善子退場しようとする支店長が立っている。

支店長 どこへ行くのです、高木さん。

善子 私、皆さんにお茶を。支店長。

支店長 いけません。午前一回、午後一回の五分間のおトイレ。それ以外そこを離れてはいけません。もし離れた場合は職場放棄とみなします。いいですね。

支店長退場。

男行員一 どんな積りや、お茶いれようや

男行員二 丸めこもうとしとるのや。指導者は大衆に奉仕しなければならぬ。そのう

善子、それだけで全てがすむのです。(組合脱退書をつきつける)

親衛隊三 何に忠義立てをしとるのですかね貴方達の組合、もう百人も居ないんですよ。五百人が百人に減ってるんだ。つまり四百の人が僕達の組合を支持してることになる。民主主義ってのは多数決の原理ですよ。沢山の人間が支持してる。それが一番正しいことですよ。

親衛隊一 私はね、悲しいんですよ。貴方一人がそうやって黙って坐っている。これは我々の中に分裂があるってことですよ。労働者は団結をしなければならぬ。分裂してちや駄目なんだ。どうです。私達と一緒にやりませんか。

親衛隊二 一つの組織に一つの組合。これが正しいあり方でしょう。残念ながら、紀南の組合と東洋の組合とは、その上部組織から何から正反対。片方が右向きや、片方が左。これでは組織は動きませんよ。だがね、唯一つはつきりと言えること。もう紀南銀行は無くなったんだ。東洋銀行だけが存在するんです。

親衛隊三 もっと、こう、愉快な話ができようになりましょうや。十九才なんです

よう。ルーシュの一つでもつけてみたらどうです。楽しいってことは、そんなところからはじまるもんですよ。

親衛隊一 黙否権ですか。何かありや黙否権

一番卑怯な方法ですよ、お嬢さん。

親衛隊二 サインするのですか、しないのですか、どうなんです。

親衛隊三 何か誤解があるんじゃないんですかね、私達が君を脅迫してるとか、なんか。そりや、とんでもない誤解ですよ。私達は唯自分達の組合の方が正しいと思うから、貴方にこういうことを言ってるのですかつての紀南銀行と我々東洋銀行の給料を比べてごらんさい。厚生施設だって段違いでしよう。これは、私達の組合の方針が正しいからですよ。

親衛隊一 返事なしですか。民主主義には討論が必要なんですがね。

親衛隊二 困りましたね。こう頑固じや。民主主義も時によりけりだ。

親衛隊三 何んとか言ったらどうなんです。あーとか、すーとか、言えるようにしまし

ようか。

親衛隊一 仕様がないな。黙否権ってのは、一種の暴力だからね。私達もそれなりの方

法を使わしてもらいますよ。

親衛隊三人、いきなり善子が坐ったままの椅子を持ち上げる。思わず椅子にしがみついた善子。その善子の態度に、親衛隊三人笑いながら善子をゆさぶる。善子悲鳴と共に下へ落ちる。四つんばいの姿。支店長、親衛隊は肩をすぼめ、それぞれに眼くばせして、さっと引きあげる。男

女行員立ち上る。

男女行員 (声を揃えて)

成程。さすがは親衛隊や。手をくださずに手を使う。落花狼藉すってんどう。これでこの子も終りやな。後に残るは愁嘆場。泣いて、わめいて、ひっかくか。かっか頭へ血がのぼり、とぼちりでもくうたら、えらい損。君子危うきに近寄らず、さっさとわしらは退散や。

男女行員退場。善子立ち上る。

善子 えらい眼におうたなあ。

(歌う)

//返事しよう思うても。

返事してる暇あれへん。

ボンと言われて、成程なあ。

ツーと言われて、そら、そりや。

カーと言われて、こら待てよ。

ボン、ツー、カー。

返事しよう思うても。

返事してる暇あれへん。

それであの人等はじれてしもうた

けど、五百人が百人に減ってしもうたて。ほんまやるか。こら、えらいこっちゃんぞ。

(二)

男女行員五名、親衛隊三名、支店長。

全員 その夜、善子は夢をみた。

善子寝ている。

全員は女行員三を残して二列となる。

//通りやんせ//の遊戯。

八名 //通りやんせ。通りやんせ//

女行員三 //ここはこの細道じや//

八名 //天神様の細道じや。ご用のない方通しやせぬ//

女行員三 //この子の三つのお祝いに、

お札をおさめにまいます

どうか通してくだしやんせ//

八名 //往きはよいよい、帰りはこわい。こわいながらも通りやんせ、通りやんせ//

女行員三、子供をかかえて列の中を通る通り抜けて天神様に手を合わせる。また列の中を通過して帰る。それを列の八名がわつと取り押え、子供をもぎとる。

八名 //往きはよいよい。帰りはこわい//

こわいそのわけ、分ったか。

女行員三 お許し下され。後生でござりまする。どうか、その子をお返し下さいませ。

八名 何んと奇体な。このままこの子を帰えせというのか。

女行員三 これは、とんだ御無礼を、些少ではござりますが、どうぞ、お納め下さいませ。(金をさし出す)

八名 (受けとり) 仲々ずんと手ごたえが。それに見事な小袖ぶり。さぞや高価なものとみえるわい。

女行員三 ああ。これでござりまするか。よろしければどうぞ。(着物をさし出す)

八名 (受けとり) これは手早い。仲々の物

持ちとみえるわい。

女行員三 多少の田畑、家、屋敷、それ相應の財産は。

八名 あるというのか。

女行員三 ござりまする。

八名 なら、それもそっくり頂こうぞ。

女行員三 これは御無体。そればかりは、

私一存の所存では。

八名 できぬと申すか。

女行員三 できませぬ。

八名 ならば聞く。この子はおぬしにとつては何なのじや。

女行員三 生命でござりまする。

八名 生命と財産。どちらが大事じや。

女行員三 お許し下さりませ。田地、田畑、

家、屋敷、良人のものもござりまする。

八名 なんとどうつな。夫婦は一体であらう

が。

女行員三 されば、夫婦一体とは男と女の愛

について申すこと。田地、田畑、家、屋敷

その限りではござりませぬ。

八名 えーい。つべこべと。この子供おぬしにとつて生命なら、良人にとつても生命であらうが。

女行員三 言わずもがなでござりまする。

八名 ならば聞く。生命と財産、どちらが大

事じや。

女行員三 お待ち下さりませ。今しばらくの御猶余を。とつてかえして良人と二人、と

くと腹を決めてまいります。

八名 ならぬ、ならぬ。今すぐの返答が欲しいのじや。できぬと言うなら、この子供、

……………(さし上げる)

女行員三 お待ち下され。しばらくのお待ちを。

八名 なら、待とう。じやが、五つ数えるまでの猶余じやぞ。一つ、……………。

女行員三 えーい。口惜しや。何んとすればいいものか。この身一つですむことなら、

何んとでもしようものを。

八名 何んと。この身一つですむことなら、

しかと。左様か。

女行員三 私一人ですむことなら、生命なぞ

いといはいたしませぬ。

八名 しかとじやな。

女行員三 はい。

八名 なら、頂こう。おぬしの生命。

女行員三 その代り。

八名 言うに及ばん。この子供、必ず良人の

手にかえず。金もいらぬ。着物もいらぬ。  
田地、田畑、家、屋敷、おぬしの心にめん  
じて何もいらぬ。

女行員三 その証拠は。

八名 中の支店長 わしが今から一走り。

この子を良人の手にとどけてやる。

女行員三 では、これこれのところへしかと

支店長 心得えた。

支店長、子供をかかえて退場。

女行員三 坊や。貴方。御無事で何より。

(胸つきさして倒れる)

全員 げに、貞女のがみよな。

善子 起き上る。

善子 けつたいな夢をみたものや。あれが貞  
女か。貞女ってつらいもんやな。とてもう  
うちにはなれそうもない。なれそうにない  
けど……。

(三)

男女行員五名。

男行員一 こらあ、あかん。彼女一人のため  
に、銀行をしめるわけにはいかんわ。

親衛隊一 瞬呆気にとられたが、善子の背  
後に廻って、何か考えこんでいる。

男行員二 待て、待て。何か作戦ねつとるで  
まだ勝負はつかんで。これからや。

女行員二 ねっ。恰好いいじゃない。ああや  
って鉛筆けずってるのみでたら。

女行員一 誰かが後ろで智恵つけてるのよ。  
彼女はそれのあやつり人形よ。

善子、皆に挨拶して退場。親衛隊は善子  
の机と椅子を外へ運び出す。

男行員一 腹きめよつたな、親衛隊。いよいよ  
よ本格的な追い出し作戦や。

男行員二 これで最後やな。ほんまの終りや

女行員二 そんな。これで終りやなんて。

女行員三 次の朝がやってきました。いつも  
の朝のように、彼女はにこにこしてはいっ  
てきます。

善子、登場。

男行員一 翌日、彼女は出勤してきた。

男行員二 こらあ、相当な筋金入りやで。ひ  
よつとしたら、彼女……。

女行員一 仕事さしてくれへんいうのに、何  
んででて来るのやろ。あーあ。早ようお勤  
めやめたいな。他人の金ばかり勘定しと  
っても仕方ないわ。ええ人、現われへんか  
しら。

女行員二 阿呆とちやう。うちらみたいな若  
い娘やったら、何んほでも勤め口はあるの  
に。わざわざひどいめに会わされに來んで  
もええのに。

椅子に坐っている善子を、親衛隊三人が  
とりかこむ。善子、さっと立ち上って、  
椅子から離れ、にこにこする。親衛隊ど  
うしようもなく、机をどんとたたいて退  
散。善子、あれっといった顔付きで、帰  
り仕度をして退場。

男行員一 同じ手使うとは、親衛隊もおちぶ  
れたな。

男行員二 けど、明日がみものやで。このま  
まではどつちもひきさがらんぞ。

善子、自分の机のところへ行く。机がな  
いのできよろきよろする。親衛隊、それ  
を見てにやりとする。女行員二は、わっ  
と泣き出す。善子、げげんな顔付きにな  
る。だが、一寸考えて、ロビーのソファ  
1のところへ坐る。鉛筆をとり出して、  
けずりはじめる。

親衛隊 畜生ノこのあまノ

女行員二 やったわ。あの子はやったわ(と  
び上る)

男行員二 銀行って不便なもんやな。もうあ  
そこからは追い出されへん。

(四)

親衛隊、コンピューターで解答を出そう  
としている。

親衛隊 (歌う)

//さあ、分らんぞ、困ったな。

おちると思うたあ女。

どうしても、

おちよらん。

親衛隊、裏門に頑張っている。

男行員一 中へいれんとこいうわけやな。水

際撃退作戦か。

男行員二 銀行員が表門を使用することは、  
さしひかえられています。火急の場合を除  
いては。

九時を告げるチャイムが鳴る。

女行員三 けえへんかったね、彼女。おっぱ  
らわれたんやで。

女行員二 作戦成功か。けど、何んや淋しい  
ことあれへん。けえへんとなつたら。

全員 シャッターがあがる。やれやれ今日も  
また仕事か。

シュルルン、ギルルン、ガラルン、スー。  
パラルン、ビルルン、ブルルン、ガチャン

善子、表門よりとびこんでくる。

善子 すみません。遅れまして。寝坊したも  
んですから。

善子、さっと机に坐る。

さあ、分らんぞ、困ったな。

困った時の神頼み、

今じやこいつが(コンピューター)

パッチリコンと神がわり。

さあ、出してくれ、出してくれ。

絶対正しい解答を。

お前一人が頼りじやい。

パラルンコンと出してくれ

支店長、登場。

支店長 どないなつとるのや。たかが女の子  
一人のふり廻わされて。うつ手、うつ手は  
皆失敗や。ほんまのすかたんやぞ。

親衛隊一 お待ち下さい、支店長。彼女以外  
の百人については、これは皆、組合に残っ  
ておる理由がはっきりしております。組合  
の役人、主義思想の持主。恋人。それぞれ  
理由があります。理由があれば対策がでて  
くるものでございます。だが、彼女の場合  
どう調べてみましても、それがはっきりい  
たしませんが。どうして彼女があれだけの抵  
抗ができるのか。手がかりは唯一つ……  
……。彼女が人事課長に言った言葉です。

// どうして紀南の組合を選ぶのですか //

// 好きやからです //

支店長 それなら、はっきりしとるやないか  
親衛隊一 ところが、これ程あいまいな言葉  
はございません。// 好きやからです // 何が  
どう好きなのか。どうして好きになれるの  
か。どの程度、どれ位好きなのか。何んで  
好きになったのか。

支店長 そう言われたらそやな。これ程わけ  
の分らん言葉はないな。

親衛隊一 でございますし。我々の仕事は  
一般的抽象的なものの中から、限定された  
具体的なものを選び出してこなければなり  
ません。// 好きやからです // この言葉を足  
がかりにしまして……………。

親衛隊二 おー。分類表ができたぞ。

親衛隊三 支店長。コンピュータが分類表  
を作ってくれました。

支店長 よし。読んでみい。

親衛隊二 一つ。正規方程式。紀南の組合の  
主義主張を愛し、心から共鳴している。

親衛隊三 二つ。逆方程式。紀南の組合の主  
義主張には反対である。しかし、虎穴に入  
らずんば虎児を得ずのたとえにて、紀南の  
組合に入って、紀南の組合をひっくりかえ

さんがためである。

親衛隊二 三つ。隣人愛の方程式。汝の隣人  
を愛せよ。汝の敵も愛せよ。この場合、紀  
南、東洋、それぞれの組合の主義主張には  
関係はない。たまたま紀南の組合に籍をお  
いただけのことである。

親衛隊三 四つ。革命の方程式。紀南の組合  
の主義主張を更に推し進め、この世に革命  
をもたらさんかためである。以上です。

親衛隊一 どれやと思われます。

支店長 分らん。どれもあてはまるように思  
えるし、どれもはずれとるようにも思える

親衛隊三 どうします。

親衛隊一 えーい。その四つの方程式。全部  
いれて、四で割ってみい。

親衛隊三 じゃあ、いれます。

コンピュータ作動する。

親衛隊二 四で割る。

コンピュータ作動する。

親衛隊二 出ました、答えが。

支店長 おー。さすがはコンピュータや。

あつという間や。(解答紙を読む)

ア、イ、ジ、ヨ、ウ、デ、ス。何んや、こ  
れは。ラブのことか。

親衛隊一 でしょうな。愛情。分らんな。  
支店長 けど、コンピュータの答えや。間  
違いはないぞ。

親衛隊一 そうです。絶対に間違いはありま  
せん。そうや。分りました。支店長。

支店長 分ったか。

親衛隊一 誰かがものにせえいうことですわ  
彼女を。抱いてしもうたらそれまでや。

支店長 成程。それや。さすがはコンピュ  
ーターや。ええこと言よる。

親衛隊二 俺の趣味やないな。抱かやて。  
親衛隊一 阿呆。答えは愛情やぞ。先ずはれ  
るのや。抱くのはその結果や。(親衛隊三  
に)お前。お前やれ。

親衛隊三 この俺が……………。あの子に……………。

親衛隊一 命令や。

支店長 よっしゃ。これで決まったな。

(五)

善子と親衛隊三。

親衛隊三 私は貴方に許しをこわなければな  
りません。ひどいことをしてきました。役  
目柄とは言いながら、いや、そのような言  
葉を使うべきではありません。それでは私  
個人の問題はすつとんでしまいます。私は  
決意をしたのです。親衛隊をやめるべきか  
どうか、この決意をくみとって頂き、これ  
までの私をお許し頂きたいのです。

善子 許すだなんて……………。貴方は何も私に  
謝ることなんかは……………。

親衛隊三 ないとと言われるのですね。何んて  
人だ、貴方は。私を責めない。いくら責め  
られても仕方のない私を、貴方は許そうと  
している。そうだ。これまでの貴方がそう  
だった。私達が何をしても、貴方は顔色一  
つ変えようともしなかった。まさに貴方は。

(歌う)

// 風のように貴方は闘い。  
風のように貴方は生きる。

誰の胸にも勇気を。

誰の胸にも生きる力を。

風のように貴方は闘い。  
風のように貴方は生きる。

誰の胸にも勇気を。

誰の胸にも生きる力を。

風のように貴方は闘い。  
風のように貴方は生きる。

誰の胸にも勇気を。

誰の胸にも生きる力を。

風のように貴方は闘い。  
風のように貴方は生きる。

誰の胸にも勇気を。

誰の胸にも生きる力を。

風のように貴方は闘い。  
風のように貴方は生きる。

誰の胸にも勇気を。

誰の胸にも生きる力を。

風のように貴方は闘い。  
風のように貴方は生きる。

誰の胸にも勇気を。

こそはつきりと分ります。貴方に鉛筆をけ  
ずることをやめさせようとした自らの愚か  
しさが。それに比べて貴方は……………。私は  
貴方の中に真の女性像を見出すのです。

善子 いいえ。うちは貞女にはなれない女な  
んです。

親衛隊三 いや。貴方の中には神の如き寛大  
さと、剣のような洞察力が存在しています  
何もかも見透し、何もかも許しているの  
です。だからこそ、私は貴方の前に膝まずき  
許しをこうことが出来るのです。(膝まず  
く)

善子 立って下さい。人は人に対して膝まず  
くものではありませんわ。

親衛隊三 その一言が私に勇気を与えてくれ  
る。(立ち上り) はじめて私は信ずるに足  
るものをみつめました。この何を信じてい  
いのか分らない世の中に、私は貴方を信ず  
ることが出来ます。これ程の幸せがありま  
しょうか。

(歌う)

// 愛とは信ずること。  
たった一つの何かを信ずること。  
より分け、選び出し。  
たった一つを掴むこと。

善子 ……………。

親衛隊三 いいのですね。許して頂けるので  
すね。何んという幸せ者だ、私は。ああ。  
私は貴方に誓わなければならぬ。必ず私  
は貴方を幸せにします。素晴らしいマイホ  
ームを作ってみせます。(善子の手をとる)

善子 もういけないわ。ここまでや。  
聞いて下さい。それだけは駄目なのです。  
(歌う)

善子 ……………。

親衛隊三 いいのですね。許して頂けるので  
すね。何んという幸せ者だ、私は。ああ。  
私は貴方に誓わなければならぬ。必ず私  
は貴方を幸せにします。素晴らしいマイホ  
ームを作ってみせます。(善子の手をとる)

善子 もういけないわ。ここまでや。  
聞いて下さい。それだけは駄目なのです。  
(歌う)

善子 ……………。

親衛隊三 いいのですね。許して頂けるので  
すね。何んという幸せ者だ、私は。ああ。  
私は貴方に誓わなければならぬ。必ず私  
は貴方を幸せにします。素晴らしいマイホ  
ームを作ってみせます。(善子の手をとる)

善子 もういけないわ。ここまでや。  
聞いて下さい。それだけは駄目なのです。  
(歌う)

善子 ……………。

親衛隊三 いいのですね。許して頂けるので  
すね。何んという幸せ者だ、私は。ああ。  
私は貴方に誓わなければならぬ。必ず私  
は貴方を幸せにします。素晴らしいマイホ  
ームを作ってみせます。(善子の手をとる)

善子 もういけないわ。ここまでや。  
聞いて下さい。それだけは駄目なのです。  
(歌う)

善子 ……………。

「うちは駄目なの、それだけは。一人の男と一人の女。小さなお家で愛の語りは。」

「うちはいやなの、それだけは。一人か二人の子供をこしらえて。賢い強い子供に育てるのは。」

「うちは旦那さんが一人だけやなんて、そんなのはいやなんです。十人でも二十人でもあり余る程の旦那さんが欲しいの。子供だってじやんじやんいるの。賢い強い子は放つたらかし。弱くて、馬鹿な子だけを可愛がるの。」

旦那さんだってそうよ。若くて、力があり余っている旦那さんは余りかまわないの。だって、そんな人ならうちやいといても向うの方からうちをこまわってくるわ。だげど歳をとって、足腰も立たなくなった旦那さんはかまわいけるの。ひびわれて、しわだらけになった手を、うちのこの胸の谷間で暖めてあげるの。」

喧嘩してる子はとめにかかないの。泣いている子も泣かしたく。ぎやんぎやんわんわん、ふんだんにやらせるの。だげど、喧嘩もできない、泣き声もようあげない、弱

いやなんて。

「けど、こり、次々と教えていってたら、何んにもないやないか。あの子がああやって坐ってる、その理由は何んにもないぞ。だが、何んにもないようで、何んでもあつような気がするな、あの子には。」

親衛隊一 「しかし、支店長。理由なしには結果は生れてきません。これは法則です。わが偉大なるコンピュータは、必ずその理由を……………」

支店長 「そうあつて欲しいものや。女の子一人クビにはできない。転動させるようにも持っていくとこない。あつちやこつちやから不当労働行為の裁判がはじまると。ほんまに仕様のない世の中や。まだか。コンピュータは……」

親衛隊一 「いま、しばらく。しばらくお待ちを。」

親衛隊二、三、走って登場。

親衛隊二 「出ました。コンピュータは答えました。」

支店長 「おう。出たか。(解答紙を読む)」

「彼女が組合を脱退しない理由は、理由が

「子供だけはこの腕の中に抱きしめてやるの朝になって働きに出かける旦那さん一人一人に、うちは暖かい接吻をしてあげるわ。行ってらっしゃい。行ってらっしゃい。次から次と抱かれるの。そして働きにいけない病いの床の旦那さんには一日傍で寝たげろの。」

「だからうちはそれだけは駄目なのよ。一人の旦那さんと一人のうち。小さなお家の中で愛を語るの。だから、どうしてもそれだけはいやなのよ。一人か二人の子供をこしらえて、その子だけを強い賢い子供に育てるのは。」

この間に、親衛隊三はびっくりし、あきれかえり、つまり失敗して退場する。

善子 「行ってしまったのね。うちがうちの夢を語った時、一人の男が行ってしまおうたわ」

(六)

男女行員、仕事をしている。

善子はロボットのソファで鉛筆けすり。支店長一人でいらいらと歩き廻っている

親衛隊一、登場。

支店長 「おう、出たか。コンピュータの答えは。」

親衛隊一 「まだでございます。何せ大変な問題でございますので、さすがの彼も悪戦苦闘の最中で。」

支店長 「そらあ、そや。これだけ難しい問題は一寸ない。コンピュータも往生しとるやろ。」

親衛隊一 「だが、彼は頑張つとります。御安心下さい。コンピュータの名に恥じぬ見事な解答を、我々に提供してくれるものと信じて居ります。」

支店長 「けど、ああやって、にこにこ笑うて鉛筆けすつとる姿見とつたら、どないなつとるのやと思うな。」

親衛隊一 「馬鹿か、天才か、紙一重という感じが……………」

支店長 「馬鹿に決まると。いや、普通の馬鹿ではないな。何んや、訳の分らん、ふわふわしたすき通つたみたいなものや。主義もなければ、思想もない。人間関係もないし、恋愛もない。ありや、愛情なんでもんとは違うぞ。何十人もの旦那さんが欲しい」

ほんまに阿呆やな。理由がないのが、理由やて。子供でも答えへんわ。

コンピュータって。

ほんまに阿呆やな。

どんがらばつかり大きうて。

何もないのが理由やて。」

男行員一 「だが、コンピュータはほんまに阿呆やるか。僕にはそや思えない。」

男女行員 (揃って)

労働者が闘うのに何んの理由があるの。闘わないための理由はもっともらしく色々あったにしても、労働者が闘うのに、何んの理由があるの。だ。

善子の鉛筆けりにスポットしほられ。

(七)

男女行員と善子。

男女行員 (歌う)

「コンピュータって。」





『演劇会議』既刊号の主な内容

- 第八号(一九六八年六月) 品切  
 東リ演劇作会議特集  
 劇団「いこら」の活動 栗原 省  
 劇評「那上の立百姓」(新劇場)「つちあげ」(京芸)「おふくろの歌」(京浜)「ワッサ・ジェレズノワ」(民芸)「おりん口伝」(弘前)
- 第九号(一九六八年九月)  
 京浜協同劇団と京浜労演の座談会  
 劇評「初恋」(土の会)「島」(演集)「イルクティック物語」(木々の会)「スコップドリーの伝記」(四紀会)「雪崩」の創造体験 藤沢 薫  
 戯曲 九〇〇一列車接近 島 源三  
 第十号(一九六八年十二月)  
 東西リ演劇会・ゼミナール特集  
 「はぐるま」と交流して 土の会  
 「雪崩」創作の動機 下戸明夫  
 戯曲 テントからの報告 岡崎 繁  
 第十一号(一九六〇年四月) 品切  
 複雑な文化状況 しばやし・ひろし  
 劇評「日本の教育」(未来)「メコンデルタ」(南大坂)「新喜劇」(息吹)「つくられた英雄」(はぐるま)「コンペア野郎に夜はない」(京浜)  
 南大阪演研の報告 赤松比洋子  
 第十二号(一九六九年七月)

- 働くものの演劇をめぐるって 関きよし  
 東リ演劇学校における討論  
 劇評「おれは雷」(埼玉)「分裂気質」(青年劇場)「のんだくれ」(いこら)「第19回広島演劇祭」(広島演サ)「花咲くチエリイ」(関芸)  
 戯曲 星をみつめて 土屋 清  
 第十三号(一九六九年十一月)  
 リアリズム演劇についての試論 田畑 実  
 劇評「怒りのウインチ」(大阪自演)「20周年記念公演」(京芸)「ペトナムをみている」(名劇協)「硝煙なき戦場」(労芸)  
 劇団桑の実の報告 横田孝志  
 別冊1号(一九七〇年二月) 品切  
 戯曲特集(70演劇行動参加作品)  
 「署名」(栗木英章)「夜」(黒沢参吉)「片隅から」(小島真木)「小さな駅のある物語」(島源三)「オキナワ」(しばやし・ひろし)「事前協議」(和田澄子)「モーレス教育」(芸労)「通話停止執行」(長谷川伸二)「ひろしま一九六九」(土屋清ほか)  
 第十四号(一九七〇年五月)  
 座談会 70年と私たちの活動(西リ演) 藤沢 薫  
 西リ演作家・演出家会議 黒沢参吉  
 長野県五劇団交流会 猿渡公一  
 九州演劇と創造集団 猿渡公一  
 劇評「ただ海燕だけが」(京浜)「なまねこさま」(土の会)「オキナワ」(はぐるま)

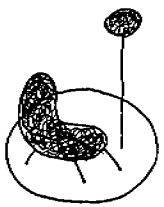
- るま)「われら兄弟」(未来)「どん底」(京都合同)  
 戯曲 傷 黒沢参吉  
 第十五号(一九七〇年八月)  
 キメこまかく執拗な活動を 黒沢参吉  
 複雑さを形でとらまえるな 仲 武司  
 70演劇行動報告(京浜・三劇協・四紀会・月曜会・道演集・未来)  
 私観「東リ演70演劇」 萩坂桃彦  
 第十六号(一九七〇年十一月)  
 東西リ演合同ゼミナール特集  
 (報告・感想・アンケート・まとめ)  
 劇評「小さな駅のある物語」(兵庫劇協)「盛綱騒動」(はぐるま)  
 演劇の根本的なもの 陣ノ内鎮  
 第十七号(一九七一年三月)  
 ずっしりと重い充実の12時間 森本景文  
 普及は運動の鏡である しばやしひろし  
 岡山職演集団と交流して 安部智律  
 青年団演劇に「テント」から 柏原武蔵  
 劇評「ひろしまの冬」(合同)「日本の言論一九六一」(関芸)「漁港」(静芸)「神通川」(やまなみ)「第8回演劇祭」(東働演)  
 戯曲 白い鴉あるいはころもがえ 小坂 忠  
 別記 14号より「関西における戦前プロレタリア演劇の研究」(大岡欽治)を連載。

あとがき

お約束どおり本号は、「地方選挙と劇団活動」の特集をいたしました。読者の手にわたるのは、そのあとにきた参議院選の結果も出てしまった頃というわけで、或はムダなことをしているものだと云われるかもしれません。  
 しかし、読んでいただければわかりますが、意図したのは、選挙とかかわった、劇団活動における創造の問題であります。  
 59%という、参議院選での、低い投票率から、脱政党とか、政治なんて使っています、ティンシュペーだとか、いろいろ政治への不信が云われていますが、実は、こうしたパチルスにも似た類隣こそが、私たちの敵ではないでしょうか。  
 大衆との倦まざる対話——それが、私たちの演劇運動の基本であります。その意味でも、この小冊子は、極めてユニークな、日本でたった一つの演劇誌といえます。この機関誌の確保に一層のあたたかいご支持を。

(もも)

- 演劇制作スタッフ派遣 ● 舞台用器材貸出・販売
- 舞台照明操作・プラン作製・一式引受



組合や会社の文化祭・サークルの発表会とき  
 どんご相談でも気軽にお申越しください。  
 特にサークルのしごとは、サークルの身になって  
 いろいろな経験を生かし、経費の点もご便宜をは  
 かります。……………ぜひどうぞ!!

株式会社 第一ステージサービス

代表・川崎ひろし  
 東京都渋谷区代々木2-12・西原ビル TEL.03-370-0487(代表)

演劇会議 第一八号 一九七一年七月一日発行

定価 一八〇円(送料三五円)

編集委員

萩坂桃彦・塚越松雄・黒沢参吉

しばやしひろし・森本景文

藤沢 薫・新木祥之・猿渡公一

発行所

川崎市小田四二八一七

萩坂 方

電話 〇四四 〇七七五